

WIFE

女の言いたい放題誌

わいふ NO.212.



特別寄稿

田口けい子

私の『ボランティア介護』日誌・パートII

ワンポイント情報

家庭のなかの危険

座談会

わいふ二一〇号会評

マスコミにない「わいふのおもしろさ」

特別寄稿

荻原麻実

海外日本人ムラのゆううつ

農文協

●内容見本呈

からだと心の健康を!

東京都港区赤坂7-6-1
電話03(585)1141(代)

☆香りをピンにいっばいつめて☆ 野山の草木で酒づくり

●橋本郁三著 野生植物の持ち味をリキユールに抽出して、自然をじっくり味わう特選150種の酒づくり。 新刊●1300円

☆新しい味を見つける——☆ とって おき 山菜利用術

●橋本郁三著 雪どけの溪流に春を先どりする山菜。美味しい食べ方、採り方を120種にわたり、豊富な写真とイラストで紹介。旅が2倍に楽しめる! 新刊●1300円

自然と人間を結ぶ 5月号

自然教育活動 4 250円千50

《特集》動物の世界と子どもたち
動物や虫を素材に教材化を各氏が語る/小原秀雄・黒田弘行/他

●見本誌進呈 (ハガキに住所・氏名・年齢・職業をご記入のうえ下記へ。)

反響続々! 重版出来!



松村龍雄 群馬大学医学部客員教授 著
食べものアレルギーは必ず治ります!
乳幼児の場合には、一、二、三カ月で治ります。遅く始めた学童であつても二、三カ月でめどががつく、根本的な食物療法。指導解説書。 ●定価1000円

☆案外多い食物のアレルギーを食べて治す方法
で治す **子どものアレルギー!**



好評発売中!

●定価2800円
A5判 丸背 製本
表紙クロス入り 平均
カバー付 本文紙16頁
36頁カラー 口絵16頁

●日本の食生活全集の既刊19巻
1北海道 2青森 3岩手 5秋田
7福島 8茨城 13東京 15新潟 18福井
20長野 22静岡 24三重 26京都 33岡山
34広島 39高知 40福岡 42長崎 43熊本

☆かけがえない命「食」にかけた長寿の島の人々の伝統を今再現!
聞き書 **沖縄の食事**
好評! 図東京の食事
中国やヤマトと交流しながら個性ある食文化を染めた沖縄。その長寿の島々の庶民料理の数々を、聞き書きと写真で紹介。「食」を通しての文化的視点から重

女が変わった! 男が変わった!

男と女講座

青木雨彦編 ●定価1500円

「強くなった女」と「男にこだわらない男」—
古い男論・女論にとらわれていたら、いい
関係はつくれない。男と女、夫婦、愛、結
婚、家庭、人生……いま、何が、どう変わ
ろうとしているのか?



フォーユー 東京都文京区後楽1-1-10
☎03(814)3261 ☎112

発売 日本実業出版社
☎03(814)5161

WIFE

わいふ NO.212.

いいたい放題 したい放題
書きたい放題 よみたい放題の
投稿誌が わいふです
人間 ほんとにやりたいことは やれるもの
ウジウジ・イライラふり捨てて
思いっきりやれば 気ははれる
いろいろな人のいろいろな時の
いろいろな心を材料にして
二か月に一回 わいふが出来あがるのです
仕上げに適量の“ユーモア”と
“思いやり”のスパイスを！
ピリッとくるか まろやかになるか
それはあなたの“うで”次第！



WIFE

vol. NO.212

まぐじ

草の根女性議員③

神奈川県逗子市議会議員・沢 光代さん
写真・佐々木恵子 文・原田静枝

オピニオン

田辺佐智子・T・I・前崎みどり・日高あき子
関根洋子・大沢陽子・新井祥子・小江鐘子

海外日本人ムラの

ゆううつ・荻原麻実

職場は多面体

作田美恵子・たかのようこ

4

9

19

28

85

86

95

98

107

サークルだより

連載②

私の財テク武者修行・市川千歌子

読んでみました

和田好子・松戸しほみ・たまき久美

私の「ボランティア介護」

日誌・パートII・田口けい子

ワンポイント情報

家庭のなかの危険

綿貫厚子・田岡あかね・人間田礼子・赤松ますみ

エッセイスト・クラブ

片山節・小川由里・桜井淳子・仲里貞子
匿名・家守恭子・高宮みか

32

⑨ 座談会 わいふ二一号合評

マスコミにない「わいふ」の おもしろさ

市川千歌子・亀山和枝・鈴木光子
高宮みか・林有子・山辺伸子・和田美代子

46

女と男

佐藤玲子・島山徹子・匿名

58

みんな悩んで

ママになる②・阿部美砂江

64

サブレシーブ

長野英子・のむらさなえ

74

子ども中ども大ども

日比野都・川崎紘子・十文字美恵
菊池喜恵子・吉崎玲子

76

106

家族の肖像

服部親子・秋野美恵子・嶋田たい子
橋度秀子・長縄幸子

情報コーナー

連載⑨

八路軍とともに・法村香音子

ブック情報

わいわいガヤガヤ

近藤美子・鈴木昌子・小林千歳・田中える
宮崎千鶴子・近藤圭子・溝内道子・岩崎八恵
三上初美・村上みどり・匿名・若林美智子

特集テーマ原稿募集

投稿規定

編集だより

表紙イラスト・小沢恵子

イラスト●おのおのまもる・岡田正子・小沢恵子

カステラネンコ・小宅昌枝・早乙女光子

角南有加・田井亮子・堀切潤子

レイアウト●工房はやし AD・林佳恵

116

118

130

132

141

142

144

〈第3回〉



池子の森フェンスの前で

神奈川県逗子市議会議員

沢 光代 さん

写真：佐々木恵子
文：原田静枝

草の根女性議員



市の六分の一を占める池子の森は、動・植物の宝庫。ここに米軍家族の住宅建設、と国が決めたときから、逗子の女達は立ち上がった。「緑と子供を守る市民の会」を結成、市長、議長をリコールし、運営委員長の沢光代さんは市議に立候補。一九八六年四月、第二位の得点で当選した。

女性パワーを結集して戦う



開票速報に見入る



夫の理解も大きな支え

通勤客に「緑を守ろう」とチラシを渡す（逗子駅前）





ホワイトハウス前のリボンパレード

The Woman

MITSUYO-SAWA

賛成派十三、反対派十三のむずかしい議員構成のためか、水面下のかけひきがまかり通る。あまりのひどさに「正々堂々の議論を」と呼びかければ、「PTAじゃないよ」の野次が飛ぶ。敬けんなクリスチャンでもある沢さんは、ガラス張りの議会をめざして必死である。公約実現のため、国内はおろか遠くアメリカにまで足を運ぶ沢さん。その喜びは、母親たちの運動を見ながら育った二世たちが、昨年の市長選で立ち上り、市政監視のグループを結成したこと。逗子の誇りは青い海・豊かな緑。そして世代を超えたパワーなのだ。

夫からの贈りもの 長岡輝子

自分が生きたいと思う生き方を存分に生きた一人の女性の
途方もなく明るい回想録。読めば元氣の出る本！ 昭和初
期以来の新劇の興味つきない裏話も満載。 ●1800円

関根雄二の

春夏篇

おいしい野菜えらび12か月

青果流通のプロが、野菜えらびの秘訣を消費者の立場から
詳しくアドバイス。月別に旬の野菜を紹介するほか、流通
や価格のしくみも平易に解説。 ●980円

配色の手帖

堀内誠二画

ある色がべつの色と上手に組み合わせられたとき、思いもよ
らない楽しさが生まれます。あなたの色彩感覚をいきいき
させる魔法の本。基本色168色。5色刷。 ●1300円

谷川俊太郎、自作を読む

[全3巻]

【第1巻】ことばあそびうた、わらべうた、みみをすます
はなしことばのリズミカルな詩を次々と生み出している詩
人の愛とユーモアに満ちた言葉の実験室。 ●1600円

(続刊) @マザー・グースのうた @生きている / 選詩集

〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-26 電話03-470-6565 振替東京7-23552

ユック舎

東京都文京区本郷2-32-8
☎03-815-6549 発売=批評社
振替=東京1-86349



引き寄せ
ます
は届
けし
ま
す
代
金
03-558-7331
本
お
届
け
し
ま
す
の
詳
細
は
電
話
に
て
告
明
は
03-558-7331
日
の
詳
細
は
電
話
に
て
広
で
注
文
は
電
話
に
て
こ
換
ご
運

千刈あがた著

一四〇〇円

40代はややこしい思惟いそが恣意

女性作家カレンダリ、夏の東京スケッチブック、
性についてまず正直に話そうよ、女による女のた
めのガイドブック、青山南さんの育児エッセイ、
デカダンスは男のものである、「黄色い髪」への
手紙など、身近な人やものをやさしく見つめ、そ
こに見え隠れする「問題」を日常の中で受けとめ
静かに私たちに問いかけてくる68篇のエッセイ。
飯山信子ユック舎編集部編 一三〇〇円

いい男交友録

「女らしさ」と同様に、いままでの「男らしさ」
や「いい男」像もまた、時代の波にさらされてい
る。秋山さと子、高見澤たか子、河野貴代美、柴
門ふみななど十七人の彼女たちの描くそれぞれのいい
男。上野千鶴子、渡辺恒夫、根岸悦子による「座
談会・女と男のいい関係」とは？」も収録。
シリーズ・いまを生きる 11 一〇〇〇円

大人・子ども

小倉千加子 風を野に追うなかれ / インタヴュー
清水真砂子 / 森網江 / ルポ・男にとつての子ど
も / 山田真奈美 / 出産モラトリアムが増えている
? / 青山南 / 人間が増えるとも減る
? / 棚沢直子 / なぜ子どもをほしと思うにいたっ
たか / 笠原智恵子 / 無縁仏にとつての子ども / 対
談 / 藤本和子 / 津野海太郎他

わたし、しっかりホトトギス

石川県小松市 ● 田辺佐智子

「ホトトギス症候群」で知っていますか。ホトトギスは卵を他の鳥の巣に産みつけ、自分でひなを育てないことから、子育てを他人まかせにする親に対して命名された言葉です。命名してくれたのは、県の児童相談所の方々。

ホトトギス症候群の家庭では、子供が傷つき、逃げ場を求めて外に出て非行につながる人が多いし、逆に傷ついても外に出ない子供は登校拒否につながることも多いのだそうです。こうした親は三十代を中心に、(ドキリノ)急増しているため、県では「ホトトギス症候群」のパンフレット三万部をつくり、追放運動を徹底し、「家庭養育回復運動」を展開中なのです。

さて、そのパンフレットには「ホトト

ギス症候群自己診断テスト」がのっています。いくつかを紹介すると、「赤ちゃんを他人に預けて夫婦で旅行に行ったりスキーに行ったりする」「盛り場に子供を連れて行く」「外出の時、子供を他人に預けたことがある」「子供の手相手よりもテレビを見ている」「子供の欠点を他人にこぼす」「子供の前で両親が言い争う」などなど。

わあっ、どうしよう。私、皆あてはまる。パンフレットによると、快樂追及型ホトトギスなんです。それに、以前「子供を残して蒸発してしまいたいと思ったことがある」し、ときどき「子供にやつあたり」することもあったし……。以前の私なら、また落ち込んでいたろうなあ、このパンフレットを見て。以前の私――

そう、出産直後の私。世にいう「母」の姿にならねばと、母乳のなかなか出ぬ自分を責め、一晩中泣くわが子をなぜ愛せぬのかと自分を責めていたころ。

そうじゃないよ、そんなに肩に力を入れないで、子どもができて、産み育てるということとは、人生途上の大きな営み、そこには、人さまさまのストーリーがある、そう教えてくれたのは、近所のお母さん達であり、毛利子来氏もうりたけきでした。だから、「わいふ二一―号・みんな悩んでママになる・阿部美佐江さん」の文章を読んだときはうれしかった。ああ、同じことを思っている人がいるんだと、飛んできて手を握りしめたい気持ちでした。

この「ホトトギス症候群追放運動」について、さまざま意見があると思うし、それはそれでいいと思います。

ただ、このパンフレットにあるように「食事時、眠る時に出来るだけ親が一緒にいる」ことができなかったり、「食事は出来るだけ親が心をこめてつくる」ことができなかったりしても、お母さんはそ

のことで自分を責めて苦しまないでほしい。一つ一つの家族に一つ一つの生活の実情があるのだから。子供の心の成長を妨げる原因となるものは、家庭の外にもたくさんあるのです。それらにもしっかりと目をむけていくことも大切だと思います。

老人福祉手当

東京都・T・I

三月に入って間もなく、区の福祉課の職員だという青年の訪問をうけた。用件はねたきり老人の実態調査だという。

失礼します、の言葉とともに母の枕もとへ直行した彼の調査とやらは、日常生活の簡単な質問でおわった。あとで聞くところ、この調査によって従来から支給されていた「老人福祉手当」を打ち切られた家庭がかなりあったという。

問題の福祉手当とは、七十歳以上の寝たきり老人に毎月三万七千円、六十五歳以上七十歳未満は三万二千元で、四か月分をまとめて民生委員から届けられる。

ちなみに、私は一歳ぐらいから、親もとを離れて祖父母のもとで育ててもらいました。祖父母も商売しており、なかなか私の子育て大変だったようです。それでも、祖父母によって心も体も育ててもらいました。さて、私も八か月のわが子と、よたよたしつつも、歩いていくぞ。

たまたまわが家が最初にうけとった一昨年の秋から一挙に倍額の三万五千元となり、この一年あまりの間に二千元が加算されている。

受給の対象となるのは六十五歳以上で半年以上寝たきりであり、その状態が続くと認められること。書類提出のおりにくわしい日常生活について細かく記入し、医師または福祉関係の職員、民生委員に承認を依頼する。

わが家が紹介していただいた民生委員のAさんによると、自分が扱ったケースのなかで、当然、床のうえの生活をして

いるはずの当人と道でばったり、の例や、リハビリの帰りだというその本人に出会うこともあったという。といってもいずれも杖を頼りのおぼつかない足どりではあるが。

——寝たきりの状態が回復すれば、受給資格は消滅する——の条文がチラつき、こちらのほうでうろたえちゃって、と苦笑していた。

確かに月々三万七千円といえば、老人福祉年金を上回る額だけに、頂けるものならば……ソクソク、のお年寄りもなかにはいるだろう。

今回の抜き打ち調査は、あまりにも増加する寝たきり老人に頭を抱え、お目付役みずからのお出ましであったのか、知る由もない。

伝え聞いたところによると、受給対象外とみなしたおとしよりに「一応はご遠慮いただきますが、いずれまた差しあげますよ」と慰めたという。

本来ならば、たとえ福祉手当を打ち切られても、もとの体に戻りたいと願うだろうし、老いてお上からのお手当をアテ



にするなど辛いはずだろうに、と切ない
おもいが込みあげる。

四か月ごとに十四万なにがし入りの白
い封筒を届けて下さるAさんは、どうに
も手に余れば病院へお願いしなさい。ホ
ームのような施設以外なら、どんな遠方
の病院でもこのお金は出ますよ、とそ
の都度くりかえして下さる。

だが治療の手だてもない老婆を引きさ
うけてくれる先は、おいそれとは見付かる

まい。

ところが、寝たきりのお義母さんを都
内の病院へ預けっぱなしの友人によると、
それなりのテはいくらでもあるのだそ
う。

「毎月のお支払いは……たいへんでは
う」

おそるおそる切り出すと、例の福祉年
金でおつりがくるわよ、とわらっていた。

放課後、校庭で遊べない子供達

東京都調布市●前崎みどり(30歳)

去年、長女が小学校に入学しました。
親の私も、現代の小学校がどのようなも
のなのか知りたくて、話し合いの会があ
るたびに、参加してきました。

私は、学校というところは、すべての
子供を中心において、先生と親が話し合
い、努力、協力をするところだ、と何と
なく信じていました。ところが、実際は、
子供にとって良いか悪いか、を考えてい
るのではないということを知りました。

話し合いの席では、毎回先生方から同
じような話がされます。「子供は、遊び
が大切です。たくさんの仲間と遊ぶこと
は、子供同士の思いやりや社会性を身に
つけられることとなります。事故には充
分気をつけて、なるべく遊ばせてあげて
下さい」まったく同感と思い、先生のお
話をうかがっていました。

一年生の一学期ごろは、新しい生活に
なじむことにせいっぱいという感じで

したが、二学期になると、友達も増えてきて、二、三人で遊ぶことが多くなってきました。しばらく家の中で、絵を描いたり、ごっこ遊びをした後、「外に行ってくるね」と、仲間と出かけてゆきます。夕方、帰宅した娘に、「今日はどこで遊んだの？」と聞いてみると、「お店やさんを見てきたの」ということがよくありました。

娘の学校の校区はとても広く、私鉄二駅にまたがっています。一駅電車通学の子供も多く、定期を持って遊びに行く子供もあります。(わが娘もそうです)駅前は商店街で、遊べる場所もなく、娘の「お店やさんめぐりしてきたの」というのも仕方ないことなのかなあと思っていました。でも、ひとつ、ふたつ、小さな公園はあるし、路地で、遊ぶことも、できないわけではありません。気になりながらも、二学期が終わりました。

子供の生活を見て、夫と話をしているうちに、「子供同士が遊べる場所がないこと、校区が広いため、帰宅してから友達の家に行くまで、時間がかかり、遊ぶ

時間が充分にないこと」などが、わかりはじめました。

一年生は、授業が早く終わるので、学校を閉門する時間まで、校庭で遊ばせてもらえないのだろうかと思い、三学期の話し合いの席上で、発言してみました。

担任の先生の答えは「授業が終わったら、すぐ帰宅するように言っています。午後は、高学年の体育の授業で、サッカーをすることもあり、ボールが当たると危険ですから」とのことでした。私は聞きました。「サッカーの授業は、年に何時間あるのですか? その時だけは早く帰らせるということでも良いのですが」先生は、「高学年は、授業中ですから、校庭がさわがしいと、授業のさまたげになりますので」とおっしゃいました。でも、体育の授業で、校庭でレコードをかけていることもあるのです。数人の子供が、校庭で遊んでいることが、授業のさまたげになるとは思いませんでした。

その後、クラスの委員長の方に、その件について、委員会の席上で学校側に聞いて欲しいとお願ひしてみました。学校

側の返事は、「親の要望が強ければ、考えてみる」とのことでした。

先生方も、親も、子供に安全な遊び場がないことを、充分に知っています。それなのに……。

遊びは大切だと、毎回親に話をしていく学校側の対応がこれなのです。「親の要望が強ければ……」ではなく、学校として、子供の遊び場について、どう考えているのか、そこが知りたいと私は思うのです。

平日の学校閉門後、土曜午後、日曜日に校庭開放するには、管理の面でいろいろあり、実現するには、多少の時間がかかると思います。

でも、平日の閉門前、先生方が、学校にいらっしゃる間、子供同士、校庭で遊ぶことが、なぜ許されないので、まったく納得のいかないことです。(閉門は、三時五十分)

放課後、校庭で遊べたら、たくさん友達と遊べ、遊びは次々と展開し、子供同士でルールを作ったり、時には、がま

んし、時には自己主張し、勉強以外で、お互いに相手を認め合い、思いやる気持ちが育つと思うのです。そういう心と体を育てるということについて、共に考え、協力し合いたいと思うのです。

学校は、勉強をする所です。でも、遊びの大切さを、先生方も親も気がついているので、遊び場について、先生も親も、努力、協力する必要があるのではないのでしょうか？

まずは、平日、閉門前、子供が遊ぶことを認めてもらい、その後、土曜午後、日曜日の校庭開放を求めて、発言してい

くつもりです。

校庭開放は、小学校の児童に限らず、地域の子供も校庭開放に参加できるようにしてもらいたいと考えています。

広い校庭は、子供達が、思いっきり遊べる場所であって欲しいと、切に願っています。

皆様の地域では、いかがでしょうか？

池袋事件を考える パートII

東京都八王子市●日高あき子

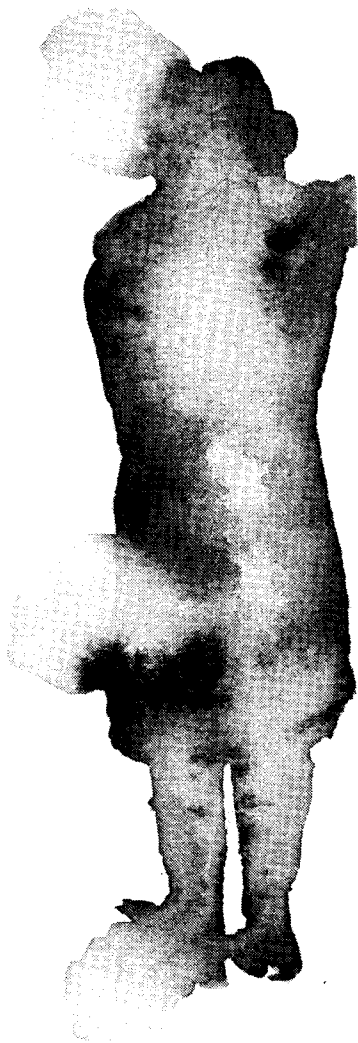
ねえ、聞いてよ。こんなことってある？

家に侵入した男性をバットで殴り死亡させた銀行員が起訴猶予処分。新聞の記事がふるっている。「市民の防衛行為について極めて寛大な判断」「家族の安全を思いやった単身赴任者の心情を考慮し

た措置」ですって。

池袋のホテルで買春男性の異常行為から逃げようと相手のナイフで刺した結果、死亡させてしまった女性Aさんは、殺人罪で三年の実刑（東京地裁）。

「女はお強い男性から守られてこそカワ



「イイ。男に反撃する女はヒドイ目にあわせてやる」

そんな男達の大合唱が聞こえてこない？
新聞記事では、この銀行員Bさん、侵入した男性が逃げ出したのを、五十メートルも追って一撃のもとに死亡させている。罪名がAさんは殺人、Bさんは傷害致死とは、どう考えたって逆じゃない？

Aさんは「生きて帰れないと思い、刺して相手がひるんだすきに部屋から逃げようとしたができてなくて、追いかける相手から逃げ回るだけ」だったのが「悪質な犯行」ときめつけられる。

男性は家族を守るための暴力がむしろ讃えられ、女性には自分の生命を守る行為が裁かれる。これでは男性はますます攻撃的に、女性はますます消極的に、と言うようなもの。

密室で屈強な男性に追い回されたら、誰だって同じ行動をとるしかないと思わ

れるAさんに対して「他に方法がなかったわけでもない」と説得力のないことを言った司法はBさんには「度々被害にあっていたなら、警察に保護を依頼することもできなかったわけでもない」とは言わないのかしら。

どうして？ Bさんが銀行員で、相手が作業員だから？

池袋事件で裁かれるAさんは売春婦で、相手はN T T社員だから？

すべて国民は法の下に平等と謳っているのは、どこの国の憲法だったっけ？

結婚と売春のはざま

千葉県千葉市・関根 洋子

以前、わいふ誌上で、妻も一種の娼婦である、と書いたら、友人に怒られた。

夫婦は愛情によって成り立つものではないか、それを「体売っている」なんて言われるのは嫌だ、というのであった。

娼婦が男を愛しても、男が娼婦を愛しても、娼婦が娼婦であることに変わりはない。家庭の経済的基盤を男に握られて

いるなら、夫の稼いでくる金で生活しているなら、妻もまた一種の娼婦である。（私も含めて）

また、わいふ誌上で、売春制度の過酷さを知らないから、そんなことを言うのだ、とも批判された。たしかに一時代前の遊女たち、赤線の女たちは、奴隷として扱われ、今私に手にしている自由など





とは全く縁のない所でその肉体をきりきざまれていただろう。歴史は女を男の下に置いてきたが、すべての女たちが同じように圧迫されてきたわけではない。さて、私が今、考えているのは、フィリピンから来た女たちのことである。

農村に嫁の来手がないから、フィリピンの女を呼んでくる。金を出して妻を買

う。これこそ結婚＝売春の、典型例みたいなものではないか。

ただし、日本の農村青年たちがフィリピンの女たちを妻にすることを止め、日本の男たち全体が娼婦であるフィリピンの女たちを買うのを止めたら、その分、フィリピンでは、確実に飢えが進行するのだ。

売買春制批判の盲点はそこにあって、男たちに買春を止めさせよう、それがフィリピンの女に対する日本の女の責任だ、と言われると、私はいつも、そう言われると娼婦たちは困ってしまうだろうなあと考え。彼女たちは、生きるための糧を奪われてしまうではないか。では、どうすればいいのか。

決め手になる答えはない。ただ、私は思うのであるが、男が女を

養う現在の結婚制度に何の疑問も抱かず養われて当然だと思っていて、一段高いところから娼婦たちに同情していても、決して娼婦たちとの精神の交流は生まれにくいのではないか。

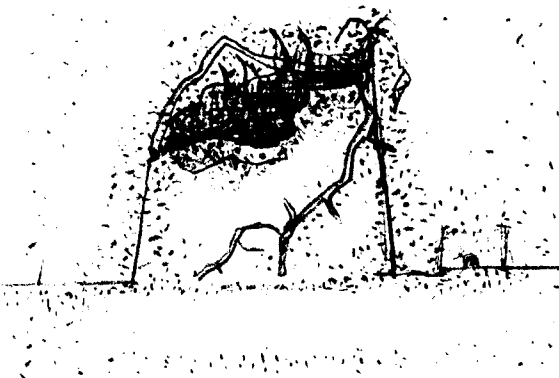
経済的自立を今、手にしていないから、悪いとは言わない。家庭にいないのはだけの理由があり、また私も含めてパート主婦が本物の経済的自立が得られないのは、女たち自身に原因があるのではない。それでも、と私は思うのである。売買春をこの社会から追放し、結婚制の中の売買春的要素を排除していくためには、まず、自分が、働いてお金を稼ぐことができるように自立の準備をすることではないか、と。でなければ、娼婦たちに笑われるだけであろう。

原発はいらない

東京都武蔵村山市●大沢 陽子

私も生協の品を共同購入している。職員は五人。フルタイムで働いている人が

二人、パートの人が一人、来月赤ちゃんが生まれる人と私。品物は一人分ずつ仕



分けされて届くわけではないから、パートをやりくりして来た人と私が、わが家で仕分けをする。共同購入ってなかなか面倒なものだ、と思っているところに、今年は班から一人役員を出す番だといわれた。八班ほどで毎年順ぐりに役員を出している。番にあたったから抜けるとはいいたくない。四人は会合に出られないという。で、私が出ることになった。六地域から一人ずつ出て来た人たちが

集まって、委員長、副委員長、行政、生活、広報、会計と役を決める日、みんな小さなお子さんをおもちで、手のかかる子のない私が委員長をひき受けるはめになった。

班から出て行く時も、委員長の役をひき受ける時も、仕方なくてだった。でも、ひき受けたからには、この機会をしっかりと生かそうと思う。

四月初めの委員会の時、会が終わってから甘庶珠恵子さんの「まだ、まにあうのなら」という反原発の小冊子をみんなに紹介した。今日の新旧合同委員会の時、昨日届いた「わいふ」の中の反原発の文を二つ（国弘さん、山田さんご了承ください）と新聞の切り抜きをコピーして行って配った。五十一人集まるはずの来週の班長会の時にも、生協に入っている人

もない人もたくさん集まるはずの生活展の時にも、原発廃止への心の動くような資料をみんなに手渡そうと思う。

定期的にある生協の会合の時だけでなく、クラス会、生け花の会、友人の集まりと、どんな会合の時もコピーや小冊子を用意して行き、友人や親兄弟に手紙を送る時もコピーを同封しよう。生協に委員会、班長会などの報告書を提出する時も。そのうちには、核兵器と同様に原発の廃止を求めて生協も動き出すに違いない。そうなれば、自費でコツコツとコピーしたり配ったりしないですむようになる。

原発はこわい。それが日本にはもう三十四基もあり、電力は余っているというのに、このうえどんどん増やそうとしているのだそう。急がなければ、と思う。

田舎の主婦にも五分の魂

静岡県御殿場市●新井 祥子(27歳)

フジのお山のフモトに住んで約一年。自分がつくづく、世知にウトくなくなったと

思う。先日、久々に東京を歩いて感じた。一年前まで、東京で暮らしていたという

青井和夫編著
**高学歴女性の
 ライフコース**

津田塾大学出身者の世
 代間比較 500名の
 面接調査。9000円千300

L.A.ポロク/中地克子訳
忘れられた子どもたち

1500-1900年の親子関
 係 アリエス批判の社
 会史。4500円千300

織田元子
フェミニズム批評

理論化をめざして
 文学テキストにおける
 性差別を廃し文化の改
 変へ向う。1800円千250

スタンレー、ワイズ
 矢野和江訳
**フェミニズム社会科学
 に向って**

女性の日常的体験と意
 識を中心とする方法
 論を提起。2200円千250

N.ソコロフ/江原由美子他訳
お金と愛情の間

マルクス主義フェミニズ
 ムの展開 女性労働の
 徹底分析。3800円千300

R.リジエストローム他
 横村久子訳

スウェーデン/
女性解放の光と影

女と男の新しい役割。
 2200円千300

J.ドノヴァン
 小池和子訳
フェミニストの理論

女性学の成果を駆使し
 た米国のフェミニズム
 思想史。3500円千300



勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15
 ☎814-6861 (編東京5-175253)

のに。
 旧友など、ことあるごとに忠告してく
 れる。「何かやってる？ ポーツと主婦
 業だけやっていると、バカになっちゃうよ。
 子離れができないし」彼女は現役の幼稚
 園教諭で、母親どもにいつも閉口させら
 れているとか。
 東京に住んでいた時の公園友達(？)
 も、皆、三年保育に子どもを入园させ、
 再就職したり、下の子の育児に精を出し
 たり、脱サラした夫の手伝いを始めたり、
 と充実しているらしい。
 私は、ポーツとフジ山をながめ(実は、
 この地は雨や霧がとて多く、週の半分
 も見られないのだが)、第二子をつくるで
 もなし、仕事をするでもなし、かといっ

て、家事を完璧にやるでもなし……。「し
 ょーがない、グータラ専業主婦」になっ
 た、思われているみたいだ。
 しかし……。
 私は、東京にいたとき、フェミニズム
 関係の本をせっせと読みあさり、早く子
 どもが大きくなるといい、仕事や勉強が
 したい、早く経済力がほしい……とアレ
 コレ考えていたものだ。それが、地価上
 昇のアオリを喰って、夫の会社がそっく
 り移転。計画は変更もいところ。
 やって来た地は、ナント、夕刊が来な
 い。翌朝の朝刊と一緒にやって来る。本
 屋はあるが、スペースの半分以上はマン
 ガ。大学も短大も専門学校もなく、高校
 を卒業しても「工員」になればオンの

字。よって、主婦の再就職なんて夢物語。
 カルチャースクールや大学の公開講座な
 んて異次元の話。
 私は、「女の自立」を叫んでいるおエラ
 い女史に訊いてみたい。この地に住んで、
 仕事も、学ぶ術も、何もない中でも、同
 じことが言えるのか、と。時給四百五十
 円で、ネジの仕分けをし、高い保育料を
 捻出し、子どもが熱を出したら二十キロ
 先の病院に運ぶしかない。息ヌキや家事
 の手抜きをしようにも、スーパーの惣菜
 さえ、ロクに揃わないような、レストラ
 ンも殆どないような、そんな中で、同じ
 ことが言えるのか、と。
 私の言っていることは、ヒガミだらう
 と思う。しかし、都会で、親やサービ

・システムやコンビニエンス・ストアの恩恵にどっぷり浸りながら、横文字職業にしている女性に、「私なんか、ここで生まれて育ったから、こうやって、オバサンやってくしかないのよね」と工場のパートに出ている女性の気持ち、わかるのだろうか。私も、東京にいたときは、こんな生活しか出来ない人々のことなど、思いもよらなかった。

私は、独身のときから、いずれ大学に戻ってケースワークを学び直したい（私の前職はケースワーカー）と考えていて、そのために資金をたくわえていたのだが、そのお金で車の免許を取り、自分専用の軽自動車を買った。いつ戻れるか、戻れないかも知れない大学より、現実の「足」が必要になったのだ。

ちなみに、私の住むマンションには、国立大卒の主婦、外国在住経験有の主婦がズラリ揃っていて（皆、東京からの転勤組）、薬剤師・教員・医療技術者などのライセンスを持っている。が、皆、仲良く、テニスやスイミング・スクールで空しさを埋めている。

ラーメンが食べたい

東京都練馬区・小江 鐘子（41歳）

美容奉仕で施設を訪ねるようになって、十か月が過ぎ、すっかり顔なじみになったこのごろ、普段接しているお客様と障害者との違いに気付きました。驚くのは

髪をとかず度に地肌がついてくるような柔かさ。髪の毛に張りがなく、艶もないのです。もちろん筋肉の発達がないために若くても、肥ったお婆さんの感じで、視線だけは澄んでいて幼いままです。

先月、カットしたときは何でもなかった子の後頭部がこすったために、切れたようになっていたので「あら先月はこんな風になっていなかったのに」と、職員に聞くと「肌が弱いから、座ってばかりいるとお尻がかぶれるので、最近は寝かせているんですよ」という返事。

天気が良い日、車椅子で散歩に出掛けると、天下の公道を歩くだけなのに苦情の電話が施設にかかってくるそうです。私が驚いていると、少し会話ができる子

が「私ラーメン屋で、本当のラーメンを食べてみたい」といったそんなとき、私がラーメン屋だったら良かったのに、なごと思います。

私達の生活は自分のことはもちろん、家族のために家事労働や仕事に神経を使い、体を動かすことを余儀なくしているので肌の張りや筋肉を保っているのです。過剰になるとストレスとなり、過労となって健康を害する恐れはありますが、ときどき忙しさに不満を感じながらも、五体満足に生まれた以上は必要だけ頭を使い、生活の範囲での労働には不平より、感謝をしなければいけないと思いました。

半分人形のような生活を送っている重度身障者。会うたびに指をしゃぶっている子。私のカットを喜んでくれているのなら来週も、来月もいこうと私は思う。

（え・岡田正子）

海外日本人ムラのゆううつ

在米 荻原 麻実

「週末ごとにホームパーティーですって？ いいわねえ。私もアメリカで暮らしたい」
日本からの友の手紙にこうあった。違うのよね。パーティーに呼んだり呼ばれたりがステキなどと思わせたなら、私の手紙は説明が不足だったのだ。海外在住日本人の生活実態を、じっくり解説してあげなければ。

夫の在外研究が決まったのは、一昨年の夏。私が学生主婦から兼職主婦になって一年と少しのころのこと。早くも嫌気のさしていた会社にいそいと退職願いを出し、二人で全財産のスーツケース四つを引きずって成田を後にした。実家の母から、私の分の学費までもらって。

中西部の、一応は屈指の都会である当市に着くと、夫の新しい勤め先になる州立大に來ている日本人数人が出迎えてくれた。彼らはみんな夫の母校医学部の関係者で、医科系研究者に限っても、他大学から来た人がまだ大勢いると知ったときは、驚いた。カリフォルニアとは比較にならないが、この市にも日本人学校から日本女性経営の美容室まであったのだ。

車がなければ暮らせない

念願通りにプールつき広い芝生つきのアパートメントの一戸を借りて、アメリカ生活が始まった。

このアパートは古ぼけているが、周囲は郊外の中流住宅地で、区域の学校の程度も高い。

だからこの市の日本人のかなりが、この地区に集まっている。当時は、三軒の日本人家族が歩いていける距離に住んでいた。

歩いていける、ということがこの国ではどんなに異例か、近所をぶらついてみてすぐに分かった。瀟洒な住宅地をぬけるチリ一つない幅広い私道ドクトをどこまで行っても、芝生でスプリングラーが回っているだけ。たまに出会ったのはリスぐらいである。ふと我に返ると、あたりは恐怖を感じるほど人氣がなく、レンガ造りの家々は広い芝生の中に孤立して静まり返っている。

アメリカの郊外は、初めから歩くためには作られていない。一番近いスーパーマーケットまで往復一時間。郵便局には一時間半。しかも中級以上の住宅地にはバスさえ通っていない。誰も必要としないし、バスや地下鉄が通って車を持ってない貧乏人が移住してくるのを、住民が嫌うからである。こうした社会では、もし妻が運転できないか二台目の車がないと、身体障害者より行動が制約されてしまう。

しかし、研究職の人の在米期間は普通一〜二年と短し、こちらの大学の出す給料もわずかだから、誰もが仮住まいという意識で切りつめている。円高で事情が変わったとはいえ、一台しか車のない家庭が多い。日本の免許があっても、右側通行が怖い、と一切運転しない女性も珍しくない。言葉と慣れない土地への不安が、いっそう彼女達を消極的にしてしまう。—— 買い物も、銀行も、子供を歯医者につれて行くのも、夫に同行してもらおうか、車のある知り合いにピックアップしてもらわなければならない。美しい芝生と木立ちに囲まれたコンドミニアムの中で、子供がスクールバスで行ってしまった後は、一人ぼんやりするほかないのだ。そしてテレビも新聞もよく理解できないとしたら……。

後日訪ねた知人のいるワシントンでも、事情はあまり変わらないようだ。市内の交通網は整っているが、もよりの地下鉄ドクトの駅までは車でないと行けないから。犯罪を恐れて、美術館にすら一人では行かない人もいた。この国によくある砂漠の真ん中の研究所に派遣された別の知人は、もっとつらい思いをしているらしい。



定例のお茶会

軟禁状態を解消するには、手っとり早い方法がある。

「お茶にいらっしやいませんか？ ご近所の方も見えるから」引越してきて数日後、近くの夫の先輩の奥様と呼んで下さった。集まったのは、なんと同じ大学の研究所か病院に留学中の夫を持つ人ばかり。たびたび顔を合わせているのだと分かった。私は喜んで、ファーストネームで呼びあうお仲間に加わった。

こういう会のとぎどきの呼び物は、ホステスお手製のクッキーとか、日本から届いた和菓子である。私は料理の本を買いこんで、自分でもパイを焼いて彼女達を呼んだりした。ところで、このお茶会のメンバーは三十代始めから後半の人達で、私が一番若く、一人だけ子供がいない。話題は自然に子供と夫のことに集中する。子無し女は、オムツが取れたの取れないのという話をする同性に批判的なものなのだ。彼女達が、一人だけ話の輪から外れている私を気遣って、「麻実さんもすぐに経験なさるから……」と先輩らしくご教示を垂れば、しおらしく相槌はうちながら反発する。仕事をやめ、社会とのつながりを失って「荻原先生の奥様」になってしまった私は、焦り始めていた。

来て一か月ほど経ったそのころ。二台目の車もポンコツながら手に入り、州の免許も取って、地図を広げながら一人で市内探検ができるようになった。私はすぐ、夫の大学併設の、外国人向け英語コースに編入した。授業は週たった二回でも、久しぶりに教室で恥をかきながら学んだり、徹夜でエッセイを仕上げるのは、生活に張りあいを与えてくれる。

そして、同じクラスの仲間たち。——バーガーショップの下働きをしている途上国の留学生。共産圏の祖国に残った家族を呼びよせようと、職を探している中年の医師。戦火の中東から一人で「敵国」にやってきた女子学生、ライラ。他国で暮らす者同士は強く結びつく。特にライラは私が一番心を許せる人になった。彼らを知るにつれ、ぬるま湯のお茶会はあまりに隔たった世界に思えてきた。



しかし、一定の顔ぶれでの交際にはルールがある。習慣化したおつき合いは義務に準ずるということだ。お互いに鼻につけてきたころシマッタと思っても、遅い。翌日は試験でも、笑顔だけは作って出かけることになる。たぶん、誰もがこうしたうっとうしさは感じながらも、疎外されることを恐れて顔を揃えているのだろう。

井戸端社交界というものが分かった、と私は思った。

企業ムラ

そんな時期に、英語コースでK子さんと知りあった。彼女は三歳の一人っ子を大学の保育室に預けて授業に出ている。K子さんの夫はこの市に進出した日系企業R社のエンジニアで、可愛い白い家が並ぶ彼女達のタウンハウスには、他にもR社員が何家族も住んでいる。ふとしたことで、お互いが日本人ムラの煩わしさに悩む「同志」と分かり、グチをこぼしあって意気投合した。

R社ムラは日本の社宅がアメリカに建っているようなものだから、その密着度は、自由業的な医師・研究者集団の我が大学ムラの比ではない。しかも会社の指揮系統が私生活にまで及んで、夫達は支社長の気分でゴルフに狩り出され、妻達は部長夫人の召集一下、ケーク作りの会にはせ参じるのだ。

K子さんのコンドミニウムはヒラ社員専用だそうで、入社年度も収入もほぼ同じ人ばかり。こういうなかで一軒だけの「贅沢」はムラの秩序を乱すらしい。K子さんのための二台目に新車を買おうとした彼女の夫は、「他の奥さんは中古で我慢しているんだから、中古にしなさい」と会社で注意されたそうである。

企業ムラの中では一人一人がライバルだから、絶えず競争意識がからんでくる、とK子さんという。夫たちはゴルフの腕を、英語力を、むろん仕事そのものを張り合い、妻たちは子供の成長の速さを、成績を、遠出の旅行を比較する。K子さんの話を聞くと、その激しさは大学ムラの住人の理解を超えている。例えば、自分が体験で見つけた情報をもらし

たがらないという。よい魚屋、保育園の申し込み法、安い航空券の取り方、病院のかかり方。全て貴重な生活情報であり、大学ムラの中では得意で教えあうことを、隠す。

ところで、K子さんがアメリカに来る以前から彼女のタウンハウスにいる夫人達は、独特のサークルを作っていた。毎日持ち回りで、誰かの家に集まり、母親達はお茶を飲みながら、幼児達と一緒に遊ばせておくのである。自主保育といっても、母親がその場を離れることはできない。活発なK子さんは、一日数時間の不毛なお喋りに音をあげて、グループから抜けてしまった。坊やが学齢に達したとき言葉で苦勞させないように、早くから幼児教室に行かせたくもあった。以来、彼女は何かとムラの除け者にされる。

「主婦の世界ってヤクザみたいなものね。足を洗うのは、命がけよ」

と、K子さんは笑う。閉鎖社会には独特の雰囲気がある。誰かメンバーが成長するか他の行動圏を開拓して、出ていくのを快しとしない、目に見えない牽制と相互監視――。

見えざる戦い

外国での適応力、生活の能力は、一にも二にも語学力にかかっている。第一、フランス語やドイツ語ならまだしも、英語ができなくては「恥ずかしい」。だから、新参者がどのくらい喋れるか、誰が英会話の勉強をしているかは、男女を問わず重大な関心の的になる。そしてお互いの実力は、アメリカ人主催のパーティーのときにすぐ分かる。

英文科出身の夫人は、よほど自信がない限りそれを隠す。英語を習っていることを知られたがらない人も多い。この市のいくつかの大学や協会に英語コースがあるのだが、どこに行っているか話そうとせず、家庭教師についたことをひた隠しにする人もいる。

この心理は私にも大いにある。国文科出身で助かった、と思う。「頑張っていらいっしょから、さぞ上達なさったでしょうね」と言われるのは苦痛だ。対抗心から勉強しているにとられるのは、ましてやり切れない。この探り合いの外にいられるのは、少数の留学経験者だけ。

しかし、どう隠してもすぐ知れ渡ってしまう日本人社会の狭さ。——どこの会社のムラも、日本人学校の線でつながっているのだ。日本食品店も噂の交換所である。

とかく抜けがけを嫌うのは、T子さんの属すW社ムラにも共通らしい。

W社には、社員の妻の語学レッスンを、一年間会社が負担する制度がある。しかし、数年前T子さんが申し込むまで、誰も利用しなかったそう。彼女も「会社にお金を出してもらったりすると、ご主人の出世にひびく」と忠告されたが、かまわず申請して、家庭教師についた。すると、社長から「我が社にも終にこういう積極的な女性が現われたか」とお褒めの言葉があった。以来申し出が相次いで、今では子供が小さく余裕のない人も、無理をしてレッスンを受けているという。

パーティー地獄

この国の人はよくパーティーをする。キャンドルをともした教授の家のダイニングルームで、豪華なディナーセットで供されるフルコース。かいがいしいホストの協力ぶり。暖炉を囲み、カクテルを口に運びながら、この市のまある有名なシンフォニーの批評。——アメリカのインテリとはこういうものか、と思ったものだ（今は彼らのパーティーも戦いの場だと分かったが）。

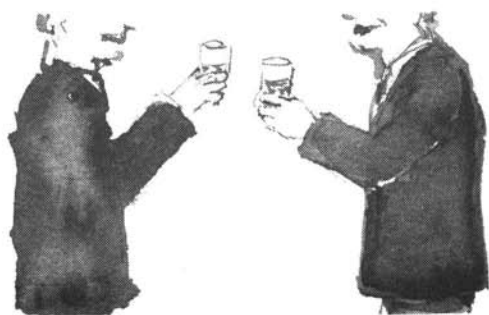
日本人もよくパーティーをする。大抵は日本人だけで。

日本人ムラのホームパーティーの特徴は、子供も一緒ということだ。会話より料理が主体だから、ホステスは五皿も六皿も用意しなければならない。客も何か一皿作っていく。

アメリカの巨大なキューリや固い肉を、いかに和風に、さもなくば中華風に仕立てるかが、女の腕の見せどころ。

人数が多いから、料理はビュッフェ・スタイルで並べる。客は紙皿に自分でとって、椅子は足りないから、カーペットの上に適当に座って、割り箸でいただく。

アメリカ式に子供達は別のテーブルで食べさせることも多い。といっても一人で食べら



れる子ばかりではないから、母親が口に運んでやることになる。自然と、もっと大きい子の母親もそこに集まってお喋りする。子供用のテーブルは、いつしか女子供のためのテーブルとなり、女性はその周りにべったり座ってひしめきあう。子供のない私は、ソファにどっかと腰をおろして研究とゴルフの話に興ずるドクター達と、子供を叱りつける母親達の間で、身の置き場がない。隅に小さくなっていても、必ず私のスカートに誰かのこぼすコーラが飛んでくるのだ。

足が痺れるのを我慢して床に座って、ビールで赤くなった男達を眺めていると、何でこんな屈辱にあうのかと思う。帰宅して夫に不満をぶつけるのが常だ。「いや、僕もよく奥さん達は我慢してるなって思ったよ」

女は我慢するのだ。私も、「内助の功をしてあげる」と恩を着せながら、似たようなバーティーをこれまで何度もした。

最近は少し改良されて、外で集まることもある。四ツ星レストランで、夫婦同伴——ただし妻は子供を置いてこられる人だけで、レディーファーストを守ってのフルコース……というのは私には嬉しいが、やはり釈然としない。自分が楽しむためにベビシッターに預けるなんて、という意識がある限り、夫婦一緒の交際は不可能だ。

ムラのゆううつ

つき合いがある限度以上に濃密になると、濃密であること自体が耐えられなくなってくる。

ここに来て四ヶ月目、アメリカ暮らしが新鮮さを失い始めたころ。私は毎日むやみとイライラし、デイスポーターが唸りをあげて回転しながら生ゴミを碎いているのを見ると、手を突っこみたい衝動に襲われた。誰でも経験する一時期である。ただ、そのとき少なくとも意識の上で私が苦しめられていたのは、この国よりもこの国の日本人ムラだった。

例えば。アパートの駐車場に私の車がなければ、留守は明白だ。A夫人は二人の子供を



スクールバスストップまで送り迎えするのにこのアパートの敷地を通るから、一日四回、私が在宅かどうか確認できることになる。「今日は一日中お忙しかったの？」という言葉、私が聞き流せばよかったのだ。私は気をつかったつもりで、スパーへ行くにも郵便局へ行くにも、近所の車のない人を誘うようにした。有難迷惑だっただろう。

K子さんの話では、過去R社ムラにいたある女性は、ノイローゼになって夫を置いて帰国したそうである。イギリス留学もした彼女がなぜそうなったのか、K子さんも想像するだけなのだが。

ときには目に見える「事件」も起こる。

B夫人がC夫人推薦の保育園を批判してこじれた話。D氏とE氏がゴルフのスコアをめぐって宿敵同士になった話。こんな子供っぽい感情的対立が起こるのも、もともとムラの中に緊張と鬱積があるからに違いない。異文化から受ける圧迫が仲間内にはけ口を求めるということもあるだろう。加えて、ある人が指摘したように、海外に出てきた日本人は（私も含め）アクの強い人間が多いのだ。

「アメリカ人より、日本人同士のつき合いのほうがよっぽど難しい」

この国で暮らす日本人が本音をもらすとき、誰もが口にする言葉だ。学部の留学生も、やっぱり日本人留学生仲間にいちばん神経を遣うという。

夫の学会に同行したときなどに彼の先・後輩を訪ねて一晩もてなされると、その日本人ムラの様子も分かる。アメリカのどこにあっても、それほどの違いはないようだ。砂漠の中の研究所で日本語を話す相手がいないと嘆いている人のほうが、我々自身の厭らしさを見ないですんで幸運である。同国人が二人だけいたら、必ずその二人は親友になれるだろう。

不思議なのは、私の兄弟二人を含め、身内や知人に留学か在外生活をした者は多いのに、この種の苦労話をほとんど聞かなかったことだ。

「日本人とは一切関わらない」と宣言したという噂の夫婦もある。これも淋しい話である。

受難が終わる

去年の冬から春にかけて、大学関係者の日本人家族が相次いで帰国し、ムラの人口が激減した。新しく来た人達は比較的若く、女性も積極的である。これでムラの風通しがぐっとよくなった。

ちょうど、ライラが正規の大学生になるための試験を受けるというので、私も思い切って受験し、一緒に合格した。この国に来てから八か月経っていた。

学生として通いだすまで、私の語学力でついていけるかという不安よりも、ムラの人々の思惑が気懸かりだった。こんなにも他人を気にする自分に腹を立てながら、何日も迷いに迷った。ライラがいなかったらここで挫折していたと思う。私は社会学専攻として登録した。

妙なもので、一度「大学に行っているんです」と白状してしまうと、開き直りができる。「いつお電話してもお留守ね」と言われても、もう平気。だいたい、試験とリサーチペーパーの提出に追われて、気にする余裕もなくなった。いったい何をあんなに遠慮して、車を出すたびにビクビクしていたのかと、今では自分でも理解できない。お茶会も、気の合う人と時折会うのなら、本当に楽しい息抜きだと分かった。K子さんとはその後あまり会えなくなったが、電話で励ましあっている。

結局、ムラのよい子でいたい願望を捨てたとき、私の「嫁いびられ妄想」は終わった。今や大学ムラでは古参の私は、お茶のお誘いもときにはさらりと断わってしまう。「ペーパーがありますので」と本当のことを言って。それでも、こんな言葉を聞くと、私の胸はやっぱりズキリとする。

「まあ、よくおやりになるわねえ。本当によく頑張るわ。よっぽど、お勉強がお好きなのね」

職場は多面体

うどん屋で働く

大阪府箕面市
作田美恵子

「ご主人というのは、元プロ野球の選手で、三日間うどん屋で修業して始めた店なんやて」と、帰宅した夫に着換えるのも待ちかねて話しかける。「それならお前もうどん屋始められるがな」と夫が笑う。

家事の中でも炊事が最も苦手という私が、ひよんなきっかけから、味で評判のうどん屋の厨房で働くことになった。

手足と神経の使いっぱなしでトイレに行く暇もない四時間半の労働に、一日目は精根つき果てぐったり、帰宅後、習慣

の昼寝をしようと思ったが、全身がグニャとつぶれてしまったような疲労感で眠れなかった。

二日目は一時間ほど昼寝をしたが、書きたいことがいっぱいあっても手が震えて万年筆が持てず、読書が精一杯。書きたいときに書け、読みたいときに読めた数日前までの日常がたまらなく恋しかった。

娘との喧嘩で、売り言葉に買い言葉から働く羽目になったが、何を好んでこんなしんどい思いをしなければならぬのか。いや、いつの間にか身についた娘のエリート意識を粉碎するため、現にその効果は出ているのだ。今朝は、娘が私より先に起きて、家族の朝食を用意してくれた。

娘との喧嘩の原因は？ この春大学生になる娘が、私の知人の斡旋によるアルバイトを楽しみに待っていた。一月一万五千元で中学生の五人グループを教える予定だった。その知人は無責任で嘘つきと言われていたから「あのおぼちゃん人は人は悪くないのだけど信用しないほうがいいよ」と忠告していたが、やはり現性のある話ではなかった。落胆している娘に「いくらトップ校生だったからと言って、高校を卒業したばかりでそんなうまい話があるわけがないでしょ。あなたの中学時代の友達の時給、五、六百元で働いているのよ」と言ったものだから、娘は「私は自分をそんなに落としたくないのよ」と言い返してきた。娘のプライドの高さにカッときて後は親子喧嘩。

「一円のコピー機が稼いだがないのによくそんなことが言えるわね」「お母さんか、働く働くと言うけど口先だけやらないの」
挙句の果て、以前から声をかけてくれていた友人に電話、翌日から働くことになった。「あは、お前にそんな重労働が

できるか、毎日図書館へ通って、パートに行ってる振りをしてろ」と夫は反対したが、時給五百円で働く母親の姿から何かを学びとってくれることを期待した。経済観念の希薄な娘にこそ体験させるべきかもしれないが、私にはできなかった。働き始めて三日目の今夜になってようやく字が書けるようになり、はちきれんばかりに頭の中に詰まった珍しい体験をどこから書き出せばいいのか迷ってしま

う。

厨房での三日間は、私の専業主婦としての十五年間がいかにいい加減であったかを、嫌というほど教えてくれた。狭い厨房に効率よく配置された道具類、無駄のない材料の使い方、手際のいい下準備……数えあげればきりが無い。

鉢の洗い方ひとつにも計算し尽くされるほどと感心してしまう。飽食の時代といわれて久しいが、ここにはまだ節約の美德が残っていたと唸らされっぱなしである。が、店主夫婦は単なるケチではないのだ。鍋から出された、幅四、五十セ

ンチもあるだし昆布を見たとき、このうどんが評判いいのはこのだし昆布にあったのだと納得し、金をかけるべきところを心得た店主夫婦に、こんな面があったのかと見直した。

さらに驚いたことには、このだしをとった昆布を塩昆布にして、自由につまめるように店のテーブルに置いてある。これが実にうまい。この夫婦なら塩昆布を売り物にしてもおかしくないはずなのに……。

住宅街のど真ん中にある、このうどん屋は四人掛けのテーブルが五卓あるだけの小さな店だが、周囲に小、中学校、消防署、郵便局などの公共施設があり、昼食時は店と出前で目のまわる忙しさだ。が、それも二時になるとピタリとおさまる。ようやく従業員の昼食となり、店主が作ってくれる昼食の豪華なこと、さらに普段少食の私が飯粒ひとつ残さずたいらげていることに目をまわす。働いた後の食事の美味しさなどというものではな



い。それは働いた後にもまだ食事の美味しさを感ずるゆとりが残っているときのこと、私の場合は気がついたら茶碗が空っぽということである。

三日目にパート仲間のひとりから「ご主人夫婦の十年間の研究成果がすみずみにまで生かされているのよ」とこっそり聞かされ、ああ、やっぱりそうだったのか、とプロ精神の神髄を見た思いで、店主夫婦に尊敬の念さえ覚えた。

体中にこう薬を貼りつけ、肩で息をし、お喋りの私が口も利けないほど疲れ果て、明日は断わろうと思いつつ、店主夫婦の不思議な魅力にひきずられて三日間が終わった。しんどいけれど、好奇心がうずうずするほど面白い、何とも妙な職場に足を踏み入れたものである。娘のためにはせめて一か月は続けねばという意地などあまりのしんどさに消えてしまった。明日は店主夫婦がどんな面を見せてくれるかという好奇心と私の体力との根比べということか。

パートはじらいよ!

埼玉県羽生市
たかのようこ

四月十三日昼、局の二階ホールに非常勤職員五人が集められた。いままでも局幹部との「昼食会」はあったけれど、正副班長という身近な上司も同席していたから、局長・課長・主事だけというのはそれだけで十分異様だった。

昨年四月、ここ羽生市へパートナーの転勤に伴い、多少の悶着はあったが前向きに転居をした。家中がかたづけ、子供が小学校へ幼稚園へ通い始めると私の「職探し」が始まった。

「正社員」にあこがれてはいたが、彼が「三年間の休職派遣を命ずる」のため、パートに的をしぼる。

探し始めて一週間すぎ、郵便局入り口の「非常勤配達(男子)・主婦早朝パート急募」の立て看板が目に入る。いま「職住接近」(彼の会社まで車で十分)という環境の中で、時間のやりくりはで

きそうだったし、初めての土地でも郵便局なら給料の取りっぱぐれ(友人のパート情報では、やめる、やめさせられる、前一か月分の給料を出さない職場があると聞いたことがあった)はないだろうと妙な信用があった。

早速申し込むと、「配達してみませんか?」「でも私、バイクに乗れません」「局の周辺を自転車で配達するんです」という話になった。早朝パート(朝七時二十分〜九時二十分郵便物の区分け作業は、残り時間を自由に使える魅力がある。私のパート歴を振り返ると、外の仕事(教材の配達・野菜の配達・生協の青空「市」)ばかりだったからこの辺で「内勤」をという思いもあったが、早朝パートが満員のため勧められるまま、配達パートをすることに決める。

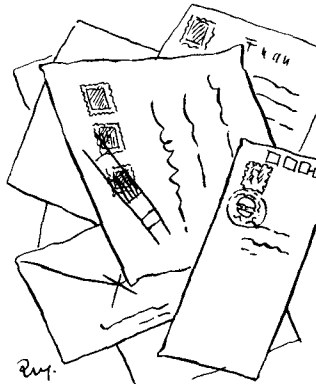
制服・制帽・雨具からズックのはてまで貸与され、自分の区域(五百世帯弱で正職員の担当の約二分の一弱の量)を時(通常五時まで)に局に戻る)内に配達する。郵便物の少ない日は屋前に終わり、多い日でも三時には家に戻れた。

途中に休憩(無給)を入れ夏(冬)休みで家にいる子供に昼食を作ったり、午前中地域活動の集会に出て午後から配達をしたり、融通がきく仕事だった。もちろん雨・風の日は楽ではなかったし、前後にギッシリ郵便物を積んだ自転車の操作に手はマメ足はアザだらけになった。でも一歩外に出れば「私次第」というところが性に合って、二か月すきくらいから道順や家を覚えると、天気の良い日はハナ歌も出るようになった。

以前「昼食会」で、羽生市では初めての主婦による配達パートは評判が良いと聞かされると嬉しくて、子供が健康なこともあったが、年末年始の繁忙期には最長七時間の内勤をし、この一年日曜日以外は、夏に三日正月に二日まとめて休んだだけで、祝日(一部決められた出勤日がある)すら出勤した。

局の用意した「ウナ重」を食べ終えるのと、局長から「……五月末でやめていた方がいい」と切り出される。四月四日付で新規職員が二名入り、「非常勤区」と称される二区に配属となったとき、嫌な

予感があった。
一月十八日年末年始の「打ち上げ会」では、十年でも二十年でも都合のつく限り勤めて下さい」と言われ「一月からは祝日出勤に対し一時間時給プラスで、四月からは年十日の有給休暇がとれる」という有難い話さえあった。実際、病気で



二十日休んだ彼女もクビにならず職場復帰でき、パートは理由はどうあれ「三日休んだらクビ」という通念(?)はここにはなく安心感は増していった。

三月二十九日六十三年度に向けての「懇親会」で、「ツウク(担当区域を替えること)しますから」と言われ、パート同士で自分の区域の情報交換をして、

「あの人のところがいい」とか「ここにいったら大変そう」とか、まるで新入社員のように浮かれていた。

三月三十日〜四月三日に何があったのか? 局長曰く、「県内のことと同じ規模の局の多くが新規採用をし、当局としましても評判の良い皆様にやめていただくことは、実に残念なことです」新聞やテレビで見聞きする「行政指導」という言葉が頭を横切る。「早朝と夕方(四時〜七時)の区分けの仕事、時給は五百四十円(配達パートは六百五十円)ですが、一人分空けてあります」と、再就職(?)の気配りも見せる。いままで自分でやめたことはあったが「クビ切り」は初めてで、「もしや……?」と思っていたものの気は重い。

午後、やり残した郵便物を配達しながらフツと出た歌は、M……フントオドリヨクノカイモナク キョオヲモナミダノキョオヲモナミダノヒガオチル ヒイガアオチル
ご存じ「フーテンの寅さん」の主題歌だった。(え・田井亮子)



しあわせ

東京都 片山 節

庭の辛夷の花が、たった一つだけ今年初めて咲いた。嬉しくて毎日、二、三度は眺める。実生から育てた枇杷が初めて実をつけている。今年は何か良いことがありそうだ……などとさえ思う。

キウイも今年こそは実がなるかな？ 狭い庭だけど、私は花や木が好きで、花屋さんの前を通るたびに何か買ってきて植えずにはいられない。雑草の花も好きで見つけると嬉しく、しばらく眺めてしまう。

年齢のせいか、病気をしたせいか、最近是小さなことに喜びを見出し、「有難い」とか「幸せだ」と、よく思うようになった。

健康な人は、歩けることも、目の見えることも当然のことで、それに感謝するということは恐らくないであろう。病を得て、一応危機を脱して（他人様と同じようによくは見えていないにしても）、とにかく見えるってことは本当に有難いと思う。ようやく体のほうも治り始め、どこも痛くなくて歩けるって実に素晴らしいと感謝する。不十分でも残っているもの、与えられているものに対して、ようやく感謝できるようになった。

今まで、欲張りだったと思う。完全な健康体を持ちたい、あれも学びたい、これもやりたい、もっと活躍したいと一生懸命だった。自分自身に対しても、こうあるべきだ、家族に対しても、もっと、こうあって欲しいなどと期待し、感謝することを忘れていたように思う。自分自身にだって少しは感謝したほうがよいと思う。努力しているわりに向上していないけど、もともと凡才なのだから、これぐらいやれば上等と、たまには褒めてやることにしよう。そうでないと劣等感に悩まされて不幸だ。

子供だって向上しようと思っっているだろう。そ

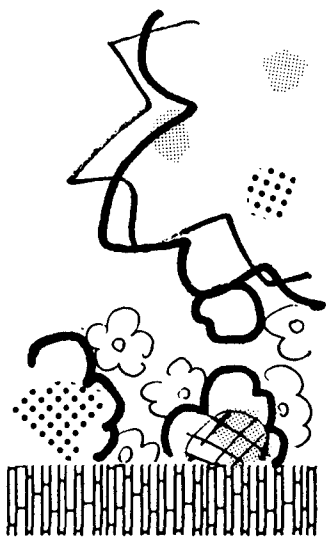
れを傍から、少しは勉強しなさい、本も読みなさい、片づけなさい、ナドと小言を言うことはないのじゃないかと思い始めた。考えてみれば、親の子にしては上等だろうし、元気でいてくれて、愛する者が傍にいてくれるのは有難いことだ。(こうして、娘達と一緒に住める年月も、さほど長くないだろうし)

私が、文句を言うのを一切やめ、感謝の気持ちを持ち始めてから、子供達はとても良くなったし、夫もやさしくなった。今まで、自分が変わらないで相手を変えようとしていたかも知れない。「有難い」と思えるようになってから、人間嫌いだっただけが、ようやく人付き合いが苦にならなくなった。

生きていると、本当に辛いことはいっぱいある。いっそ死んでしまいたいと思うこともある。でも「ああ、生きててよかった」と思うこともたくさんあるではないか。そう、病気だって、失敗だって、生きてるからするんです。(死んでしまいたらできません) 片想いだって、いい人があるの世にいてくれるだけでも幸せというものです。以前は、強く、賢くなりたいたいに切に願った。強いことは賢いことであり、賢いということは、今あることを幸せに感じることで、最近思うよう

になった。

幸福を願わない人は恐らく一人もいないと思う。人生の目標は、人それぞれ異なるであろうが、煎じ詰めれば、幸福の追求ということになるであろう。「幸福」の定義もまた、各人違うと思う。



せとは未来に希望の持てること」という定義もあるけれど、中年としては、そう考えると、ちょっと辛い。(未来がどれだけ残っているか分からないもの……) 「幸福は満足に在り」という諺が、よくやく実感として分かるようになった。そう、「嬉しい」「有難い」と思うことが幸せへの第一歩であり、そして究極のカギであると思う。ちっぴけな幸せと笑う勿れ。「幸せな人が勝ち」という言葉もあるのです。

犬疲れ

埼玉県行田市

小川 由里

オバサンはハヤテ（疾風）のように現われてハヤテのように去って行った。月光仮面みたいに。でも、月光仮面が去って行ったあとに残るのは爽快である。ヨカッタ、という素朴な安心感である。

オバサンはそうではなかった。私の心に鉛をぶち込んで去って行ったのだった。

「犬をなんとかして下さい。前からうるさくて。うちは夜勤がいるんですから。すみませんがなんとかして下さいよ」

早口にこう言うのだった。午前八時、早々と浄化槽の点検に清掃業者が来て、飼犬が華々しく吠え立っている最中のできごとであった。

私は二重にショックを受けた。

犬は吠えるもの。人がくれば吠えるのは当然である。のべつまくなしに吠えているわけではないから、「正しい番犬」だと思っていたのに。そして、付き合ひのない近所の容赦のなさというものを見せつけられた思いがしたのである。

ハヤテオバサンは犬嫌いらしい。犬もわかるらしく、よせばいいの見れば吠える。いつぞやわが家の庭で吠えている犬に向かって道から石を投げつけたのを三人も見ている。「なんとかして下さい」だと。どうすればいいのだ。時間が経つにつれてぶち込まれた苦情の鉛がどんどん重たくなってくる。私はテーパーに肘を付き、考えられるパターンを延々と思い巡らせた。

ひとつ。「犬に吠えないように言って下さい」とハヤテオバサンちに犬を連れて行く。ひとつ。

犬の声帯を取る手術をし、声を失った犬を見せに行く「ご迷惑をかけましたね。ほら、この通り、もう鳴けませんから」。私はもちろん泣きながらひとつ。犬を殺して、やっぱり泣きながら「もう吠えませんから」と言いに行く。道で出会った人にはいきさつを泣きながら説明する。私はどんどん激しく復讐鬼みたいなことを考え、自分で怖くなってきた。が、決してそんなことをできない自分だということもよくわかつているのである。近所の人とケンカしたくはない。迷惑だと言われた以上、やっぱりなんとかしなくてはなるまい。

私は犬の場所を移すことにした。なるべくハヤテオバサンの家から遠い距離にするのだ。玄関周辺はダメ、庭もダメとなれば、もうそこしか場所



はなかった。プロパンガスボンベの横、塀と家の壁との間である。日当たりはわるく、じめついている。視界は限られ、風が吹き抜ける寒い場所である。

きのうに変わる今日の境遇。なにやら一夜にしてお屋敷を追われ、うす暗い布団部屋かなんかに住みこむことになった少女小説を思い出す。私は犬のために涙ぐみ、やりかけの仕事も手につかない。一日に何度となく裏へ犬を見に行き、撫でまくってやる。

裏にいても心配でわかるらしく、来客を吠える。"なんとか"したのに、またハヤテオバサンがきそうで私はドキンとする。私は胃をわるくした。

犬のほうは日当たりがわるいのと、家族の顔が一切見えないので面白くないらしい。以前は日暮れまでじっと待っていた午後後の散歩を早々とねだるようになった。ひどいときには午後二時前からねだり鳴きを始める。放っておくとしつこく、だんだん声を高くする。私はもう耐えられず、やりかけの仕事を置いて連れ出さざるを得ない。

「あたしはね、あなたの散歩のために生きてんじゃないんだよ、バカ」と言いつつ日盛りの中を行く。

犬に振り回されている。

夢と現実

東京都世田谷区

桜井 淳子

幼いとき、辛い環境に置かれると必ず、空想の世界に身を委ねた。そうすることにより、現実の辛さから自分自身を保護したのだろう。

虚弱児で、子供の世界では、みそっかすだった私には、遊びや学びの場でも失意の毎日だった。

友達の間で屈辱の気持ちをかみしめるより、独りきりで、のびのびと童話や小説の世界へ心を馳せたり、童画や小説の挿絵の空へ翼を広げるほうが、どんなに楽しいことだったろう。

部屋の片隅で、ひっそりと雑誌を読み耽ったり、口絵や挿絵を手本にして絵を描いていた。

小学生のとき、世は軍国主義一色であった。姉の読んでいた少女の友の表紙や口絵、挿絵の中原淳一の絵に魅かれ、せっせと写していた。淳一の絵はやがて軍部の圧力で少女雑誌の世界から消えていった。

古雑誌からは、竹久夢二や高島華宵の絵を切り取り大切に保存した。

高島華宵描く少年の絵は幼い私の心に深い憧憬



を刻んだ。時折、少年の絵を眺めてはうっとりとした。理想の男性像として、このような美少年こそ自分の夫でなければならぬと、勝手に決めたりした。自分の容姿は全て、棚の奥深くに置いた。戦争が激しくなり、世の中が殺伐としていく中で、私は将来、小説家か挿絵画家になろうと夢みていた。しかし、そのことは自分の胸の中だけにしまっていた。

『大きくなったら兵隊さんになります』

『看護婦さんになりお国のために尽くします』

これらの将来の夢が、当時の少年少女の模範解答であった。

小説家や挿絵画家になりたいなど言ったら、とんでもないことになるだろう。

幼いながら表面は時の流れに迎合する術を心得ていた。

夢の一つ、挿絵画家は、判断力が着くころには諦めていた。自分には才能がないと理解できたから。小学生のころは、得意だった絵も、それは他の生徒より丁寧に描いていたのにすぎなかった。作文も得意だった。先生に誉められいつもクラス全員の前で読まれた。それは、他の学科が駄目なので（興味が涌かず勉強しなかった）先生が私を励ますためにそうしたのかも知れない。

青春時代、『面食いお淳』のニックネームを付けられたほど面食이었다。もちろん美少年プラス秀才でなければならぬ。初恋の人も華胥描く美少年に似ていた（自分では、そう思っている）。

もう一つの夢、小説家になることは至難であると判断した。才能もさることながら、生きていくためには食べなければならぬ。小説で食べられるのは万人に一人、何万人に一人である現実に見えた。

手に職を付けると働いた。その傍ら縁があり俳句の世界に没頭した。未来の中村汀女、杉田久女、橋本多佳子等を夢見た。

現在、かつての美少年だった夫と暮している。現実家である私は、どのようにしたら生活できるかを充分把握している。夢に溺れ、現実を無視す

ることはできない。

ささやかに生活するために働いている。その中でも幼き日の夢、小説家になる夢は捨て切れない。小さな炎として絶えず胸の中で灯し続けてきた。あるときは大きな炎となり、また消えなんばかりになったりもした。

偶然にも、女性の投稿誌である『わいふ』にめぐりあい、夢を実現させる可能性にぶつかった。未熟な私は書きまくった。投稿魔と化した。陳腐な小説まがいの物を書いては、編集部へ持参した。読まされる編集部の方々は、随分と迷惑しただろう。

五十を過ぎた女が今日も、原稿用紙に向かって、しこしこ小説(?)を書いていく。

漫画かな？

平均寿命から割り出すと、後三十年は生きられる。初心に返り良い物を書けば必ず人々の心を打つと信じている。

時間という大きな流れを背景に、人間の愛や欲望を織りまぜて書く。自分の体験、人からの経験、社会の動き、利用できるものは全て頂いている。たった一つでもいい。万人に愛される小説を書きたい。

この世に私が存在した証拠に……。



沖繩の海山川

沖繩県那覇市 仲里 貞子

私が小学生のころ、昭和十六、七年の沖繩の海は、白波、水色、青色と三色で遙か彼方の水平線まで眺めることができました。

祖父は朝は五時、夕方六時と浜辺の散歩が日課でした。

ときに亀の産卵期には、浜辺から卵を拾い家に持ち帰って来たこともありました。

波打ち際には、桜島から流れ着いた大小の軽石が転がっていました。

復帰前には那覇から名護までの間、西海岸に面した道で曲がりくねりが七か所もありましたので、昔の人が名護ナナマガイと名付け名所の一つでもありました。

それが今では三か所だけ残り、海辺は埋め立てられ、豪華なリゾートホテルが立ち並び国道五十八号線の広い道に変わりました。

名護湾も数年前は湾が奥広く、毎年三月ごろになるとイルカの大群が押し寄せてきました。

その日には、町民総出で岸まで追い込み、三十

頭余り仕留め、それを町民で分け、イルカの油を搾り端切れをより、搾った油を深皿に入れ、布の先に火をつけ、ローソク代わりに使用した時代もありました。

肉の部分は、塩をまぶし、南蛮がめにつめ小分けにして調理をし蛋白源として暮してきましたが、今では名護湾もすっかり変わり、海岸は埋め立てられ広い市になり、イルカのオキちゃんの姿も見えなくなりました。

北部の山を眺めると、私の小学校のころを懐かしく思い出します。

日曜日や、休校日には近所の友達を誘い、腰に縄を結び、小さな鉈を持ち、蒸したさつま芋二、三箇と、生味噌を、バナナの葉に包み、二キロほどの細い山道を登り下り、石の上を素足で歩き、薪拾いに行くのです。

枯れ木を見つけ、木に登り、一本、一本、拾い集め、それを束ね、背負っての帰り道、大人から教えてもらった泉で休憩し、そこで芋と味噌、泉の水で空腹を満たし、一日二回、往復しました。

その山道が今では段々道に変わり、ヒカン桜が数千本も植え付けられ、毎年二月には桜が満花し、名護桜祭として、定着しています。

川での思い出といえば、夏休みには家族の洗濯

物をタライに入れ、頭に載せ隣り部落まで行き、川で平らの石を見つけそれを洗濯板代わりに、固形石鹼でごしごし洗い流水で濯ぎ、川べりの緑の草むらに干し、その後水遊び、土手に自生している、ヒラミレモンで洗髪し、遊び耽りました。思いつきの川も今はもう水一滴もなく、大きな石は庭石になり、小石は茶褐色に染まり、川底は土埃で埋っています。

沖繩の海山川も、伝説だけを子供に残すことになるのだろうか。異人誰にとっても身近な存在であったはずの、海山川を遠くに感じるようになるのは、やはり、寂しいことです。



梅干し

兵庫県 匿名

店頭の色づいた梅が並ぶころになった。今まで三キロの梅を漬けていたが、今年は見えて通り過ぎるだけである。

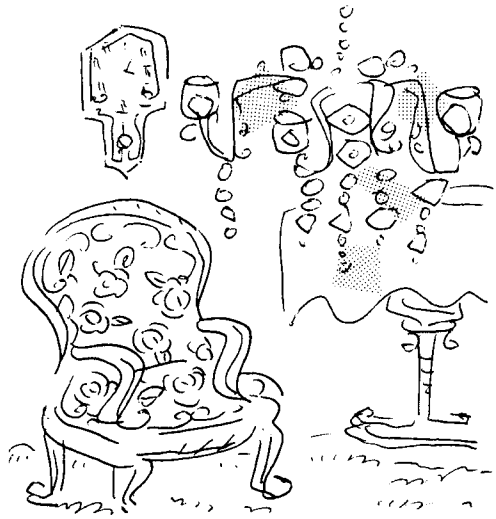
昨年も梅を漬けていたが、つかり具合を見たときにかびが生えていた。そばにいた母が突然大きな声で、

「梅干しにかびが生えたら、悪いことが起きるって言うのよ」とあわてて取り去った。それから三か月後、悪夢の宣告を聞いた。まるでテレビのドラマのようなできごとだった。

夫が食べ物がしみるからと軽い気持ちで行った病院で、

「癌です、それもととも進行が早いです」と若い医師から聞かされた。両親も健在で、大きな波にもまれないできた私にとっては、残酷すぎる言葉であった。

なんとかして生きて欲しいと願って、癌に関するいろいろな本を読み、よいと思うことは何でもした。病院の治療のほかに、民間療法も取り入れ



た。断食道場、玄米御飯、漢方薬等を試みたが、どうしても病には勝てなかった。

夫は八重桜の咲きこぼれる季節に、短い生涯を終え、永遠の眠りについた。三人の小さな子供達を残して……。その日は皆の涙が空から降っていた。

それ以来、私はどうしても梅を漬ける気がしない。迷信かもしれないが、再びあんな悲しいことに出会いたくない。そして、日毎に黄色に染まっ
ていく梅をぼんやり見ている。

野崎さん

大阪市鶴見区 家守 恭子 (57歳)

瀬戸大橋開通に当たり、連日報道される新聞のカラー写真や記事に誘われ、「一度帰ってみよう」と、夫と夜道に車を走らせた。

真夜中の新児島駅や隣接する博覧会場あたりを一周するが、静寂に包まれた未知の新世界にまぎれ込んだよう。方角も立ちかね不安げに運転する夫に、

「一体この広大な土地は今までは何やったん？」

「よう知らんけど、大方は塩田跡のはずや」

「野崎さんのお屋敷も一部開放されて、見物できるようにね」

野崎といえは、その始祖が南児島の湾岸に塩田を次々に開拓し、全国に「味野塩」として知られた塩田王である。本邸は山を背にして塀が続き、砂利を敷いた参道を思わせる上り勾配の奥に閉ざれた正門があり、内部のお屋敷は到底想像も及ばない。「追暇堂」と称される別邸は、南に瀬戸ノ海、東は小田川が海にそそぐ川口に建てられ、當時はさぞや内外の貴顕も訪れたであろう。

明治四十年生まれの亡父が生前「小学校一年の遠足は追暇堂で、近在の小学校は皆そうやった。執事から一人ずつ菓子をもろうてな」と語っていた。また、爵位を持つ御一家は東京に住まわれ、奥方様はさるやんごとなきお実家まことの出だとかも聞かされた。

時は移り、昭和二十年三月末、私は空襲を避けて父の故郷へ疎開、地元女学校へ転校手続きに行った。咲き初めた桜の下に佇む母娘らしい二人連れに、あ、同じ転校生だな、と思う間もなく校舎からあたふた飛び出した人が、

「野崎様でございますか、こちらへどうぞ」と恭々しく案内し、私にも「どうぞ」とうながしてくれた。

古めかしい、歴代校長の写真を飾る応接室に通され、話の内容からその方も同じ三年生、女子学習院より編入とのこと。校長先生が、「動員先の縫製工場N本店へは私がご案内申し上げます」とおっしゃった。

祖父の家の庭先からN本店工場群は指呼の内にあり、始業ベルを聞きながら坂道を駆け下りても何とか間に合う。野崎さんは歩いて優に三十分はかかるだろう。

当日工場では、社長以下幹部が揃ってお出迎え

し、その背後に工員、学徒もひしめいていた。社長先導での工場内説明にも、成りゆき上私も陪席させて頂いた。

初めての仕事はカーキ色の外套のボタン付けだが、自然とノルマを競い出す。視線が合うと野崎さんはにっこり微笑み、

「おできになられて？」

「ええ○枚」私は少し自慢げに答える。

「まあ、すばらしいのね、ご立派ねえ」心底感心した表情に、キリキリした自分を恥かしく思った。

野崎さんは色あくまで白く、ほっそりとしなやかな姿は優雅そのもの、瓜ざね顔に目許涼しく、豊かな黒髪は胸まで下っていた。気品に満ちた言動のまま、すんなり田舎の友人にとけ込み、みんなから敬愛されるのは、父祖の地に帰った安らぎもあつたろうか。

工場での昼休み、雑談中の一人が、

「学習院には皇族が何人おられるん？」の問いに、「おん五つ方いらっしゃいます」と答えられた。

上つ方では人数をどのように表現するのかといたく感心したものである。

夏も近づき、終業の時刻になっても日はまだ高い。

「ねえ、どうしてみんな枯れてしまったの？」

汗を拭きながら野崎さんが指さす前面は、段々が丘の上まで続き、収穫間近の黄茶の麦が実っている。ひばりの囀りが丘の彼方に消えていった。

八月十五日ラジオ放送の後、一向に始業の気配がないので、工場を抜け出し、山桃を喰べて口を赤くしたのを彼女は憶えていらっしやるだろうか。祖母が「野崎の姫さまがうちの山へ来られたんか」と腰を抜かささんばかりだったのも懐かしい。



約一世紀前、南児島発展を願って下津井鉄道が敷設され、戦後は財産寄与を目的にポートレース場ができ、今回の大事業にも、野崎さんの土地提供がなければ、その計画実現は大幅に遅延したであろう。

巨きな黒松に囲まれた、野崎翁を顕賞する記念碑の建つ苑は、静かな憩いの場として、市民に親しまれている。

わかれ

大阪府豊中市
高宮 みか

弟が自動車事故で妻を亡くしたのは今から十五年前、三十二歳のときであった。

大学で同級生だったふたりは意気投合してブラジルへ渡った。三人の男の子に恵まれ、弟は日本で学んだ農業経営をブラジルの地でどう生かすか、情熱を燃やしていた。

器用だった義妹も日本の手芸材料をふんだんに使って作った人形や造花、刺繍や編み物などを売ったり教えたりする小さな溜り場のようなお店をもっていた。

彼女は街の人気者だった。

結婚八年目であった。生活がようやく軌道にのりはじめたところである。

事故はいねむり運転による自損事故で、助手席の彼女が即死、ワゴン車の後部席に眠っていた弟と三人の子どもたちはなんとか命は失わないですんだ。

運転をしていたのは日本から弟たちを頼ってやって来ていた若者だった。

三か月近くかかった自分と子どもたちの怪我の治療、彼女の葬儀や店の後始末。学童期の子どもたちをかかえての農場経営はたちまちにして弟を行き詰まらせた。それに加えて後遺症を遺してしまつた子どもと運転者だつた青年の治療は、できるものなら日本で受けさせたいと望んだ。

八年ぶりに弟は日本に帰ってきた。

妻の実家を訪ねたおり父親から、ブラジルまで出してやつた娘を交通事故で亡くされるとは情けない、とさんざん言われてきたとかで憔悴していた。加害者に損害賠償の要求もできないのかと非難されたという。

「加害者とか被害者とかそんなもんじゃないんだよね」

運命を共有した者同士にしか理解できない何かを指して弟は言っていた。

三人の幼い子どもたちを年老いた両親にあずけて、弟は再びブラジルへ帰って行った。

私は母親を失つた子どもたちが父親とも遠く離れて暮らすことには反対だつた。それに子どもをかかえてやめめになつた息子や、亡くなつた娘の親代わりになつて孫を育てるには、どちらの両親も年をとり過ぎていた。

いろいろなことがあつて五年が過ぎた。子ども

たちは成長したが、孫の養育を唯一の生きがいにしてた妻の父親と、子どもたちを引き継いであつた私たちの母も、持病が悪化して亡くなつた。

「おふくろを死なしたのは君だよ」

子どもたちを迎えにきた弟に父が言つたのを聞いた。

（そんなふうには弟を責めなくてもいいのに）

父を制しようとして、父がそんなふうには思つていらずもないことに気がついた。そして父が言うのを聞かなかつたら、私が言つていたかもしれない言葉だつたことも。

父は私たちきょうだいの誰かが自分より先にその言葉を弟に向けるのを聞くには忍びなかつたのだと思う。

「おふくろが死ぬなんて、思つてもみなかつたんだ」

地球の裏側でひとり母の死を知らされた弟はどんな気持ちだつたらう。

私たちにしても母の死までは想像できなかった。

弟の子どもたちのうち下のふたりは、母親だけでなく父親まで写真でしか知らなくなつていた。

「まむしに噛まれて変形したこの指のおかげで、子どもたちにはなんとか父親だと認めてもらえた

よ」

弱々しく笑った弟は子どもたちを連れてブラジルへ戻った。

弟の新しい妻に日本を見せてやりなさい、と言
って必要な費用を用立てたのは父であった。それ
は弟の三度目の帰国だった。

弟は親きょうだいに新しい妻を紹介し、妻に自
分の故国を知ってもらいたいという気持ちともう
ひとつ、再出発に必要な資金をなんとか工面して
帰るつもりで帰国した。

父は黙って弟名義にしておいた金を渡した。
変にゆっくり滞在していた弟が急に帰国すると
言い出したことで、私にはすぐぴんときた。

弟が帰国のあいさつにやってきた。

「しばらくは会えないと思う」

「これ以上親に心配かけないでちょうだい」

「うん」

「今度日本へ帰るのは余程の場合だと覚悟してお
きなさい」

「分かっているよ」

五人もいるきょうだいの上と下からそれぞれ二
番目の、どこか似ている姉と弟である。いつだっ
て姉の私は偉そうな口をきき、弟が従順であつた。
弟がブラジルに帰り、しばらくして父に会った。



「帰って行ってしまったわねえ」

「あいつ、もうこれで僕に会えないと思つたらし
いよ」

八十に近い父の顔をまともに見ていられず、私
は目をそらした。

「別れぎわに涙ぐんでいたよ」

「ほんと？」

「ああ、本当だよ。大丈夫、また会えるさって、
僕が慰めたぐらいなんだから」

なにも知らない父はそう言った。

余程の場合でなかったら、父に会いに帰るなど
言つた私の横暴を、いまさらながら悔やんでい
る。

(え・カステラネンコ)

お子さんに幸福な未来を保障する 教育費の積立てを始めませんか。

東京海上の「すくすく倶楽部」は積立型子供総合保険です。

東京海上火災保険株式会社
問合せ窓口 代理部「わいふ編集部」

☎ 03-260-4771

●傷害事故

お子さんのけがは、通院も入院も1日めからお支払いします。

●賠償事故

お子さんはじめ、ご家族どなたが他人に与えた損害でも、お支払いします。マンションの水もれ、飼犬がひとにかみついた、など。

●育英費用

扶養者が事故で死亡したり障害者になられたとき、お子さまの育英費用をお支払します。



みなさまのお役に立つ
さまざまな損害保険が
あります。

これから毎号、順次ご
紹介します。お電話で
ぜひお問合せを！

〔ご契約例〕

(お子様の敬称が1名の場合)

← 保 険 期 間 (5年 間) →

月払保険料
9,550円

死亡・後遺障害保険金額	250万円
後遺障害追加支払倍数	1倍
入院保険金日額	2,000円
通院保険金日額	1,000円
賠償責任保険金額(免責1,000円)	3,000万円
育英費用保険金額	1,000万円

満期返れい金
500,000円
+
契約者
配当金

座談会

わいふ二二一 号合評

マスコミにない

“わいふ”のおもしろさ

●出席者

- 市川千歌子 (ペンネーム)
- 亀山 和枝
- 鈴木 光子
- 高宮 みか
- 林 有子
- 山辺 伸子 (ペンネーム)
- 和田美代子

●編集部

- 田中喜美子
- 和田 好子 (司会)

司会 まず今度の号をお読みになって、それが面白かった、興味を持った、というものをうかがいたいんですが……。では市川さんから。

市川 私は「催眠商法」。こういう商法が具体的にどうやっているのか、新聞なんかではよく分からないでしょう。なるほどな！と思って読みました。

山辺 私も「催眠商法」。それと「職場は多面体」のなかの「世の中は恐ろしい」。私も同じような職場をやめたばかりですので。高宮 私も「催眠商法」。それと「私の財

ク武者修行」。小さい投稿でもいろいろありますけど。

和田 私は丁度テレビで「絆」を見たところだったので「狂育ニッポン」の「絆」を見て」が印象に残りました。考えさせられる問題だと思って。

鈴木 私も「催眠商法」。一度私もね、ここに並んでるとビスケット貰えますよ、っていわれたことがあって……ピルのってぺんに事務所があって、下から並ぶんですね、辿りつくともラーメンを一個くれるの。また下に降りて繰り返す、それを一日やると結

構いろいろ貰えるんですよ。(笑)そんな経験があったものでは、「オピニオン」に出

ていたカイワレ大根の話。

田中 あれ読んでから私、カイワレ食べなくなりました。

一同 私も！

林 私は「罵の怨霊」。読み物として面白かったですね。

みんなが興味を持った「催眠商法」

司会 では一番高得点だった「催眠商法」からいきましょう。

高宮 内容が現実的で、しかもこまかく丁寧に書いてあるところがいいですね。

これは自分もひっかかるんじゃないか、っていう感じがあつて……。やはり体験した人の話をきかせてもらってよかつたと思います。全く同じでなくても、これ式の商

法は他にもゴロゴロあるんじゃないか。

亀山 この人はほんやり引っかけたんじゃないわね。よく観察していて、どこまで行けるか行ってみよう、という感じでやっ

亀山 私は「みんな悩んでママになる」。すごく古典的な悩みというか、私たちにとても聞き飽きた歌ではあるんだけど。最近ベビー雑誌がやたらふえているなかで、あ

いいう視点できちっと母親の状況を書ける場所っていうのはやはり、わいふしかな

いと思う。

司会 いろいろ出ましたねえ。

ている。

山辺 私十五年前にこういうのに出たことあつたんですよ。結婚する直前に仕事をやめてブラブラしているとき、近所の方が、

あその会場へ行くとタダでものをくれる、っておっしゃるのね。どうしてそんなことがあるのか知りたくて行ってみたんですよ。結果的には一万五、六千円する健康座椅子

とかいうのを売りつけるんですけど。

ものすぐ調子のいい係員が、みんなを昂奮状態に持っていく。このねだんでこれ

五千円のを千円で買えるノってあおられると拳げないのはバカみたいな気がしてくるのね。

十五年間同じ商法やっている、と思いましたね。

司会 ということはこのやりかたでやれば必ず売れる、ということなのか。

田中 違うのは商品のねだんが高額になっているところね。

山辺 あのとときも残ったのはお年寄りばかり。若い人は買うだけ買って帰って。(笑)

亀山 戦争世代はほしいものでなくても、あれば買っちゃうんじゃないかしら。

和田 それとここまでできて断わるのはわらわらという義理人情があるんでしょうね。

市川 でもこれ、本当にわるい品物かどうか分からないでしょ。いいものかもしれないじゃない。

田中 ちょっとそのところ考えてみませんか。本当にいい商品を、こんな形で売るとい

うことがあり得るだろうか。最初百万円とってたのを二十八万まで下げるわけだけど、二十八万円の羽毛ぶとんっていったらかなり高いですよ。



市川 この間イトーヨーカ堂で二十万の羽毛ぶとんを八万円にして売ってましたけど。一応イトーヨーカ堂だったら買ってから苦情があったとしても対応してくれると思うんですけどね。

高宮 私ね、二十万円ぐらいの羽毛ぶとん買おうと思って高島屋へ行ったことあるの。そしたらたまたま百万円っていう羽毛ぶとん売っていた。

司会 やっぱり百万円の羽毛ぶとんってのはあるんだ。(笑)

高宮 人の入れないショールームみたいなところに飾ってあった。(笑)へーって拝む感じ。そばにこの中にはこういう羽毛が入っています、って透明なビニール袋に入れた見本があったけど。

司会 それだって本当に同じものが中に入ってるかどうか分からないわよ。

高宮 私は疑わずに見ていましたけどね。でも私の買う二十万円の羽毛ぶとんの五倍の価値があるかどうかは分からない。

田中 中を開いてみるわけにはいかなないから、結局相手を信用して買うしかないわけですよ。そうなると最後まで責任取

ってくれる、素性の分かった相手から買うのでなければこわいわね。

山辺 私がつい最近やめた職場が、セールのノーハウを売る会社だったんです。

どんな笑い方や話し方をすればものが売れるか。たとえば笑い方ひとつでもワーツと笑っちゃダメ。雰囲気笑いというのがあるんです。瞳孔を開いて笑うとか。相手にすり寄って親しみをみせるとか……。

手の動かしかた、ことはづかい、それぞれノーハウがあるんです。大手の化粧品メーカーのデパートの販売員なんかにも、そのノーハウを教えこむ、それを仕事にしてる会社なんですよ。

司会 ウーン。いろんな商売があるもんですね……。

山辺 ○○研究センターという社名なんですけど、やっているのは所長一人。私はその秘書という立場でしたけど、結局は「ダマシ屋」という印象でした。他にもいやなことがあって、この二月にやめたんです。

さっき「世の中は恐ろしい」の話が出ましたでしょ。これにも関係してくるんですけど、そのセクターも仕事があまくいかな

「世の中は恐ろしく」で論議沸騰

いとき、所長が部下に責任なすりつける感
じでね。どんな責任取らされるのか分から
なくて、こわいんですよね。だから三か月、
半年でどんだん人が代わる。経理の人なん

司会 では「世の中は恐ろしい」にうつり
ましょうか。

田中 連続テレビドラマのような話でした
ね。

妻が専業主婦で、団地のお茶飲み会にな
ど参加している間は「お前はこんな下らん
ことしているのか、働け、即働け」なんて
いっていた夫が、妻が働き出すと「月給二
十万がそんなにえらいんか」と豹変する。
あげくの果てに「オレは出て行く」。そして
今回の不倫。(わいふ一九三号、二〇七号
参照)話がずとつながっていてね。
亀山 でもともかく、どんな形にせよご主
人が妻に関しているところがいい。無
関心ではないでしょ、妻に対して。

田中 そう、それはいえるよ。
司会 これは大学時代からの友達夫婦なの。

かとかに、あぶないっていわれてましたね。
だからこのNMさんの話、ひとごとと思え
ませんでした。

市川 私はこのご主人、すぐくふがない
と思うのね。妻のいうことをきいて、すぐ
家の中に引込んだじゃったでしょ。
司会 え？ 何がふがないの。

市川 不倫の問題ですけどね。何か奥さん
がしっかりしてるわりにご主人ダメだなっ
ていう感じで……。 (爆笑)

なんでこういうことになったかと、奥さ
んにいったらいいじゃないかと思うのね。
たとえば帰ってきても家の中がいつもゴッ
タゴタで居場所がないとか、いつも自分が
ゴハン作るとか、おまえ朝起きないじゃな
いかとか……そういうテンマツを妻にいっ
て、不倫の原因を煮つめなくちゃいけない
と思うわけ。(一同笑いとまらず)

亀山 市川さんが家の中に問題がある、と
いう前提でものをいわれているのはやっぱ

りよくないと思う。働いている女の人って
大抵、その人の専業主婦のときの家庭の状
態より、大きく目につくような家事のレベ
ルダウンはしていないと思うわよ。

家事っていうのは、アラを探せばどの
家だってそれぞれアラはあるけれど、それ
は働いているか、専業主婦かの問題ではな
いと思うの。一人一人のレベルの問題です
よ。

田中 でもね、NMさんの場合は、家の中
メチャクチャだって書いてあった。

司会 いえね、そうなんだけどこの人の場
合、家にいるときからそうだったみたい。
以前下さった投稿に、私は専業主婦だけど、
家の前を掃くとか、よその奥さんのように
そういうことは好きじゃない、ってありま
したよ。

市川 でも家事の問題ばかりでなく、それ
までの二人の関係を見つめてみる必要があ
るんじゃないかと思うのね。

田中 私がふしぎに思ったのはね、この奥
さんがご主人についてすぐタカをくくっ
ていることなのね。「こんなくたびれた中
年男なんか相手にする女がいるはずない」



和田さん

って。

これは男のいうせりふなんですよ。「うちのカーチャンみたいなくびれた中年女もてるはずがない」っていう。ところが実は、自分の経験からいっても、中年っていうのは意外にもてるのよね。(笑)

知らぬは亭主ばかりなり、で妻はけっこうもてている。ところが反対にこの投稿でみると、妻のほうも夫についてタカをくくっている。これはもしかすると、日本の夫婦の一つのありかたかもしれない、という気がしてきたんですね。

司会 たしかにこういうこと、いう人多いわ

ね。旦那について。「あんな奴もてるはずない」とか。

田中 そのへんのところ、いかがですか。

高宮 ……うちの夫はもてると思う。

田中 それについて気にしていらっしゃる。

高宮 ……あり得ると思う。ないとは思わ

けど。(笑)……もてないなんて、よその人の前

でまだまだいいたくない。

司会 矛盾してるんですね。もててほしいという気もあるけど本当にもてたら困る

ということもあって…。

山辺 あのね、この方の場合相手が若い子

でしょ。つまんないんじゃないでしょうか。

最初のうちは、肉体的な部分ではいいかもしれないけど、いまの若い子っていうのは

私たちの若いころよりまだもっと幼い感じ

でしょ。肉体に飽きちゃったらあともう取るもの

ないって感じて…。(笑)

亀山 でも若紫願望というのもあるから。

司会 たしかにこれで見るとあっさり妻のほうへ

帰ってきてしまっている。あなたの

おっしゃる通りあんまり面白くなかったの

かもしれないですね。

亀山 私は本当は終わっていないんじゃない

いかと思ってる。

司会 いいチャンスだと思ってやめたんじゃないかしら。奥さんに騒がれたんで、ち

ょうど別れるきっかけができた、っていう

か…。

田中 向こうの親ものり出してきてるし、

やめた可能性のほうが多いんじゃない。でも

この夫も拙劣よね、大体妻と別れて結婚

するから、なんて口説くのは一番腕のない

やり方でしょ。(大笑)

亀山 もてる、もてないっていうけどね、

それは男がアクション起こすかどうかで、

私だって、うちの夫が黙って立ってれば

振り返る女がいるとは全然思わないけど、

自分が気に入ったら、あの人は一定のアクション

を起こす能力もあるし、努力もする

人だということ、油断はならないと思う

の。

田中 そう、そう、もてるということはそ

ういふ部分が大きい。

林 私はね、お互いにフリーでありたいとは思

っているけれど、うちは二人とも気が

弱いというか不精というか—だから自分

のこととしては考えられないですね。

鈴木 私は、この男がこんなに簡単に女人を振ってしまって、女の人がすごくかわいそうになりましたね。

田中 それは妻のNMさんも腹を立てていますよね。要するにこの男にとっては遊び

「匿名」が多いことの是非

高宮 今日は一つ編集部にききたいことがあるんですけどね。たとえばこの「催眠商法」でも「罵の怨霊」でも、せっかくこんな説得力のある文が、匿名であるということが面白くないと思うのね。

具合が悪いのならペンネームにすればいいでしょ。匿名という必然性がないのにするのは書いている本人が逃げを打ってるんじゃないか。投稿者が責任を回避しているその姿勢に編集部も乗ってないか、ということなんです。

司会 あのね、一応原則を申し上げますので投稿規定を見て下さい。ここに「匿名、ペンネームは自由ですが、とくに理由がない限り、本名でお願いします。遊び半分？で毎回ペンネームを変えるなどは困ります」

だったわけ。

司会 でも今の若い娘だったら「かわいそう」っていうほどでもないですよ。大抵こんな経験はあるわけだから……。昔の娘さんとは違いますよ。

云々とありますね。実際毎回ペンネーム変えてくる方なんかがあるわけ。(笑) それでこういうことを書いたわけなんですよ。だけれども、原則としてこういうことをお願いしていて、しかもむこうが匿名で、とって投稿されてきた場合、こちらからどうして匿名になさるんですか、とはいえないんですよね。

高宮 というと、内容にかかわらず、編集部としては匿名かどうかにはノータッチというわけ？

司会 そうです。これについては大分議論があったんですよ。本名をもっと書いてくられてもいいんじゃないかって。

高宮 こんなに匿名が多いとね、「面白くてほめたいときでも、反対に不満があるとき

でも、何か正体が見えなくて、持っていく場がないような感じで……。

司会 それは分かります。でもね、原則として匿名は許さない、ということにしますでしょ、するとやっぱり大分、書いてこなくなる人がふえると思う。

田中 この「罵の怨霊」なんかは隣の人のトラブルだから、完全に名前を出せないですよ。大変なことになるもの。

司会 お姑さんとのトラブルとか、本当に自分が裸になった話が多いのですね。そういう方たちが匿名を希望なさるのは分かるんです。



鈴木さん

山辺 もう六、七年前のことなんですけど、市役所の国民年金課のことで、ちょっと腹が立つことがあって、朝日新聞へ投稿したんです。それが朝刊に出ましたら、その日の朝十時ごろ、年金課から職員が二人やってきましてね、ものすごく高圧的な態度なんですわね。

司会 怒鳴りこんできたわけですね。

山辺 私は家に一人でしたし、もう、すみません、すみません、っていうばかりで。

こっちは悪いこと何もないのにあやまってしまつて。社宅住まいで、周囲に知人もいませんでしたしね。こういう経験があるから匿名にしたい方の気持ちは分かります。

司会 社宅に住んでいる方は、本当にいろんな意味で行動を制約されますしねえ。そういうことも考えてあげないと……。

高宮 こういう議論が行なわれているということが表に出るといいのね。そうすれば余り考えないで気楽に匿名にしちゃう、ということがなくなると思うんです。

今の「わいふ」見てると「身分を隠したい方へ」なんていうのも出てるでしょ。こんなの読むと、つい自分も隠してみたくな



林さん

高宮 逆にいえば、「催眠商法」なんていうこんな面白いものをね、この人の意志だとしても、どうして匿名にするのか、と思つてしまふ。

田中 たしかにこれは、誰にもさし障りのない内容なんですよね。私もチラッとそう思ったことは思ったの。

でもね高宮さん、投稿者って、自分の職業や、亭主の職業によって感覚がすごくちがうの。たとえば亭主が大学教授だったら誰からもクビにされない、迫害されない立場ですよ。一身分が保障されている。

そういう人の奥さんとサラリーマンの奥さんとは立場が全然ちがうんですよ。

高宮 ウーン。じゃあ登録制っていうのはどうですか。ペンネームの。

司会 それも無責任という点では同じじゃないかしら。

高宮 いやそのペンネームについて責任を持つということがあるんじゃないか。

司会 でもペンネームっていうと、その人が実在するかのごとく見えてしまうわけ。実際は全然ちがう人間なのに。匿名のほうがいい正直ではないでしょうか。

高宮 だけど、ペンネームという連続性があるでしょ。

田中 それはたしか。

司会 この「催眠商法」の筆者は、これまでも本名で何度も投稿している人なの。ですからこれを匿名にするについては何か原因がある、と思ってそのままにしたんです。

基本的に、匿名を許すことによって、弱い立場にある人がより自由にものをいえるようになる、ということが私たちの願いなんです。たしかに無責任なウソの投稿というものがある、とはいいい切れないのだけど、匿名によって保障される言論の自由のほうが大切ではないか、と考えているわけです。

市川 それから住所の書いてないものもありますね、これはどうして？

司会 これもご本人の希望なんです。県まではいいけれど市はダメとか、東京都だけにして下さいとか、いろいろあるんです。どれも読者のご希望に沿ってやっているんですよ。

高宮 でも二一〇号からのイメージチェン

ジでよくなりましたね。

田中 そういつていたかどうか。何しろこのノンブル（ページ数を示す）の黒丸、これ人間の手ではりつけるんですけれど、一人の人がまる一日かかるんですよ。

高宮 この黒丸、ほんとに要るのかなあ。

田中 腕のいいAD（アート・ディレクター）に頼んだからやめるわけにいかない。

それに前に比べて原稿用紙三十枚分も内容がふえているんです。実質的増ページなの。

高宮 でしょう？ すぐ読みでがあるようになったもの……。

田中 小見出しにもアミがかかっているし、



高宮さん

ともかく猛烈にお金がかかって、悲鳴を上げています。でもそれだけ評判がいいのはうれしい。やったかいた。今回のイメージチェンジ、ほんとに苦労したんですよ。

亀山 中味がよくても見た目がわるいと人にすすめられないものね。

市川 今まではぐちぐちばかりだったけどそうでなくなってきたし。

田中 でも内容は変わっていないと思うわよ。

亀山 いや内容は前よりずっとぐちぐちはいわよ。私たちはっきりそう思う。私たちが三十代のころ大挙してわいふに入ってきたあの感覚がなくなってきたと思う。読者が高齢化してきたんじゃないかしら。

司会 そういって、読者の年齢でいえば若い人ふえているんですよ。

亀山 でもね、わいふの誌面自体でいえば、しっかりした文章はふえているけれど、もの見えていない無謀な意見の面白さというのがなくなりました。（笑）女学校教育をきちっと受けたおばあさんが書いてきてるとい感じ。（大笑）

田中 今度の号の阿部美砂江さんの投稿なんか若い人のじゃない？
亀山 だから私うれしかったわけ。ああよいうやつと現実生きてる人がきた、っていう感じでね。

スリル満点「私の財テク武者修行」

司会 では次に「財テク」にいきましょう。今日はご本人が出席していらっしゃるわけだけ。

市川 弟にいわれたんですけどね、主婦が財テクをするときは迷ったり悩んだり不安があるはずだ、ところがちっともそういうところが出ていないで文章が非常に断定的だ、と。もうちよっと人柄が出てくるような書き方をしたらどうか、と。

司会 だって、これあなたの人柄がよく出ていますよ。(笑)

市川 人柄が断定的なのか……。 (笑)
田中 ないものねだりよ、それは。いいのよこのままで。

司会 これはね、ドライなところがいいんですよ。

私たちの若いときは、「わいふ」ばかりだった時代があるでしょ、それがなくなつて、私たちがわつと脱けちゃつたら、「わいふ」も終わっちゃつたなんていうんじゃないものね。

田中 いややつぱり不安な気持ちも出ていますよ、それなりに。

市川 みなさん、どうかほんとのことおっしゃって下さい。

亀山 財テクやってる人って、誰もホントのこと教えてくれないでしょ。だからこういうふうにきちっと、やってる人の経験を教えてくれるのは有難い。

高宮 それにこの断定的な書き方がね、素人が一所懸命やってるけど、実はだまされるストレスのところっていう感じが出ていて面白いのよね。(大笑)

司会 いまにだまされる話も出てきます。
市川 私は余りソンはしなかったんですけどね。

亀山 臨場感がありますよ。



亀山さん

鈴木 市川さんにはわるいんだけど、祖母がね、株を残してくれたんです。株のことも知らなかったんだけど、折角残してくれたんだからと、証券会社をのぞいてみたんです。で結局、いいように勝手にされてだまされた、っていう感じなんです。その経験があるものですから、この文章は触れたくない、読みたくない、っていう感じで読んでないの。

田中 分かる、分かる。

市川 私もね、あの大暴落のあとは本当にくだびれちゃって、新聞読むのもいやでしたもの……株をやると本当にくたびれます

ねえ。

司会 この話はだんだん面白くなりますよ。
市川 これを連載するということで手を入れていただいて、とってもいい勉強になっています。

司会 いえ手を入れる、というんじゃないくてね、意味の分からないところがあったの。つまり株の話は素人に分からないでしょ、術語があったり、話をはしょったりして。そういうところを分かるように書き直して

深刻な日本人の「いじめ」

司会 では次に「絆」の話。私はテレビは見なかったんですけど。

亀山 この人はアメリカでテレビを見ているから帰国子女の問題に偏っているけれど、もっと普遍化した形で「いじめ」の問題はあると思う。

山辺 私の知ってるなかでは、ブラジルで生まれた子が、ブラジル生まれということではじめられた例がありましたね。朝出かけたかな、と思うと玄関に立っていて学校へ行かない。どうかして、って先生にお願

いただいただけ。

田中 いわゆる文章に「手を入れる」というようなことはしません。わいふでは。

亀山 婦人雑誌に財テクの話がいっぱい出ているでしょ。証券会社は大手がいいとか近所がいいとか。三百万ぐらいの動かせるだけのお金でやるべきだとか。そういうのと併せて読むととても立体的に「財テク」が見えてきていいですよ。

いしても、お母さんが甘やかして育てたから、としか担任の先生がおっしゃらない。先生が本当に頼りないんですよ。

司会 いじめの問題になると、必ず「いじめられるほうにも問題がある」っていうことが出てくる、それがよくないのね。どうしていじめられるほうが悪い、っていうことをはっきりいえないのか。たとえどんな原因があっても、悪いものは悪い、と。

山辺 親の感じがちょっと違っているといじめられるんですよ。みんなと同じに「そ

うよねえー」といっていないで、自分自身の意見をいう人はいじめられる。

司会 つまり自分たちと違う人はいじめるといふことよね。日本人の一番日本人らしい悪いところじゃないかしら。

亀山 私の住んでる松戸は、すごく帰国子女が多いのね。クラスに一人ずつばらまことができないほど多くて、うっかりすると外国へ行ったことのない子のほうが少数派になる。そうなる。「帰国子女」ばかりがいじめられるわけでなく、他の原因を考えなきゃならないと思います。

司会 つまり少数派でなければいじめられないわけね。

田中 つまり多数が少数をいじめるといふことでしよう。数が多いほうが強いということ。

「赤信号、みんなで渡ればこわくない」というけれど、「青信号、一人で渡ると命がけ」。(大笑)
司会 正しいことをいっても、それが一人だといじめられてしまう。

山辺 いまうちの子がいじめに遭ってしましてね、それで頭にきて今日も合評会にきたんですよ。



和田副編集長

中学二年生の男の子ですが、塾でいじめられているんです。カバンの中に汚いものを入れられたり、たたかれたり。塾の往復に自転車に乗った子が五、六人、わーっと追っかけてくるんです。

転動したばかりでまだあまり友だちもいないし、引込思案な子で……。脅迫みたいな手紙もくるんですね。それ読みましたら「お前は堅穴式住居に住んでいて非常に貧乏だ」——これ社宅のことなんです——「お前のところは他人の金を盗んできて食べてるだろう」と書いてあって、差出人のほうは「大天才」となっている。

司会 それは完全な遊びですね。自分たちがわるいことしているなんて全然思っていない。

ない。

山辺 それで今日教育相談にいったんです。

でも相談員のほうも自信がないんです。いじめの問題ってどうしようもないところがありますものね。すぐそこで解決できるというものでもないし……。

林 子どもの本に書いてあったけど、アメリカにもいじめがある、っていうことですね。「いじめられる子はこの本を読むと救われる」みたいな実用的な本なんです。田中 日本みたいに多数が一人の子をターゲットにするいじめですか？

林 イギリスの本には、ジブシーの子がクラスの子にいじめられるというのがありました。アメリカの是一对一だったかな。もともと子どもってすごく残酷なところがあるでしょ。日本のいじめはそのところどうなのか……。

市川 うちの子のいっている高校では、いじめが原因で何人かが退学しているんです。まあいじめっていうのは大人の社会にもありますけどね。教育の場でありながら、それに対して教育者が何もできないというの

が問題だと思う。

司会 本当にそう。たしかにアメリカにもイギリスにもあるかもしれないけど、その先生たちがそれに対してどういう態度をとっているかということが問題ですね。日本の先生は非常にいい加減だから。

田中 いつか教育問題の会で、いじめをテーマにした報告をきいたことがあったけれど、報告者がとても人柄のいい先生で、「自分はいじめはわるいこと、ということをはっきりいって、どんな理由があろうとも絶対に許さない。だからぼくのクラスには、いじめがなくなった」といっていらっしやいましたね。先生がはっきり「いじめはよくない」って姿勢を打ち出すと大分ちがうと思う。

司会 親の態度もよくない。親もいい加減、先生もいい加減。

亀山 親の側には「男の子は少しぐらい乱暴でも」っていうのがある。力関係でうちは勝ってるんだ、っていう気持ちがあります。一つ、間違いだと思うのね。それからもう一つ、うちの息子の隣のクラスでやはりいじめがあったんだけど、息子にいわせると、



田中編集長

一番最初にその子をいじめたのは教師だ、
って。教師がその子をきらっていることが
分かると、みんな平気でいじめる、ってい
う構造なのね。そのうちに「あいつはいじ
めてもいいんだ」っていうことになって、
それが小学校から中学までずーっと続いて
いく……。

司会 そういえば、わいふの投稿にもあ
ったじゃない、先生同士のいじめが。

子どもっていうのは大体大人の価値観を
身につけて成長していくでしょう、大人が
そもそもそういう姿勢だから……。

鈴木 私の小学校三年のときの経験なんで
すが、疎開した先で、今考えるといじめに
遭ったんですね。女王さまみたいな子が

一人いて、その子が私をけつとばすとみな
同じようにけつとばすのね。こわれかけた椅
子に座らせて、私が静かに腰かけたら「あ
っ、こわれたい、こわれたい」って見聞き
たり。それで私しばらく学校へ行かなくな
ったんですよ。

ところが私の知らない間にうちの母が学
校へいいに行っただけですって。そしたら先

ついに障子の話に期待しよう

司会 あと少しテーマが残ってますけど……
……まずカイワレ大根の話。みなさん、驚い
たでしょう。

亀山 わいふの面白さは、こういう現
場にいる主婦の声が出るところね。男だと
そういうこと知っても黙ってるでしょ。

田中 さし障りのあることは、男の社会の
表面には出てこないのよね。マスコミでも
広告主との関係とか何とかで、互いに牽制
し合ってる本筋の情報がでてこない。

司会 これからも世の中の表面に出てこな
いこういう情報がほしいですよ。

亀山 テープライト講座の話もそうだし

生が真剣に取り組んで下さって、女王さま
みたいな子がいじめをやめた。結局最後には
私とはとても仲のいい友だちになりました。
やっぱり先生がもっと真剣に取り組んで
下さったら、いじめも減ると思いますね。

司会 今の先生にはその腕もないし。

市川 第一皆が先生を尊敬していませんで
しょ。

たよね。詐欺まがいの商法で。

田中 あの投稿もずいぶん波及効果ありま
したよね。NHKまで取り上げて、でもあ
れ会社の名前すっかり変えて、また続けて
いるんですよ。フェニックスの如くよみが
えった。法的に規制ができないから。赤ペ
ン一本で二十万の月収とか、そういう誇大
広告をつっしんでるだけよね。

司会 今後ともわいふとしては、できるだけ
こういう情報を発掘していきたいと思っ
ています。今日はどうもありがとうございます。

女と男

ラブロマンスの香り

埼玉県草加市

佐藤 玲子

所用で出かけた帰り道、上野に立ち寄った。ゆったりとした森に囲まれた上野公園の風情が私はとても気に入っている。

散歩道を急ぎ足で歩いて里桜を觀賞し、西郷隆盛の銅像付近へ出た。と、大木の根元に彰義隊の墓というのが目に止まった。そこは周囲より一段高く、柵に囲まれている。

柵の中の説明文を読んでいると、突然声をかけられた。

「彰義隊の墓ですか？」

「え、ええ……。こんな場所があったなんて、気がつきませんでした」

声をかけたのはスーツ姿の会社員だった。私はしばらく、戦いの様子が描かれた古びた一枚の絵に見入っていた。

「どうですか？ よかったらちょっと歩きませんか？」と、彼は照れたような笑みを

浮かべて、私をのぞき込んだ。

抑制のきいた落ちついた声と口調が、知性を感じさせた。真面目そうな男性だ。

一瞬、迷ったが、生来の好奇心がむくむくと頭をもたげてきたらしい。じゃあ少しだけ、と私はうなずいていた。

「ソメイヨシノは散ってしまいましたね」「ええ、桜ってパッと散ってしまうんですね」

あたりさわりのない会話が続いた。一緒に歩きながら彼を觀察する。

中肉中背、七、三に分けた髪、グレーの地に紺のビンストライプのスーツ、細かいフレームの眼鏡、平凡な顔立ちだが、どことなく洗練されたふん囲気がやり手のビジネスマンを想像させる。たぶん、団塊の世代だ。

散歩道に面したレストランの前で、彼は

立ち止まった。

「暑いですね。喉がかわいていませんか？何か飲みましょう。時間は、大丈夫？」

どうしよう、と思ったが、本当に喉がかわいているのに気がつく。

樹々の間から初夏を思わせる陽光がふり注ぎ、汗ばんでくるほどだった。

「え、ええ、じゃあちょっとだけ……」

誘われると断われなくなるのは、私の悪いくせである。が、貞淑な妻を自認している私は、夫以外の男性とお茶を飲むことはめったにない。ましてこのような場所ですわられて、応じたのは、結婚以来初めてのことだ。

「何がいいですか？」と、彼はサンプルケースをさし示した。

「じゃあ、グアバジュースを」

注文をとりに来たウェイトレスに、彼はコーヒーとグアバジュースを注文した。

静かな店内に、籐製の椅子がシックな落ちつきを見せている。外の広いテラスにも、白いテーブルと椅子が並んでいた。

「あそこはビアガーデンになっているらしいね、ビールは飲めるんでしょう？」

私は笑ってうなずいた。

「もしかしてビールのほうがよかったかな？」

「いえ、とんでもない、こんな真昼間からビールなんて……」

彼はコーヒーをすすりながら、くつろいだ様子で質問をはじめた。

「仕事、してるの？」

「いいえ」

「じゃあ、ここへは遊びで？」

「いえ、用があって。上野にはちょっと立ち寄っただけなんです……」

白いブレザーにうす紫のタイトスカート、サングラスという装いが、遊び好きに見えるのだろうか？ サングラスはあえてはずさなかったのだけれど。

「家庭があるの？」

「ええ」

「子供は？」

「ええ、います……」

警戒心が最小限の答え方をさせた。彼の目は柔和な笑みをたたえている。

私は、ふと独身時代を思い出した。

「家庭の主婦って、つまらないでしょう？」
「え？ 男の人は、女って家庭にいれば幸せ

なんだって思い込んでるんじゃないの？」

「いや、主婦ってさ、面白くないでしょう？」

家にばかりいて。毎日同じことだし……」
私は思わず笑ってしまった。主婦業がお



もしろくないのは本当のことだったから。

きりのない家事にうんざりしながら、主婦としての義務感で懸命にこなしている。

「そう言われれば確かに、そんな面もある

わね、いくらやってもあたりまえ、お給料もないし……。その点、男の人は昇給や昇進という見返りがあるから、やりがいがあるでしょう？」と、私は彼を見つめた。

今度は彼のほうがくすくす笑い出した。周囲を包む空気が急になごやかになり、見知らぬ者同士のはずの二人の距離が縮まっていた。

同じレベルで会話ができる安心感とでもいうのだろうか。どうやら気のあう相手であるらしい。しばらく音楽に聞き入る。

「安定した家庭は大切にして、絶対に秘密が守れるという信頼できる相手だったら、深いつきあいをしてみたいと思ったことない？」

刺激的な言葉に驚いて、彼の顔を見つめたが、眼鏡の奥の目は笑ってはいない。

「思わないわ……。だって最初は軽い気持ちでつきあっていても、いつまでもクールに割り切れるかどうか自信がないし。家庭生活が、絶対に安全だとは言えないじゃない？」

「絶対に信頼できるという相手でも？」

「感情って、そんなに単純に割り切れるも

のかしら？ 理屈でわりきれても、感情は、ハートは、わりきれないかもしれないでしょう？」と、私は右手を軽く胸の上においた。

「慎重なのは、相手が夢中になると困るから？ それとも自分が相手にのめり込んでしまう心配があるから？ どっちかな？」

私はドギマギしてしまった。なぜ、こんなふうに会話が発展するのだろう。意外な展開に胸の鼓動が強く打ち始めた。

「え、ええ、それは……。両方言えるわね。でもどちらかと言えば、相手が分別をなくして夢中になったらという心配のほうが強いかしら。それに理屈ですべてを割り切ってしまう人なんて、好きじゃないわ——」

彼は腕ぐみをして考え込んだ。

「それはあなたが——今の生活に満足しているってことかな？ その……夜のセックスも含めて……」

私は思わず赤くなってしまい、口ごもった。

「だけど、男は家庭に満足していても、たまには冒険してみたいと思うことがある。そう……女の人と、意気投合したときなん

かね」

「あら、男性と女性の間にだって、友情は成り立つと思うわ。尊敬と信頼で結ばれる友情が、男同士にしか成立しないものだってみんな思い込んでるけれど——」

「いや、男は友情ではすまないと思うよ……必ずそれ以上の感情が出てくる」

「そんなことノ 危険だわノ 友情で結ばれたままのほうがいいのよ、それ以上ふみこんではいけないと思うの——。いつかお互いに傷つけあって苦しむことになる。そうならば安定した家庭もいつ破壊されるかわからないし……そ、それに、君子危きに近よらず」という諺もあるわ……」と、私は防戦した。

だが、彼はかぶりを振って答えた。

「男はそうじゃない。女の人と男とでは違うんだな、本能なんだ、種族保存という……」私はますます困惑し、この場から逃げ出したくなった。顔が熱くなるのがわかる。

だしぬけに彼は苦笑し、自嘲ぎみに言った。

「いや、僕はしていないよ、結局、真面目だから、できないんだな、普通の女の人と

じゃできないし、かといって男がよく行く、それを商売にしている女の人とじゃイヤだし……」

「えっ？」

「そう。いやなんだ。もっとう、いい関係っていうのかな、心が伴わなくちゃね……」セックス産業にたずさわる女性が相手では、彼は、いやなのだという。それを聞いて私はなぜか、ホッとした。肉体よりも、心の結びつきを大切に考えているらしい。

「これから、どうしますか？」私の心中を察したように彼はたずねた。

「帰ります。あのう、会社は近いんですか？」

「まあ、そうだね、今日は仕事が早く終わったので時間があまってね、実は、美術館へ行こうと思って来たんだけど、休みだった」

「ああ、そうですね。月曜日は休館なんですよ——。映画はどうですか？」

「イヤ」と彼は首をふって席を立った。

外へ出ると、まぶしいほどの青空がひろがっていた。私は一瞬、軽いめまいを感じた。

「どうもごちそうさま。本音でお話しして

しまったようですね」

「イヤ、お互い知らない同士だからね——
それじゃ」

彼と私は軽く頭を下げて、右と左に別れた。

雑踏の中を歩きながら、自分自身がかなり興奮していたことに気づき恥ずかしくなる。

彼が美術館へ行くつもりだったと知って、私は彼の性格がわかるような気がした。

映画館より美術館を選んだ彼は、プライドが高く、神経質そうである。真面目で自信家、フェミニストでもありそう。こんな人の行動は、慎重すぎるくらいではないだろうか。

頭の中では絶対にばれないのなら浮気の一つも、と思いつながら、いざとなるとできないのではないだろうか。

ただ、しゃれた大人の会話を楽しんでみたかっただけかもしれない。はるか昔のラブロマンスの香りを、ちょっぴりかいでみたかっただけなのだ——私と同じように。

結婚てこんなもの

長野県南佐久郡 島山徹子(31歳)

シングルも一つの生き方だが、私は一度は結婚したほうがいいと思う。母・妻・嫁・主婦の役割が待っていて、家政婦となる要素の多い結婚は遠慮したい、と考えている人もいるのだろうが、結婚しなければ見えないこと、分らないことがたくさんある。私はそのたくさんを知りたいし経験したい。そんなことを考えていると、結婚してから周りで起こる出来事が興味深くおもしろい。また一つ一つの出来事がもし自分がその立場だったら、と考えられるようになった。私の人生、結婚してからですまず充実してきたような気がする。

母となった日のことはよく覚えていた。陣痛が来て入院かなと思っていたら、急に破水、それでも病院に行けば大丈夫と不安はなかった。入院してしばらくすると、陣痛が来た。これがそうか、それにしても痛いなあ。だんだん強くなると「〇〇のやつ(夫のこと)私にこんな思いをさせて、この野郎」と思い、「お母さん、早く来て腰

さすってくれないかな」と母を思い浮かべていた。皆が痛いんだしがんばっているんだ、少しのがまんだと自分に言い聞かせ、呼吸法を思い出してはやっていった。

陣痛が遠のいたとき、ふっと頭の中をよぎったことは、医療に恵まれない国の女性の中にはこんな痛い思いの中で死んでしまう人もいるのだ。どんなに辛く、くやしうだろう。女の宿命を嘆き、男を恨んで死んだに違いないということだった。私は昔から男より女のほうが好きだった。出産してから、女であるが故に感じる喜びや哀しみが少し分かるようになって、もっと女が好きになった。

妻となった日のことはあまり思い出しにくい。無口な夫には新生活に不安を覚える妻の気持ちに分かんなかったらしく、ずい分とさみしい思いをさせられた。

理想とする夫婦とはほど遠い私達、しかし周りをみてもお互いにいたわり、尊重しいいなあと思える夫婦は見当たらない。そ

れでも皆げっこううまくやっている。「あ、夫婦なんてこんなもんだ」と妙に納得して、夫への不平不満は持たないことにした。夫もよく見るとやさしいし、家事も頼めば文句一つ言わずやってくれる。一生仲良くやっていかなければならない人なのだから、いい所だけ拡大解釈して暮らしている。

嫁となった日のことは今思い出しても笑ってしまう。

夫は「オヤジの言うことはあまり聞かなくていいぞ、自分で何でもやってみろえ」と言ってくれた（このときはいい人と結婚したとつくづく思った）。新婚のある日曜日、「日曜日なんだから遅くまで寝ていていいよ」と夫が言った。「お義父さんの朝食はどうするの」と聞くと「オヤジが作るからいいよ」と、その言葉に甘え、朝寝坊していた。

なかなか嫁さんが起きてこないの心配した義父は私達の部屋の前に来て「具合でも悪いだかえ」と聞いた。「やっぱ早起するわ」と夫に言って朝食を作った。「オヤジのことはオヤジにやってもらえ」という

夫と「嫁に面倒をみてもらいたい」義父との間で、自分にいいほうをとってニコニコ暮らしている。

男世帯に嫁に行つて大事にされるでしょうとか、気が楽でいいね、と人は言う。言われる通りであるが、嫁・姑問題の根の深さを感じてしまう。

主婦となった日はいつだったか、仕事との両立で忙しく、主婦の自覚がないままに過ごしてきた。あるとき、家の中が掃除しなければ誰もしないことに気がついた。散らかっていたり、汚れていたりすると「散らかした人、片付けてほしいな。特にトイレなんか私は汚したらきれいに拭いて出てくるのに。玄関の靴は一人一人揃えて脱いでほしいな」と思ったものだった。これらはその家がだらしないかどうか、主婦がわかるなんて言われるからかなわない。私も結婚前までそう思っていた。しかし今は、主婦が主導権を握るとしても、皆できれいにすべきたと思う。

結婚して多様な役割を持ち、期待され、自分の存在が大きくなった。性別役割分担を肯定するわけではないが、私はそのこと



に満足している。結婚して多くのことが変わった。多くのことを学んだ。これからもっといろいろなことがあるでしょう。しかし、どの経験も自分にとって掛け替えのないものと考えて、大切に人生を送りたい。結婚しなかったら私は職業を持っただけの人だった。結婚して良かったと思っ

年上の女

神奈川県 匿名

またこの場所へ来てしまった。ちょうど一月ぶりである。むせかえるような若葉に包まれながら、目の下に広がる海に見入る。この前は桜が満開で大変な喧騒の中、私はどこか落ち着かず、早々と帰ってしまった。今朝の何と静かなこと。

ときおり、下の道路を走る車の音と鳥たちのさえずり。当地へ来て半年、通院の道すがら見つけたこの場所は、私のやすらぎ所であり、悲しみはき出しの場でもある。

早いなあ、もう四年たった。苦しく辛く、そして時には甘く、悩みぬいた日々を思う。私は、夫とは十三歳も違う大姉さん女房なのだ。何故、こんな夫婦ができたかという、それは二人が稀に見るお人好しであったからだ。生きていくために三六五日無休で働いていた私は、たまの昼下がり、近くの堤で釣り糸をたれるのが唯一の楽しみだった。そんなとき、彼と出会う。今から七年前である。

色黒の顔にきれいな白い歯が、とても印

象的だった。二、三度会ううち、家庭の事情や仕事上の行き詰まりから悶々としているさまをどうにも放っておけず、母親のような気持ちで、手を差しのべたのだった。そんな私に、いつしか彼の思いは、恋心にかわっていく。人生を達観していたオバサンは、純粋な彼の思いも、一時のハシカみたいなものだと思っていた。

それが三年後に結婚。これから、花も咲き実もなる彼と、二度の離婚をしている大増の私、当然とはいえものすごい反対に、かえって闘志をわかせたのは彼だった。四面楚歌の新生活は、辛い後悔の日々だった。心労から、私は病気になる、深い悩みに沈むばかりだった。彼の家族とは今も断絶のまま、私は、一人の男性を不幸にしてしまったのではと、ときどき、キリキリと心が痛む。

病氣も治り、また、一緒の日々が送れるようになったけど、考え方のずれや、周囲の人の好きな目に、つくづく、年齢差のあ

りすぎる結婚は絶対避けたほうが良いと思う。日本の社会は、女の値うちは若いほどにあると見なし、年を重ねた女には、もう魅力はないとするようなところがある。愛があれば年の差なんて、というのはまっかなウンで、女がウンと上の結婚は死ぬまで悩むことになる。十年後、二十年後の私を思うとき、目の前がぐらくなって自信を失う。若くありたいと願い、努力しても、やはり限界があると思う。どうにもならないことを気にするのはバカだ、と彼はいうが。引き返せないのなら、頑張って、今の生活を大切にしろと、頑張って、今のお互いに、それなりの悔いを抱きながら、これからも二人でやっていくのかしら。何百回悩んでも、最後はいつもここに至る。人間少しくらいずるいほうが、得する人生を送れるのではないか。クソ真面目すぎると、何もかも背負いこんでしまう。

のどかな海は、何も語らない。でも、弱気な私をドンと押してくれる。うしろをふり返るなど。出張から帰る夫と今夜は五日前りに会える。歌をうたって、グチを聞いてもらおう。今後もよろしくね。

(え・田井亮子)

みんな悩んでいくことになる②

神奈川県横浜市 ● 阿部美砂江

体重が全然減らず、着られる服がない。悪露もまだ続いているし、ちょっととした動きでお小水ももれやすくなっているし、私の体は出産のためにはガタガタになってしまったのではないだろうか。お化粧する気にもならないし、髪もボサボサ、服も着たきり、たまらなく自分がみじめに思える。自分の服装もかまわないで私が康平を抱いてあやしたり「かわいい、かわいい」と言ったりすると、まわりは「あんたも親になったわね」とか言って嬉しそうだけれど、私はなんだか自分がどんどん失われていってしまうような抵抗を感じて悲しくなってしまう。

家事育児をバカにする気はないけれど、家事育児だけを繰り返してだんだんバカになっていくような、何も考えない、物事を批判的に見ることに

できない、保守的な、体制的な人間になっていくような気がして、不安だ。そしてそれは、まわりから見れば子供のことだけを考え、子供のために犠牲になることをいとわない理想的なおかあさんの姿だと思われるようで、「あなたもおかあさんになったわね」という言葉の中に「これでおかあさんただのおかあさんね」というニュアンスを感じてムカついてしまう。

私は若いころ、無知からくる傲慢さから、自分たちだけがいつまでも若く、それ以外の世代はオゾンオバンかがキだと思って交わるのを拒否してきたけれど、このごろやっと、いろんな世代を知ることが大切なんだと思えるようになってきた。今、年上の女友達が欲しい。子供が二人ぐらいいる、人生経験つんだ心豊かな三十代の女性。

でもそのくらの年齢の人違って、みんな全然
悩みもないみたいだし、とても忙しそうにしてい
る。私たちみたいなヒヨツ子の母親なんて喋る
時間もなさそうな感じ。あの人たちだって初めて
子供を生んだころは今の私みたいに不安や悩みが
たくさんあっただろうと思うけど、一体みんなど
うやって解決してきたんだろう。それともこんな
悩みを持つのは、特別私が異常な母親だからだろ
うか。



夜、康平がギャアギャア泣いていると憎らしく
って腹がたってひっぱたいたりしてしまっただけ、
今日パーマかけに行っちゃってと離れている間、
康平がいとしくていとおしくてあんなに私を必要
として泣いていたのに、泣くことでしか表現する
ことができない小さい保護すべき赤ちゃんなのに、
昨夜は何故あんな邪険に扱い、放っておいたんだ
ろうと思っ、早く抱いてやりたくて仕方なく、
そうするとおっぱいが張ってブラウスが濡れてし
まった。



もうじき産後二か月になるので、そろそろ重い

腰をあげて自宅に帰らなくちゃあと思っている。

夫は早く帰ってこい、帰ってこいと言ってくるし、
母は康平が帰ったら毎日泣いて暮すと言っている。
母が康平の世話をやいてくれるのは私もすぐ助
かるのだが、ときどきありがた迷惑なくらい手ま
わしよく動いてくれたりアドバイスをしたりする
のが少々うるさくなってきた。母は私と妹を
育てる他にこれといった仕事もたない専業主婦
で、趣味の習い事をやってもプロになるほどの意
志も腕もなかったし別にそれが不満でもなかった。
山本周五郎の小説じゃないけれど、夫をたてるた
めに妻は手に職を持たないのが美德なんて考え方
の持ち主で、だからこそ娘たちが手を放れて、手
もちぶさたでいたところに飛びこんできた孫を手放
したくないのだろう。そのあふれんばかりの愛情
が私にはときにはありがた迷惑に思えるのだ。

先まわり先まわりの母の育児方法を見て、私も
このように親の都合どおり育てられたのかと思う
とイライラしてしまう。私は産後十か月でオムツ
がとれ、親におしっこウンチを教えたのだそう
だ。またもっと小さいころは外出先でウンチをし
てしまわないように、外出する前にコヨリでウン
チを出してから私を連れて出かけたという。もし
てきわめつけ、ぐずって眠らないとき、私は子供

●みんな悩んでママになる

用のレスタミンを飲まされて寝かされたのだ。私の十代の終わりの親に対するものすごい反抗は、この時期の無理なトイレトレーニングに起因していたのかと思うと、それも当然だと思い、よけいムカムカしてしまう。

母は別に悪いと思ってやったわけじゃないのだろう。よかれと思ってこそやった育児だろうし、一歳になる前におむつのとれた私は子供時代、まわりからおりこうねと言われ、母も自分の育児法が成功したのだと得意だっただろうと思う。

だけど康平は私の子供だ。私が好きなように育てさせてほしい。あんなのときは今ごろもうスープを飲ませていたわだの、もうウンチはおまるでさせるべきよだのといういろんな雑音が聞こえてこない場所で、ゆっくり子供と向きあって育ててみたい。



このところ、友人や妹とケンカが続いている。女も仕事を持つべきだとリブ熱にうかされていたくせに、ささと子供をつくって家庭にひっこむとはどういう見か、その心変わりを説明せよという手紙が友人から突然送られてきたのだ。これじゃまるで能のない女が子育てに逃避したかのよう

言い方ではないか、よくもまあマニティーパール一期にある同性に対してこんな手紙が書けたものだと言え、私も相手が当分立ち直れなくなるようなキツイ返事を書いて応酬した。妹とは同じ家の中のちよっとしたこと、キリキリカリカリとしょっちゅう衝突している。こんなふうにくところささいなことでもイライラしたり、ムカッ腹を立てたりすることが多く、精神衛生に非常に悪い。こんなとき康平がいつまでもぐずって泣き続けるとほんとうに腹がたって、自分が何をするかわからなくて怖い。とにかくもう少しで自分たち家族だけの生活が始まるのだから、そうすれば少しは私のイラついた気持ちも落ちつくのではないかと思いたい。



家へ帰ったら何か勉強を始めようと思う。英会話？ 仏会話？ 手芸？ 編み物？ 主婦のやる勉強ってこんなところか？ 康平を妊娠中は女性史とか女性問題の本をかなり読んだ。妊娠したことによって初めて「私は女なのだ」と体でもって実感して、女のことを調べたくなったのだ。初潮のときにも、汚らしいイヤなものというイメージで、女性であることをいやおうなく認識させら

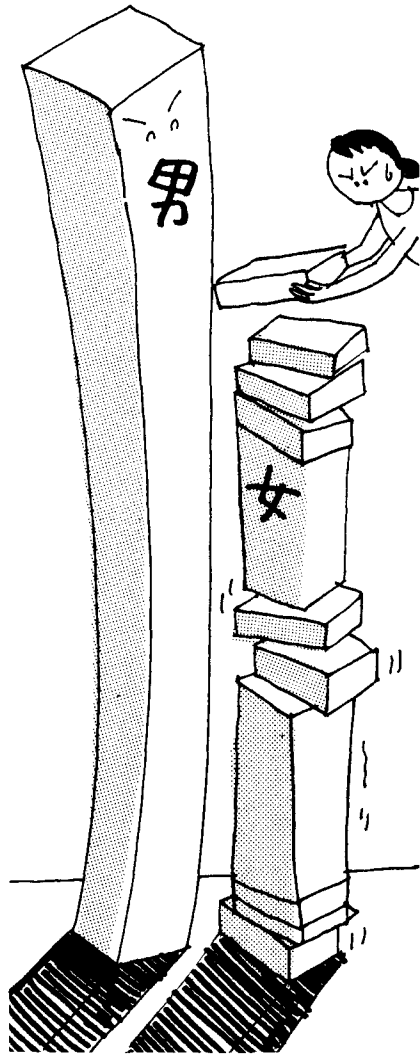


れたけれど、ふだんの学校生活ではだいたい男子と同等、まあ家庭科と技術、委員長が男で副委員長が女なんていう差別は確かにあったのだが、それに気付くことさえしないのんきさで過ごしてきた。勉強さえすれば成績は男子より上になってきたし、大学受験も男だから受かる女だから落ちるといったことはなかった。就職の職種の差別は明らかにあつたけれど、男でも女でも運とコネのある人は恵まれた就職先を見つけ、そうでないものは男女を問わず就職難の時代だったので、親の反対の中、学生結婚をして運もコネからも見放されて就職にあぶれていた人間にとっては、男女賃金差とか雇用均等なんてこと考えるには意識が低すぎた。家庭では夫もお皿を洗い、私も外で働いた。男女はどうか同等に暮らしているように見えた。その後やってきた妊娠の現実。

どーんと目の前が開けた。どうして私だけが産むの？ どうして女は産む性なの？ 男は産まなくても親になれるのに、女はどうしてつわりを経たおなかをみつともなくふくらませて、そのうえ痛い思いをしなくちゃならないの？

女性史を読んで驚いた。こんな神聖で苦勞の多い出産は、昔からの男社会では不浄のものとして見られていたのだ。ある地方では産婦は出産後数日間、

●みんな悩んでママになる



ほったて小屋のような所にこもらせられ、水を汲みに出ることも許されず、その間も寝ているわけではなくて、つくろいものなど座ってできる仕事をするといい風習があったそうなのだ。そのうえ信じられないことに女たちにとって、その小屋で産後すぐにつくろいものをする数日間が、生活の上で体を休めることのできる唯一の時間だったという。なんで?! どうして?! 女ってどうしてそんなにまで虐げられていたの? それなのに子供を産み続けていたの? どうして? 何故? 疑問符がマシンガンのようにやつきばやにとび出してきた。答えを見つげるため、私は女性史や女性問

題の本をむさぼり読んだ。そして、この世の中にまだ女性差別が熾然たる事実として存在していることを確認したのだった。

私はおなかの子供を女の子だと信じた。この子と一緒に女性差別、そしてまた世の中の総ての差別をなくすために闘っていかうと心に決めた。この子と私は母娘二代の女性解放の闘士となって女性の意識を向上させ、女性の人間としての権利をかちとるため頑張るのだ。娘には女としての教育ではなく、人間としての教育をしよう。絶対に「女の子らしく」とか「女の子のくせに」とか言わないで育てよう。私は心の中で娘とともに女性

差別と闘うジャンヌダルクのような自分の姿を夢みてうっとりとした。そして、生まれたのは康平だった。



康平があと五日で二か月という日、やっと実家から自分たちのアパートへと帰ってきた。自分の家にさえ戻れば自分の時間割にそって自由に時間を使いこなせると思っていたが、結局一日がとりとめもなくダラダラと過ぎていくだけなのだ。昼間一時間とか二時間とか眠ってくれるが、その間はほ乳ビンを洗って消毒したり洗濯物を入れてたんだりであったという間に一日が終わってしまい、結局自分の時間なんて持てない。まとまった時間が作れないので却ってすごく疲れる。一日中FMラジオをつけっぱなしにして、ラジオ局からの一方的な情報をさしたる抵抗もなく受け入れて、ああ、このリクエスト曲七十年代に流行ってたっけなんて思って、世の中、平和な小市民だらけのよいうな気分になる。自分はどこか平凡に生きてはいないように思いたいけれど、客観的に見れば平凡な「サラリーマンの妻、二十六歳。子供一人」にきっちり類型化される。

朝七時十分に起床。朝食の仕度。朝食。あと片

づけ。衣類とおむつの洗濯二回。康平の朝のミルク。少し抱っこしてもう一度寝かせる。掃除、洗濯もの干し。新聞をざっと読みながら自分の昼食。康平ミルク。あと片づけ。洗濯ものとり入れ、たたみ、しまい。康平ミルクと夕方のぐずり泣き……果てしなく続く家事育児の合い間のきれぎれの時間に、読み易い軽い本を読み、耳ざわりのよいポップスのレコードをかけ、何かを深く考えるヒマも気力もないうちに一日が暮れていく。私はだんだん、見知らぬ女「二十六歳主婦」になってゆくようだ。



母が康平の顔を見に来た。天気がいいので日光浴に外に出たら、近所の女の人で康平と同じくらいの子を抱いて、同じく日光浴をしている人がいた。私は知らない人に声をかけるのが大の苦手だったが、母に促されて真赤になってあがりながら話しかけた。「あ、失礼。あの、赤ちゃん、おいくつですか？ 私の子二か月になったばかりなんですけれど、あの、よろしかったらこちらにいらしてお話しませんか？」

彼女、中本さんの赤ちゃんは康平より十日ばかり遅く生まれた良ちゃん。近所で初めての康平の

●みんな悩んでママになる

いる自分は大人気ないと思うけど、「ホラ、あんたは結局、親の私にたよらなくちゃ何もできないのよ」と言われているようで、しかもそれを優しく言ってくれ、そしてついふらふらと何でも母にたよってしまう自分の愚かしさに対してもうらみを感じる。私はひどくひねくれた人間なのだろうか？

そして私が一番怖れていることは、私が康平に対してうらみを感じているのではないかということだ。私はときどき、そんな気持ちで自分の中にあるのを感じてぞっとする。この子のために何にもできないなんて思う自分に、母親になる資格なんてなかったんじゃないだろうか？ 他の人はこんなことを少しも感じないで子育てをしているのだろうか。

康平、早く大きくなあれ。ママとたくさんお喋りしようよ。



英会話の勉強を、テープで始めることにした。少しは生活のハリになってくれるだろう。海外に行く予定も外人と喋る機会も今のところないからいつまで続くかわからないけれど、何もしないでいるよりはいいだろう。産後三か月たたないのに

生理になった。母乳がほとんど出なかったせいだろうと思う。

町角で主婦が亭主の悪口を言いあっていた。収入も少ないし、亭主もひがみっぽくなっていやだとグチのこぼしあい。亭主の運の悪さにひきずられてしまった自分が情けないと言っていた。それをきいていて、自分はある人たちと同じようなことを考えていたんだ、何てバカだったのだろうと気がついた。運の良さっていうのが夫の経済力など運の強さをさすことを言うのなら、その夫の運が悪くなった今の状態も仕方ないのではないか。自分は何ら努力もしないで他人の運に依存して幸福を得ようなんて望まなければいいのだ。それに気がついたら何だかパッとわり切れて、すっきりしてしまった。



康平、太りすぎ、腕や太モモ、プクプクムチムチ、抱っこしているとフーセンみたいな、モモンガのぬいぐるみを抱いているような気になる。遊びに来た友人が康平の太モモを見て、思わず「ブイラーみたい」と言っていた。

このところ連日の来客責めで、いささかくたびれてしまった。ふだんは喋る人がだれもいなくて

●みんな悩んでママになる

さびしい思いをしているくせに、ときどき友人が続けて来ると生活のリズムが狂ってどっと疲れてしまう。

子供のいない友人に育児のグチを喋っても当然ながら解ってもらえない。困ったような顔をして「でもかわいいうでしよう」と言われ、私もそれ以上、もう何も言う気がしなくなる。

子育てについて心配なこと、不安なことがあると、すぐに育児書を開く。子供については確かにいろんないろんなことが書いてあるが、母親の心理や心がまえについてはいい加減なことしか書いてない。子供を育てるのが主に母親であるなら、育てる立場にいるものごとについても書いてあっていいんじゃないか。子供の児童心理については○歳のときからそんなにも大切で、母親のそれはどうでもいいのか。それとも子供を生んだらそのとたん、母親はみんな心身共に立派な完璧な母親になるべきで、そんなことまで育児書を書く専門家の知ったことじゃないのか。こんなことを言うのと甘えていると言われるだろうか。こんなことを考える私だけが普通じゃないのだろうか。

何故乳幼児を持つ母親の心理の問題が、社会問題として話題にならないのか。そんなことをゆっくり考えている間もないうちに、子供が年々大き

くなってゆき、親子間で繰り返される試行錯誤の中でやっと問題点がはっきり見えてきたころには、もうその問いに対する答えは意味をなさなくなっているからだろう。何故なら子供が大きくなるにつれ、もっともっとこみ入った難しい問題が次々に投げかけられてくるからだろうと私は推測し、これから先、私に与えられるであろう試練の多さを思うとぞっとする。



生後三か月が過ぎた。生後間もなく、おしっことウンチとミルクの世話に夜も昼もなくあけくれしていたころ、まわりの大先輩たちは、「大変だ大変だ」と育児に悲鳴をあげる私に対して「寝ている間はまだいいわよ。これから動き出すようになってごらんさい、もっと大変だから。今のうちはこのでもまだ楽なほうよ」と、まるで意地悪でも言うかのように嬉しそうに脅した。それは多分、自分たちもやってきたことだからあんたも苦しみなさいよという気持ちから言ったと思うけど、実際言われたとおりに子育ては徐々に大変になっていった。もうとても英会話の勉強なんてできない。せいぜい本を読むくらいしか何もする気が起こらない。



昼間子供と二人きりでいると、誰かと思いい切り話をしたくなる。子供ができる前はただバクゼンと「主婦の井戸端会議」ってくだらない。話題は自分の夫と子供のことと近所の噂話ばかり。その他にする話ときたら芸能人のくだらないゴシップぐらいじゃない。あゝいやだいやだ、何て低俗なんだろう。私はくだらない井戸端会議だけは絶対にしたくないわ」と思っていた。それなのに今、モウレッツに話がしたい。くだらない井戸端会議がしたい。夫や子供のことを誰かに話したい。女優○子の離婚に関する私の考察を述べたい。歌手×子と俳優△男の不倫に対する私の意見を語りたい。アイドルの自殺未遂の遠因はこういうところにあったのではないかと思う私の憶測を喋りたい。ゆっくりとたっぷりと思いい切り、好きなだけ、もう喋ることがなくなるまで喋り続けたい。

中本良ちゃんのアパートに康平を抱いて遊びに行く。中本さんは私と一歳違い。子供のことについて少し話ができた。誰かと喋ると気晴しができる。でも子供と一緒にだと泣きだしたりぐずったり、ウンチやミルクの時間、おねむなどに邪魔されて胸の内をとことん喋ることができず、ありきたりの会話程度で終わってしまう。悩みを打ち明けるとような間柄になるにはしばらく時間がかかるだろう。

(え・堀切潤子)

●みんな悩んでママになる

●サーブプレシノーブ●

「共通生存テスト」
を読んで

長野 英子

「共通生存テスト」を読んで、今盛んに喧伝されている「高齢化社会の危機」ということについて少し書いてみたいと思う。

「高齢化社会が到来したから」という理由で、医療費抑制政策（医療費の受益者負担増大策）、福祉切捨て政策が正当化されつつ進められている。八七年に老人保健法が改悪され、医療費の自己負担増が決められ（医療費の自己負担増により、老人が早めに病院にかかることができず、ひどく悪化するまで受診できなくなったため、かえって医療費総体は増加する結果となっているのである）、病院より安上がりで老人を収容できる、老人保健施設が新設された。老人保健施設は病院と、特養ホーム・自宅との「中間施設」と言われているが、実際には医



師は百人に一人それも常勤でなくてよいとする貧しい医療水準が決められており、要するにさっさと老人に死んでもらうためにいれておく終末施設である。

昨年六月厚生省の「国民医療費総合対策本部」が中間報告を出したが、そこでも老人がやりだまにあげられ、老人については「不必要な長期入院」の是正のためと称し各病院に「入退院判定委員会」を作ることが提言されている。医療的観点からではなく純粹に銭かねの視点で老人を医療の場からたたき出そうとしているのである。厚生大臣が「老人に医療を施すのは枯木に水をやるようなもの」と公言したように「生産に役立たない老人には医療はむだ、早く死んでもらうしかない」という時代、つまり「共通生存テスト時代」が到来したのである。「高齢化社会の危機」なる宣伝には大きなトリックがある。一九六一年に国民皆保険制度が作られたが、そのころの人口構成では若い元気な世代が多く、掛金のみ集まり

出ていく金は少しですんでいた。この掛金は大蔵省資金運用部が握って高度成長の資金源となった。今これが大蔵省に五十兆の黒字となってたまっているそうである。現在これが、厚生省と大蔵省の争いの種だろうだが、仮にこれを厚生省が管理し年金や医療費に使えば、医療費関係で削れといわれている六千億など利息だけでおつりがくることとなる。金を取るときだけ取り立て、それを大盤振舞いしておいて、必要な今になって財政難だと騒ぎだす、正に国家による保険金詐欺といわなければならぬ。

このペテンのうえで、これまで日本の産業を支え宮々と働いてきた老人をあたかもじゃま者のように、「高齢化社会の危機」と宣伝して、老人をスケープゴートにして医療費や、福祉を削ることを国民に納得させようとしているのが国家のたくらみである。こんなデマ宣伝を許さず、老人も「障害」者もともにわかち合って生きる社会を作っていくのが私たちに課せられた課題だと思ふ。

「共同購入に思う」 を読んで

埼玉県与野市 のむらさなえ(55歳)

同市内なのでもしかしたら玉置さんと私は同じ生協の組合員かもしれません。毎年年度替わりの時期になるたびに、玉置さんと同じ悩みを繰り返しながら、とうとう十年以上も当番をし続けています。地区の運営委員も十期近くやりました。有機野菜の産直を地域に定着させる活動も続けています。

その間、たしかに「もう解散だ」とか「いちぬけたあ」と、たびたび思いましたでもそのたびに決心が鈍るのは、市販品よりは信用できる生協の品物、とくに有機野菜の素晴らしいさをあきらめることができず、それらを手に入れるために、もろもろの面倒にも目をつぶって、今年もまた万年当番を続けることにしました。

また、専業主婦で家にいる私にとって、社会の流れを知る窓の一つとして、生協はいろいろ勉強させてくれました。家庭のな

かだけでなく、広い視野を与えてくれるとも思います。安くて便利な灯油はなぜかとも。



(え・堀切潤子)

子ども中ども大ども

孫にナンパされた私

大阪府池田市

日比野 都(66歳)

五月九日、日本を出発、三か月間、スペインのバルセロナで孫と生活する。

孫は十九歳、娘夫婦のひとり息子である。兵庫県の田舎の中学から、塾へもゆかず、大阪教育大学附属高校に合格したので、娘夫婦はもう有頂天、東大、京大ゆきを夢見て期待をしていた。

ところが、何を思ったのか、受験勉強を放棄、スペイン語を独習。去年、高校卒業と同時に、アルバイトで稼いだ乏しい資金で、スペインと日本を、行ったり来たり、バイクや車の個人貿易をはじめた。

娘夫婦の落胆、憤慨はいうまでもない。父親が三歳のとき戦死、大学ゆきをあきらめた娘婿にしてみれば、息子を大学へやりたい気持ちは、私には痛いほど分かる。私は「お父さんの身にもなってみたりいな。大学を出てから好きなことをやればええやんか」と説得したが、「どうして親のボラン

ティアをせんなんのや、そんなに大学へ行けというんなら、オヤジが行けばいい」と、剣もホロロで、私は呆気にとられて開いた口がふさがらなかつた。

私は、二十五年前、四十二歳で、頼りきっていた夫を亡くして、しかたなく自立してみても、あなた次第の人生は絶対にあかんなあと思つた。この体験から、孫が自分で選択した人生なら、やらせてみたらよいではないか。自分をまげて親のいいなりになつても幸福とは思えない。

「それならば頑張つて、オヤジを見返してやれよ」と、ゆきがかり上、応援する羽目になつた。

婿は、バーサンがけしかけるとは何たることと怒り「金やらんでくださいよ」と釘をさす。

孫は、多分、埋草用だつたらうと思うが、スペインの全国紙に取材されたり、ラジオにも出た。竹刀を手に散歩していたら、バルセロナ郊外の高校の校長だという人に路上でスカウトされ「僕の高校の生徒たちに君の話をきかせてくれないか」と頼まれて、高校の教壇に立ち、何回も授業をしたんだ

そう。

「バーチャンよ、カルチャーショックで、目えまわすぜ。いっぺんスペインへ来てみる」

孫の誘いに私の心は動きはじめた。

クリステイヌという孫のガールフレンドも、私に「健太郎君のオバーチャン、是非スペインにいらっしやい」と手紙をくれる。

婿を怒らせた以上、どうせ五十歩百歩、無責任パパアに徹しよう。私はもう数年で七十歳、折角のチャンス、こういうユニークな孫を活用せんというテはないと判断、スペインヘレッツゴーと決断した次第である。

ただの観光ではつまらん。スペインの教育、家庭生活、老人問題など、しっかり見てこようと思っている。

孫とはよく口喧嘩をするが、しかし今回はスポンサーの私を利用し、私は孫の語学力を利用するわけ。持ちつ、持たれつという、きこえはいいが、新・人類と化石の珍道中という事になりそうだ。

散髪

宮崎県宮崎市

川崎 紘子

「やっぱり、お母さんがちょっと切つてよ」

トラ刈りの頭が、手に負えなくなった、高校生の息子は、ついに助け舟を呼んだ。

「見てごらん、お母さんが言ったでしょうが、プロでも自分の頭を刈り上げるのは無理なんだから」

「短かく切らんでね。段が、わからんようになるだけでいいとだけん」

何かを察したのか、何度も念を押す。

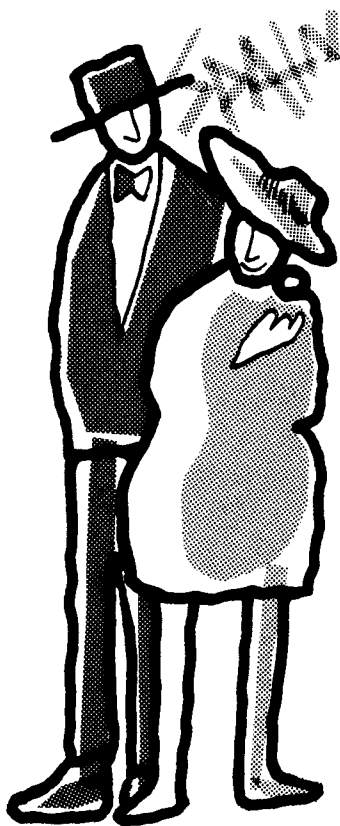
「わかってるって、母親を信じてませんね。息子が笑われるように切つてやる親が、どこにいますか」

軽やかに、鉄の音を立ててはいるものの、首筋に沿って、深くバリカンを入れ込んでいるのを補修するには、かなり腕前がいる。素人の私には正直なところ、まったく自信がないのだ。

「で、なんで急に髪を切る気になったの？この前、床屋さんに行つたばかりでしょうが」

「……」

「さては、検査にひっかかったな……」
「おじ(怖い)。おじ。先生に言われて、職



員室に行ったら、生活指導の先生が、生徒をズラーと並べて髪を検査をしようとよ。髪に物差しを当てて、ちょっとでも長いと、下の方から缺でプツン。やばいと思っただか、知らん顔して逃げて来た。自分で切った方が、ましだもんね」

「それで、今から床屋に行くには、遅すぎる……と、言う訳か」

堅く短い毛が、バリカンに飛ばされて、私の黄色いセーターの腕に、うっすら積もって来た。

「やっぱり、あした床屋に行かんとだめかなあ……」

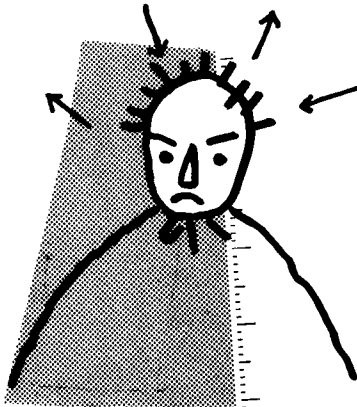
ベッドの横に立て掛けた鏡を覗き込みながら、息子は独り言をいう。

ばかめが、二千円も出してどこを切ってもらったのだ。まだ、一週間しか経ってないのだぞ……。

「お母さんの腕も落ちないねエ。いや、落ちるところか、上がってますね」

「どうでもいいから、あんまり短かく切らんよ」

「まかせなさい、この前はお父さんのも、切ってやったんだから」



「ヘエー、でもお父さんとは、髪の量が違うけんね」

まいったまいった。いつも関心がないかのようにしているのに、見る所は、ちゃんとしていたのだ。

我が家は、子供たちの床屋嫌いと、私の散髪ヘキ(?)のため、二人の子供たちが中学になるまで、床屋には、二、三度しかお世話になっていなかった。その実績があると云うのに、一度も私に髪を切らせてくれなかった夫が、つい先日、床屋へ行く暇がないとぼやいているではないか。そこで「私が切ってもいいんだけど……」の一言に、どういう風の吹き回しか「じゃあ、やってもらいますか」と、すんなり乗ってきた。結婚以来二十年、初めてのことだった。以前は、タワシのように堅く多かつた髪も、いつの間にか、量は勿論のこと、質まで心もとなく変わってきている。か細くなった髪に、バリカンは何となく、似合わない。しみじみと歳月を感じながら、貴重品を扱うように丁寧に缺を入れていったのだ。

「バツサリ切りよっとじゃあなかるうね」

息子は気がもめる様子。

「少しは短くしないと、段はとれないよ」

「……」

「あゝ、びっくりした。また刈り込みを深くするところだった。何しろ、バリカンを使うのは久しぶりだから」

「お母さんは、前科があるとだけんね。気が付けてよ」

「ハハハッ、そうだった、あの時は傑作だったね」

それは息子が小学三年生の時だった。暗くなるまで外で遊び回っていた子供たちを散髪してやれるのは、お風呂へ入る前の気ぜわしい時だった。

その日も、あわただしくタオルとビニールを首に巻き、バリカンにカパーを取り付け、まずはおでこから、と額に当てたとたん、三センチの長さに切れるようになっていたカパーが、ポロリと落ちてしまったのだった。しまったゝと、思った時は既に遅し、約四センチ四方の正方形が、まるで割ったように眉の上で、青々としているでは

ないか。

どうしよう、と思ったとたん、カッターと体が熱くなり、うろたえてしまった。

平常心、平常心。ここで私が慌てたら息子もびっくりして、大げさに怒り出すにちがいない。もし、恥ずかしくて学校へ行けない、と言い出したら無理に連れて行くほどの、むごさを私はあいにく持ち合わせていない。それほど、青く、おでこの上に輝いているのだった。

「ああ、ああ」息子の何とも言いようのない声に「これぐらい軽い軽い。横の髪を寄せたら見えないよ」

無責任に言っただけのもの、横の髪で隠れるほど生やさしいものではなく、もしそんなにしたら、お岩さんゝを連想させるような異様感を持つほどだった。

「そうだゝ マジックを塗って帽子をかぶったらわからないかも」

「じゃあ、教室ではどうすつとねエ」野次馬で見ていた妹も口をはさむ。

こんな、くだらない事を、その時は真剣に考えたのだった。

「男がこれくらい気にしない気にしない。」

知恵を出したら何とかなるから」勝手なことを言いながらも、半分は自分に言い聞かせ、冷や汗を流したものだ。

「いいこと気づいた。ここに合わせて丸坊主に切ってしまうか、それともバンソウコウを貼って知らんぷりして行くか……。お兄ちゃんは、どっちがいい？」

こんな時大切なのは、一つの方法を親が決めて「これにしないさ」と押しつけては問題が後に残る。何か二つを提案して、どちらかを本人に選ばせることが、明朗解決の鍵のような気がする。

「ちょっと短いから、坊主頭になったら、一休さんみたいで可愛いかもね」

「坊主の人は、まだおらんから目立つよ」

「そうか、それにまだ寒いしね」

なるだけ、こちらのほうは選ばせたくなかった。私の不注意がもつて、子供に苦労をかけるようで……。

「じゃあ、バンソウコウを試しに貼ってみようか」

丁度あつらえ向きに、正方形で膚色のりパテープがあった。

「うわー、ぴったりよ。鏡見てごらん」

「うん……」

一瞬、息子に安心したような気配が伺えた。「これで決定ね。次は学校で友達が尋ねた時の作戦会議に移ろうか」

と、言うことで、あまり乗って来ない息子と、面白がっている妹と三人で相談した結果、「こけた所に石があって、ケガをした」と言うことになった。

翌朝、少し気にしながら、バンソウコウの息子は登校して行った。私とは言えば、一日中、何も手がかず帰りを待ったのだが、いつものように帰って来た彼は、もう忘れていた様子。

「どうだったの、何も言われなかったの？」
「別に何にも……ああ、安田君が耳のそばに来て、「かあちゃんが失敗したんだろう？」て言うただけだよ」

「マイタナァ……安田君も経験者なんだ」
結局、私が一人で慌てることも、案じることもなかったのだ。

今では我が家の笑い草になっている。

あれから十年近く経った今、今度は息子が失敗したトラ刈りを、何とか見られるも

のにしようと、悪戦苦闘しているのだ。

「もういい、明日床屋に行くけん」

「そうね。それがいいかもね」

うまくできないときはプロにまかせるに限る。腕に覚えのある(?)私としては、まだ一度もその手を使っていなかったのだが、今回だけは、翌朝一番にでも行って欲しかった。

結局、少し段のある刈り上げをして、翌朝学校へ出かけて行った。だけど、その後も、床屋へ出かけて行く気配はない。いや、それどころか気に入ってしまったのだ。
「検査に通ったから、床屋には行かんでもいい」と、すましたもの。

トラ刈り禁止の校則があるわけでもなし、それは通るでしょうけど……。

とにかく、長年の家庭散髪の弊害なのか、こと頭髮に関して、感覚がマヒしてしまっただのではないかと、ひそかに心いためている今日この頃なのであります。

神奈川県川崎市

厚志二十歳の旅立ち

十文字美恵

次男は高校の卒業式の翌日から働きはじめた。仕事は冷凍食品を配達する軽トラックの運転手である。

配達先は主に田園調布や成城あたりの個人の住宅らしく、「ザアマスおばちゃん相手でサ、鼻先でこきつかわれて、ヘイコラ頭を下げて、まるでコメツキバツタみたいだ」とよくばやいた。「あっちの注文忘れでもオレが怒られて、オレがあやまるんだぜ、ああいう人はオレたちを人間とは思っていないんだよな」

働き始めて三か月ほどたったある晩のこと、夕食を済ませテレビをみていた父親に、話があるからテレビを消して座ってくれと真面目な面持ちで向かい合った。

「オヤジ、真面目に聞くけどサ、オヤジは何が楽しみで毎日働いてきた？」

余りの唐突な質問に夫はウーンとうなずたまま、タバコに火をついたり、お茶をす

子ども中ども大ども

すっかりしながらしどろもどろに、

「うーん、何が楽しみでねえ、急に聞かれてもねえ、お父さんはお前たちが大きくなるのを楽しみにしてきたし、お母さんやお前たちに生活の苦勞をさせないように頑張ってきたんだろうなあ」

すると息子は、

「子どもやおぶくろのためだけに、あんなに朝早く、毎日毎日ラッシュにもまれて、何十年も働き続けることができるものなのかなあ……」

「うーん」夫はまたうなった。そして私の顔をちらっと見てから、

「男ってそんなもんだよ、楽しんで働いている人なんてそうはいないんじゃないかなあ、生甲斐とか社会のためとか格好いいこと言っても、本音は家族のためじゃないかなあ」

「自分の楽しみはないの？」

「もっと単純な目先の楽しみといわれれば、日曜日にゴルフに行くことかな、それでまた一週間の元氣を貯えているのかも知れないよ」

男同士のしみじみとした会話で、終始、

夫を助けてやりたい気持ちにかられながら、ついに最後まで口を挟むチャンスが見つからなかった。

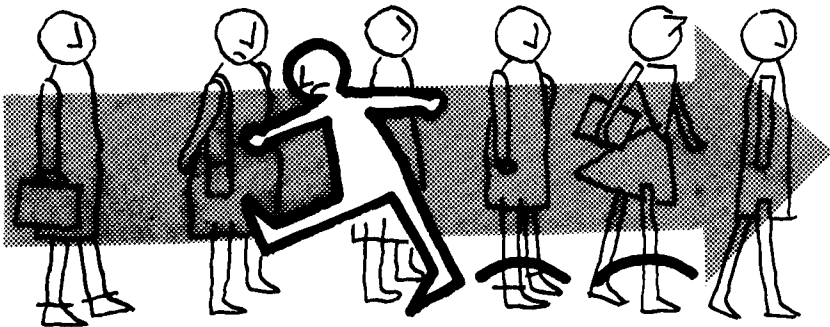
何をやってもキャラクターな子で、およそ努力の二文字には縁がなく、勉強も運動もそこそここなしてきた息子である。

中学校を卒業するとき、野球部仲間には「甲子園で逢おうぜ」といい、女子には「甲子園に必ず応援に来い」と言って別れたと言う。

その意気込みも束の間、仮入部で野球部から脱落、センスがあるとの自画自賛も、全国から集まる名選手の前にも簡単に降参したのだった。

落第しない程度のぎりぎりの成績で、サッカーを楽しみ、友達いっぱい楽しい楽しい高校生活を送った。そしてふと気がついたときには、周りはみな進学。あわてて大学に行きたいと言ったとき、ケチババアとのしられながらも、「親の責任は高校まで、大学に行きたければ自前でいきなさい」とそれまでの親の考え方を貫いたのだった。

「オレ、やっぱり大学に行こうと思う」と



いいだしたのは、そんな父親との会話があってから間もなくのことである。

「一生働き続けなければならぬのならコメツキバツタではない、自分の意志で働けるような仕事をしたいから、それを考える時間をつくりたい」というのがその理由だった。

かくして次男はこの三月、少々の貯えを懐に大学の二部に入学した。沖縄県である。どんなアルバイトなのだろうか、洗濯物は



どうしているか、学校は、仕事は、食事は、友達は、心配は山ほどあるけれど、ここが我慢のしどころ、働くということ、学ぶということ、生きるということの何かをしつかりと自分の足で踏みしめて学びとって欲しいと願っている。息子は間もなく二十歳である。

高卒女のホンネ

岩手県北上市
菊池喜恵子

昨年の末、満三十六歳になった。明らかに人生の折り返し。頭腦のほうも、肉体的にも、ピークは過ぎつつあるのだと、近頃思うようになってきた。中学三年生の息子の勉強など見てやる気力も全くないし、小学六年生の息子に算数を聞かれても即答できず、教科書を何度も読み返してからやっと教えている。それさえも、めんどくささが先に立つ。

子供達が小学校へ入学し始めた頃は、はりきり過ぎて聞かれなくてもあれこれ干渉し、友達に負けるな、一歩でも先に行けよ

と、うるさいほどガミガミしていたというのに。はつきり言って、親の見栄というエゴと、期待過剰だったのだ。それに気がつくまで、どれほどイライラし、子供が歯がゆく、ぎすぎすしていたことか。子供のためにもなっていないかった。それを全部やめたら、今度は教えてと聞かれても、めんどうだと思ってしまう。

親が教育ママになればなるほど、子供の成績が伸びてくれるのなら、お金をかければかけるほど良くなるのなら、いくらでもお金は惜しみたくないし教育的にもなったりしたいが、いかんせん、我が子はそうもいかず、お金もゆとりがあるわけじゃないし、かえるの子はやはりかえるの子、そうあきらめざるを得ないのだ。

私達夫婦は、岩手県の二流の公立高校卒である。夫は工業高校出で、私は普通科だった。やはりあの頃も三分の二ぐらいは、大学や短大、専門学校と、進んでいった。勉強が好きじゃなかった私は残りの三分の一の道を選んだが、経済的に考えても行けそうもなかった。仙台や東京の短大や大学に行った人は、良家の坊ちゃんや、お嬢さ

ん、私の目にはそう写っていた。二十年経った今だって、地元の国公立大に進む人以外は、よほど親が経済的に恵まれていなければとても進学させることはできないと思う。

むろん、吹けば飛ぶような、せんべい屋の我が家では借金でもしなければ無理である。奨学金を受け、アルバイトをしてでも大学へ行きたいという勉強意欲にあふれた子供さんは別であろうけれど。

この言葉は嫌いなのだが、中流、下流の家庭の子はどうあがいてもそこから這い上がれないような気がする。だからこそ、こどもも受験競争が盛んになり、子の将来を思う親達が、身を削るような思いで働いているのだろう。

いったい幸せって何だろう。いい学校、一流企業、高収入を得ることが、幸せの源になるのだろうか。素直で明るい健康な子供なら、多少成績が悪くてもいいのだから。確かに成績だけがすべてではないけど、それはきれいごとの口先だけで、やはりどんな親だって、我が子だけは、人よりも良い成績をとるに越したことはないのだと思

う。

わいふ二〇九号の、高収入を得る企業人の夫の母親役にむなしさを感じて、別居した女性の投稿を見た。我が家の場合、生活の糧を得るため義父母と私達夫婦と、総動員である。人口五万人そこそこのこの町にも大型店が相次いで、小さな店はどこも青息吐息なのだ。安くて包装にお金がかかった見栄えのいい大手企業の製品に、とてもじゃないけど、我が家のような昔からの名物手作りせんべいはたち打ちできない。材料代を支払い、生活費を取り、一階が店舗と工場、二階が住居の住宅ローンを支払い、と預金はわずかしかできず、そのうえ、どうしても冬場は暇になり売上げが落ちこむので、二か月くらいは生活費もままならず、わずかな預金でやりくりしているのが現状だ。ビデオもない、ステレオもない、ピアノもない。中学三年になった息子は二年前から夕刊配達のアルバイトを始め、自分でラジカセを買い、衣類も、親は下着やくつ下しか買ってやらないので自分で買っている。私は目の前のハードルを越えていくのが精一杯で、美容院へ行くのも年に二度、髪

をおだんごに丸めてハンカチで包んでいる。

いつもエプロンと、ジーンズ、スニーカーといういでたちだ。でもむなしさも感じないし、むしろ働いて子供を育てて、生きていくという実感がある。三年前、夫が病気で半年ばかり入院した時など、我ながらどこからこんなに力が出てくるのかと思うほどがんばれた。

豊かではないけれど、仕事も楽ではないけれど、子供も低空飛行の成績だけれども、幸せの感じ方は気持ちのもちようじゃないかな。

自分の心の奥の奥、やはり本音は、こんなしがないせんべい屋など継がなくていいから、子供はいい成績とって、高収入を得る仕事について欲しいのだ。「幸せなんて気持ちのもちようよ、いろんな辛い体験は人の心を豊かにして思いやりを持てるようになるもんだよ」なんて、口では立派なことを言っているけれど、お金はいっぱいあるほどいいし、仕事も楽なほうがいい、そうできないから、自分で自分を納得させているだけなのだ、本当は。

兵庫県神戸市

母と娘の絆 (part II)

吉崎 玲子

要は母親であるこの私の、考え方ひとつなのだ。確かに、成績だけが人間を測るすべてであるはずがない。

でも「中学生」という視点で娘を眺めた場合、生活態度を含めて成績表にバツチリと出た結果は、さも「ありなん」と認めざるを得ないのだ。

あひる艦隊が並ぶ成績は相変わらずで、中一の三学期は、何と家庭科が「1」であった。数学、英語は毎回0点からヒトケタを譲らず、完全にこぼれてしまったことを知りながらも、無駄なひとことを発するのをこらえて、ひたすら静観するつらさを味わっている。

天の救いとも思える娘のおおらかな性格が幸いしてか、それでもよく食べ、よく眠り、私の手作りの弁当だけは忘れずに、登校した。
出来た母親なら、

「エンジンだって落ちこぼれだった。我が娘も大器晩成型か?!」と、腰をすえるのかも知れないが、私はもうダメだ。

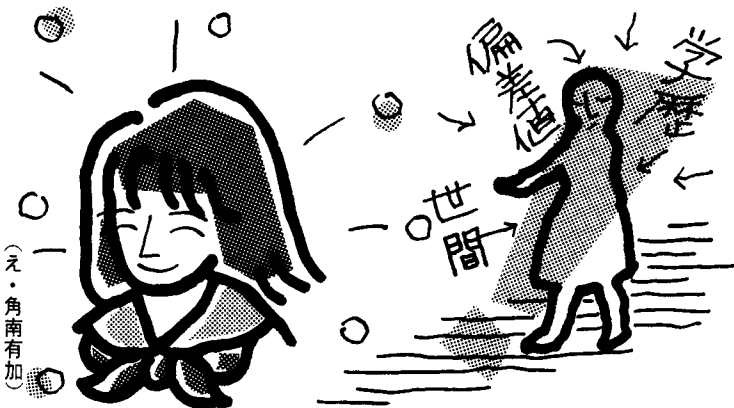
本誌によく登場する門野晴子さんは、愛するもののために、教師を相手にして立ち上がっているし、某女医のお母さんは、偏差値におぼれる息子さんを助けたい一心で、一緒に受験勉強に取り組んで引き上げたという。

私は、ただひとりの娘のために、何をしているのだろう。気持ちを押さえ切れなくなつて、ヒステリーの総攻撃をかけ、オロオロと教育相談所を往復するばかりの能なしだ。

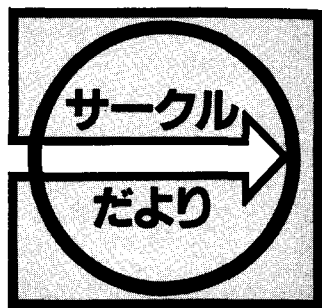
カウンセラーは、成績オンリーの現代社会に問題あり、と言いつ、「個性の芽を摘みとらないこと。心を病気にさせないことの方が大切です」と毎回、強調される。

興味のあることだけに熱中して、イヤなものからは徹底的に逃避する。これが嵩じれば非凡人の域に達するのかもしれないが、人畜無害、無味乾燥、十ぱひと

からげの域から脱することのできない私は、娘の輝く部分を見つげながらも、取り出してさらに磨きあげるすべを知らない。



(え・角南有加)



船橋周辺 サークルだより

誌上での呼びかけで始まった私達のサークルも二年目に入りました。

今年は、一月に、「テレビアニメの性」というテーマで鶴田泉さんが担当し、女性差別を助長する現状を話し合いました。見る対象が幼児から多感な時期にある子供達で、すんなりとあられるは喜んで受け入れてしまう問題点を挙げました。

三月は早稲田大学三年の主婦学生で、中学生と小学生の子連れでアメリカのオレゴン大学に留学した伊藤充子さんや、食べることや自分の住んでいる地域のことを考えるのは、生きていけば当然やるべきとあって、無農薬野菜の会や子ども劇場などの地域活動をしている植松礼子さんの話を聞き、女の生き方を考えました。

◆定例会 奇数月に開き、テーマ設定やメンバーへの連絡等担当者を決めて行なう。

◆会費 一回三百円（連絡会員は年会費六百元）

◆連絡先 Ⅷ〇四七四—九一—〇六七六 山田



“わいふ”関西 合評会

わいふ二二二号の合評会をしませんか？

私たち、わいふ読者数人で投稿・掲載を目標に文章教室を続けています。毎月第一・第三火曜に二〜三枚の作品を持ち寄り勉強しています。わいふ誌発行の翌月、奇数月の第一火曜を合評会としますので、「わいふ読むだけ会員」の方も含め、「わいふ書きたい会員」の仲間を募集しています。

書きたい気持ちがあれば、文章力は問いませんので、ぜひ合評会を契機にのぞきに来てください。

◆問い合わせ先 高宮みかⅧ〇六一八五八一—四三七 家守恭子Ⅷ〇六一九一三—〇六六七

●サークルづくりの おすすめ

「わいふ」は投稿誌であるとともに、生き方を考えたり、会員間のコミュニケーションができる雑誌でもあります。地域の会員がつくるネットワークがサークルです。どんなたでも、「わいふ」定期購読者（会員）であれば、よびかけてつくることができます。あなたもよびかけてみませんか。このコラムによびかけをお載せします。

編集部にお問い合わせ下さいば、ご相談に応じます。

サークルができたなら、ぜひおたよりをお寄せ下さい。おたより（サークルだより）の書き方も、編集部にご相談ください。

担当・和田

連載 2

私の

財テク武者修行

東京都 市川千歌子

今度は日電の

転換社債

少し転換社債のことが分かりかけてきたころ、またCクンから電話。

「日本電気の転換社債を買いませんか。これからの我が国は、輸出を減らし内需を増やす以外に、生き残りの道はありません。内需の方針としては情報通信産業に力を入れるので、そういう観点から見ると日電は有望です」一二八万円とのこと。

本当かなあ……と思いつつも前のレクチュアの内容を思い出す。五月十四、十五日にアメリカの貿易収支の発表がある。アメリカの動向は世界の注目的なもので、こういう経済にかかわる重要な問題は早くから

分析・予測されている。今回の発表予測は、依然として大きな赤字なので、アメリカはさらに輸出を増やし、輸入を減らす政策を取る。そうすれば我が国のアメリカ向け輸出関連株は下がるといふものだ。

「五月十五日以降に買います」

しかしCクンは勧める。

「日電は外地生産が多いので、輸出とは関係ありません。ですから待っても下がりにせんよ」

急ぐこともない。

「一二五万円以下になったら連絡して下さい」と言ってる。

転換社債の価格は株価と連動する。そこで新聞で日電の株式欄を見ているが、ない。電気機器銘柄のグループを、上に下に目を走らせる。いくら捜しても見当たらない。

日電は建設ではない。もちろん食品でもない。船舶や運輸でもない。仕方がないので、Cクンに聞く。Cクンが笑って、教えてくれた。

「株式欄の始めの優良指定銘柄のグループの中にあります」

なに？ 優良指定銘柄！

本当だ……。ある。十一銘柄だけが別格のグループを形成して、株式欄の最初に並んでいるではないか。

夫の会社も似たような商品を作っていると思っていたが、優良銘柄ではない。何を基準に決めるのだろうか。

はたして五月十八日、アメリカのお蔭で、日電は値上がりして一二二万円になる。難しくして、睡魔と戦いながらのレクチュアだったけれど、聞いていてよかった。アメリカ

私の財テク武者修行

カの財政事情が株価にこんなに反映するなんて……。さっそく買おう。

五年前に預けた、貸付信託の「ビッグ」が満期だ。あれを下ろして買おうと、信託銀行へ行く。

「何にお使いになりますか？」

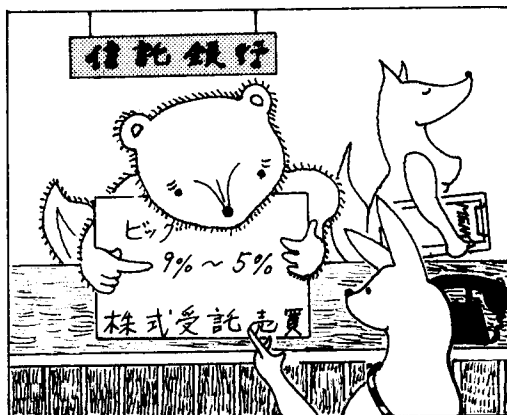
借金するわけではない。満期がきた私の貯金なのだ。ほっとしてほしい。

それより「ビッグ」には裏切られた気がする。五年前、金利がたしか九%以上だと宣伝して人気を集めた商品が、今は五%以下ではないか。理由ははっきりと言ったほうがあちらの身のため。

「証券会社への買い付けに対する支払いです。『ビッグ』はだんだん利率がすばまっで、ビッグとは言えない利率になってしまいましたから」

若くはないが、ほっそりしたきれいな女性の行員が引っ込む。代わって、奥から背の低い浅黒い小太りの、六十がらみの男性が出てくる。まるでキツネが化けてタヌキが出てきたようだ。

あ、あ、あ、古いな。預金引き止め説得係だな。



「証券会社というのは怖いところですよ。こちらでも株をやっている、とても親切にいたしますよ」

ええっ、信託銀行で株を扱う!? 新手指の引き止め策かな? いや、待てよ。そういえば、さっき見たのだが、壁に白い紙片がひらひらしていた。あれは今日の前場の終値(終値)だった。でもあの紙には何も説明がなかった。しかし、業務と全く関係のない紙が、張ってあるはずはないのだ。こういう

ことだったのだ。

「株を扱うって本当ですか？」

レストランのメニューにも似た、勿体ぶった株の一覧表が出てくる。「この中の株ならいつでも買えます」夫の会社の株はない。私にとっての基準はいつもこれ、夫の会社。

「どのように売買するんでしょうか？」

これはその信託銀行から、証券会社に依頼するそうだ。だから相談に乗るといっても証券マンが乗るわけではない。証券マンの資格があるかどうかを聞くと、その信託銀行では全員が受託売買の資格を持っているそうだ。

そうか、雰囲気的にも馴染みのある銀行で、こういうことをしてくれるなら、株もとっつきやすくなる。しかし株というのは情報が第一だ。間に証券会社以外の機関が入るなんて、それだけ、出遅れる気がする。まあいい。Cクンは私のレベルにあった説明ができるし……。信託銀行など、願いだ。

百万以上の金額を動かすのは疲れる。結婚十八年の我が家の家計レベルでは、百万

円以上の支出というのは不動産の売買以外なかった。いくらで買うという指値^(注)をするのだが、妥当だったかどうか、もう少し高くすれば買ったのではないか、チャンスを逃したのではないかなど気が疲れる。

指値で買ったときは感激的！何か知的な競争に勝ったような錯覚を持つ。これからそれが値上がりするかどうかが問題なのに、そんなことは忘れて。

夫の会社の電気機器株、日立、日電の転換社債と、電気ばかりで奇妙な揃い方だが、どれが一番有望なのやら。

新規上場の

転換社債のお勧め

「松下電器産業の転換社債を買いませんか。ハイテクで十分な値上がりが期待できますよ」Cクンの低く、もの憂げで、ちょっと詰まり気味な声とトーンを、私はすっかり覚えた。百万円以上するものを、そう簡単にまた買っていいかどうかの判断もさることながら、勧めてくるほうも、我が家をサラリーマン家庭と知りつつ、どういう考え

なのだろうか。

「これは明日上場されるものです。優良銘柄ですので、上場されれば額面百万円のものもすぐ一三〇万円になります。ですから一三二〜三円で指値がほしいのです」

転換社債は額面が、五十万、百万、五百万円などがあるので、価格を言うときには百万の万分の一の数字でいう。だから百万の額面のもは、一三二といえは、一三二万円のことだ。

夫の会社の株価の値上がりもあることだし、何となく楽観的な気分が私を支配している。しかし一三〇万円もの買い物をして



値下がりでもされたら……と心配だ。第一、松下がよいかどうかも分からない。

ちょっと前に、新聞で、証券会社の懇談会の広告を見たときに、電話番号をメモしてあったのを思い出す。明日上場ということでCクン急いでいるようだ。早く決めねばならない。相談相手がいないのは本当に困る。まあ、断わられてモトモトと思い、メモを取り出して新聞広告の証券会社に電話。

「お宅とは取り引きがない者で悪いんですが、実は、証券会社と取り引きを始めたばかりなのです。松下の転換社債で明日上場

の物を、一三二一三円ぐらいの指値で買うことを勧められているのですが、初めてのことです。分らないで困っています。お宅あたりの判断では、こういう勧め方はどう思いますか？」

声の感じでは四十歳ぐらいの男性証券マンの応対。

「一三〇円は高いと思いますよ。松下はたしかによい銘柄ですが、うちなどでは、初めてのお客さんには、相場すぐの勧めめなどというやり方はしていません。相場しつてすぐは値が飛びますから、値動きを見ていただいで、納得できる形になってから、お勧めしますね」

要するに銘柄としてはよいものだが、価格と、相場すぐの勧めめというところに問題があるのだ。それなら一二五円で指値をしてみよう。

結局、一三〇円以上の値がついて買えなかったとの電話。ほっとする。

だいぶ後になって分かったのだが、新規上場の転換社債に関しては、証券会社は額面（この場合は百万円）の物を発行企業から、市場に捌くために引き受けている。上

場と同時に市場に出さずに相場の価格で客に売り付け、相場して付いた価格と額面の差プラス手数料を儲けるといふ。この場合は一三〇万円の価格が付いたと仮定すると、額面が百万円だから、儲けは手数料プラス三十万ということだ。

情報の照らし合わせをする相談相手が、新聞広告の証券会社だけという、こんなことではおぼつかない。何とか同じ立場で話せる友達がほしい。

高まる銀行の

住宅ローン

「主人の会社の株を処分して、銀行の住宅ローンの返済にあてようと思っっています」とCクンにいう。

「今、どれぐらいの金利で借りていますか？」

「七・五%です」

「それは高いですよ。今、住宅ローンの金利は変動で四・九、固定で六・一%です」知らなかった。二年前に八・二から七・五%にさせて、よかった、よかったと思っ

いたのに。

「なぜご主人の会社から借りなかったのですか」

夫は一度交渉に行つて、条件があわなくて断わられれば、それ以上ねばるような人ではないのだ。うちと同じ条件で、会社から借りている人もあるというのに。

銀行の住宅ローンの金利には、固定と変動と二種類ある。

固定金利とはローン返済時に決められた金利がずっと続く。変動金利とは長期プライムレートの変動に伴い適用金利を変更する。

「金利は上がらない見込みだから、銀行の変動金利でも大丈夫、交渉したほうがいいですよ」とのCクンのアドバイス。夫にこのことを話すが、「君の好きなようにしていいよ。任せたい」と清貧居士ときたら、かくのごとき関心の低さ。

買い物の上で、私の地域の得意先回りをしてる銀行マンをつかまえる。

長身で、頭髮が薄くなりかけている。太ってはいないが、腹の回りに脂肪がついている体つきだ。前歯が欠けていて、どこか



貧相で、銀行マンという感じがしない。しかし、トータルとしては、なかなか抜け目のない顔付きをしている。この行員と渡り合うのは、なぜかきつくが通りそうになくいやな感じだが……。

「住宅ローンの話があります。一度うちに来て下さい」

「返済ですか」

「金利を下げてほしいのです」と言うと、露骨にいやな顔をする。

こういう男は、強い立場の人間には弱い、弱い立場の人間には強く出るような気がする。しかし約束の日時に彼は来る。居間に

通すが、ソファァーに座ってまず脚を組む。居間には夫と私の机が並んでいる。まずいことに私の机の上は株に関する本ばかり。しかし彼は気がつかない。

暑い日だが外勤の彼は長袖のワイシャツに背広、顔は汗でかてかしているが、出した麦茶をあまり飲まない。余裕しやくしやくの感じなのだ。私はホームグラウンドでの交渉というのに、ドキドキして一気に麦茶を干す。

すでに位負けしているなと思ってしまう。「六・一%の固定でどうでしょう」と銀行マン。

「いいえ、八・二から七・五にするときも、お宅はこちらから言うまで、してくれなかったので損失感が大きいんです。今度はどうしても、変動の四・九にして下さい」

「僕も内部でこの言い分を通すには、預貯金をしてもらわないと通しにくいんです。

お宅は役職でしょ？ 今度のボーナスで、百万でも二百万でも定期預金してくださいよ」

もし役職でなかったらどうするのだ。よくしゃべる男だ。聞けば三十六歳という。

そして私と同年ぐらいだという。一五%以上の誤差だ。検眼をしたほうがいいのではないか。いちいちむかつくが、こちらの要求を通すには我慢。

「このローンの返済表を見ますとね、『借り入れに当たって預貯金をお願いするということ』のようなことはありません」と書いてありますよ」

今までの返済表を見せる。

「そうなのですが、僕も内部でこの要求を通すには、やはりそれなりの説得力を持つものを、用意しなければなりませんねえ。六・一の固定なら、なんとかなるかも知れませんが、四・九の変動ではねえ。第一、金利が上がってきたとき大変ですよ。一度変動にすると、もう固定には直せませんからねえ」

「まあ、月一万、ボーナス時十万くらいの積み立てなら、してもいいですよ。しかし、変動の四・九にならないのであれば、給与振り込みと公共料金の引き落としの条件で、他で喜んでやってくれる所がありますから、そちらに移します。長いお付き合いですので、残念な気もしますが」

銀行員は表面は物腰柔らかくても、一歩踏み込むとこの横柄さだ。

Cクンに電話して固定の六・一は高いかという、高いし金利はずっと低いままが続くという。これはどうしても変動で四・九にせねばならない。

我が家は地域一の

金利オンチ?

銀行の回答は週末ということになっていた。呑気に私は回答待ちの日を過ごしていたが、あるときパッと閃いた。週末にはボーナスが出る。そうだ、彼はこのボーナスを狙っているのだ! 銀行振り込みだからこれをキャッチするのは簡単だ。そうか、こちら手も打たねばならない。しかしその前に、もし、この銀行との交渉が、こちらの思い通りにいかなかった場合を考えなければならぬ。そこで「ビッグ」が預けてあるD信託銀行に、住宅ローンの肩替わりの交渉に行く。「ビッグ」は二回に分けて預けた。最初に預けた分は転換社債の買

い付けに使ったが、後の満期が来ないの

で、預金として残っている。この信託銀行ではローンの調査を通れば、四・九%の変動で簡単に貸し出しできるという。

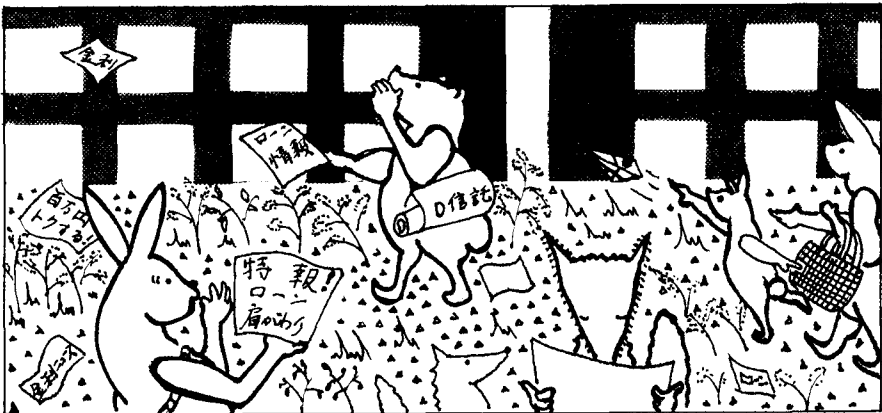
こちらの状態を言うと貸し出しの対象としては、パスしそうだ。肩替わりした場合の返済表を、コンピュータですぐ作製してくれる。

その表によると、銀行への返済総額は百万円以上少なくてすむ。しかし、抵当権設定とか、収入印紙代とか、保険料などで、十七万円の諸費用がかかる。何とかして今の銀行に変えさせねばならない。信託銀行は熱心で何度か電話が入る。

「七・五%ねえ。今、お宅の団地で、こんなに高い金利で借りているひとは沢山いるんじゃないか」などと、人を馬鹿にしたようなことを言う。

それからしばらくして、D信託銀行の、「ローン肩がわりのお知らせ」のちらしが、この団地一帯に撒かれた。そのちらしには、こんなことが書かれていた。

「高い金利で住宅ローンを借りている方はいませんか。今、ローンの乗り換えをお勧めします。七・五%で借りている場合に、



当行のローンの四・九％に乗り換えると、

〇〇〇〇〇円、年間でちがいます……」

我が家はこの団地で一番の金利オンチという感じだ。みっともないっつららない。

銀行の支店長と

掛け合っ

住宅ローンを借りている銀行で、長女の進学積み立て預金をしている。これは長女が高校に入学するときの準備にと始めたものだ。

私は利殖に当たって預貯金の整理をしたのだが、そのときに長女の通帳を見るとトータルが三十万円ほど多くなっている。これは誤算に違いない。Ｃクンに聞くと、電卓で計算してみても、やはりこの計算はおかしいという。

これだ！ お金のことになると、私の頭は閃くようになってしまった。いても立ってもいられなくなる。外回りの銀行マンを相手にしてはだめだ。支店長に会って一発で決めよう。外回りの彼の力で四・九にできないのなら、頼むものか。私の力で四

・九にしよう。しかし相手は仮にも支店長だ。しっかりこちら準備をしよう。

私は言い分を書き出してみた。言い落としてはならない箇所には、赤線を引いて、言う練習をしてみた。忙しい相手だ。もたもたしてはだめだ。筋が通ってすぐさま相手に、なるほど、と思わせなければならぬ。「それでは、別の銀行で取り引きされてはどうですか」などということになっては大変だ。

どきどきしながら銀行に行く。

正午ちょっと前の銀行はすいていた。正面の入り口を外して、横の小さい入り口から入ったのだが、足を踏み入れた途端、全くタイミングが悪く、例の外回りの銀行マンと鉢合せになる。外勤の行員の持つ黒い大きな鞆を重そうにして、得意先回りに出るところのようだ。

「何かご用ですか？」

「支店長に用があります」

ツキの悪さを払うように言う。本当に最悪の男に出会ってしまった。笑顔を作ろうと思うのだが、顔がこわばって笑顔にならない。でも、彼に笑顔を見せる必要はない

！支店長が出てきたらにっこりしよう。

それまで笑顔はしまっておこう。落ち着いて、落ち着いて。「どういう用ですか」取り入るようなねちっこい声で、再び彼が同じ質問をする。不安な顔付きだ。

「支店長に用があるのです」視線を合わせないで、さらに強く言う。

彼は慌てて、応接間に私を通し、支店長を呼びに、走るように出て行ってしまった。何だか寒々とした応接室だ。心に少し余裕が出てきたときに分かったのだが、この寒々しさは絨緞が敷いてないからだ。

支店長が出てくるが、あの男もびったりとくっついてはなれない。私は何かにつけ、この男のすることが気に障る。支店長は五十歳前くらいの紳士的な男だ。小柄で美直そうな、静かな雰囲気の人で、私は好意が持てた。こういうタイプの人物なら話し合えそうだ。ぐっとこちらに分がよくなった感じを得て、私は自信をつけた。余裕が出たので、頬の筋肉も緩む。

支店長はソファにゆったりと掛け、名刺をふところから差し出した。次に断わってタバコを取り出す。隣に座った、例の外

私の財テク武者修行

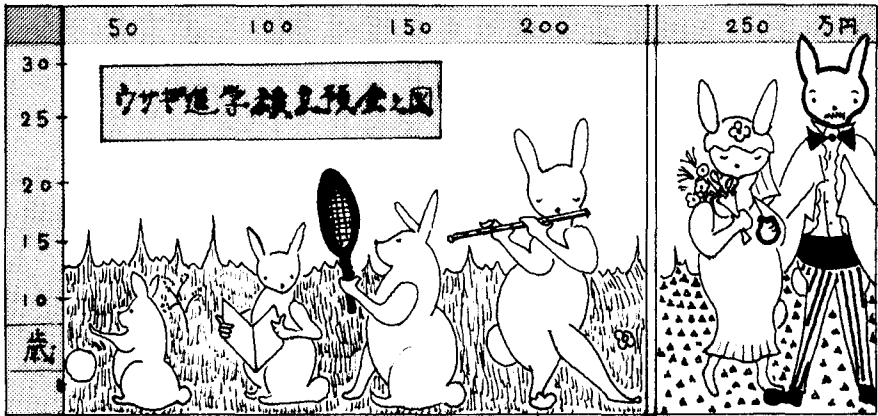
勤がさっとライターを差し出す。

私は原稿の通りをしっかりと言う。

「うちは貴行とは十年以上の取り引きがあります。今、住宅ローンを借りていますが、滞りなく返済しています。少しまとまったお金ができたときに、返済したいと言ったこともありますがその都度、電算機操作が厄介だからという理由で、断われ続けられました。

この度七・五％の金利が高いので、四・九％の変動金利に下げしてほしいことを外回りの方にお願ひしました。もしできなければ全額返済をするか、銀行を変更するといいましたが、六・一％の固定金利で借りてほしいと言われ、預貯金まで要求されました。

貴行では普通預金からの引き落としで、これまで何度も積み立てをしてきましたが、積み立て期間が終わっても、次の積み立てを勧めてくれたことは一度もありません。子供の教育費の場合、積み立て終了と同時に、新たな積み立てを次に向けてせねばなりません。こちらも学年末は他のことで頭が一杯なので、ついつい忘れてしまってい



ます。外勤がこういふときこそ、来てくれたらどんなにか助かることだろうと思ひます。

銀行はどこに行っても、金利も扱い業務も似たようなものです。もし客を獲得しようというのであれば、それなりの努力が必要だと思ひます。サービスとは、ティッシュペーパーやラップフィルムを配ることではないと思ひます。客が何を望んでいるかを察知して、その要求にもっとも添うような業務を紹介するのが本当のサービスではないでしょうか。

この度、貴行での長女の積み立て貯金の通帳を見ると、業務上のミスで、トータル金額が三十万円ほど高く記されています。もし生活設計をこの記帳の額に合わせて立てて、支障が生じたらどのような責任を取るつもりでしょうか？」

ここまで支店長はタバコをくゆらせながら、ふんふんと聞いていたが、ここでタバコをもみ消す。意外な展開に目を見はっている外回りの行員に、帳簿のような物を持って来させて、まくって見ている。

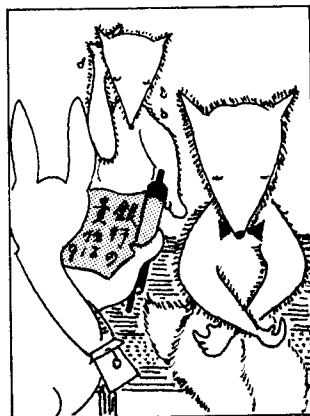
雰囲気から、うまくいっているなと思う。

あと少しだ、頑張ろうと元気が出てくる。これからは、要求を述べなければならぬ最重要ポイントだ。

「私は貴行との住宅ローンの取り引きの継続を望んでおり、変動金利で四・九％でお願いたいです。しかしこれに絡んでの新たな預貯金は、先のミスを考えてと貯蓄意欲がわいてきません。もし今後、貴行での新たな預貯金をとおっしゃるのであれば、まず貴行のほうから誠意を示し、この金利を変動の四・九％にして、信頼を回復してからにすべきではないでしょうか。また、途中で返済の都合のついたものについては、電算機の操作費用を取るなりして、気持ちよく、応じるべきではないでしょうか」

私は落ち着いて言ったつもりだが、のどがからからだった。
とどこどこで清貧で金利オンチの夫を持ち出す。

「主人もこの金利に関しては、お宅の誠意がないといっています」、「主人も銀行でこんなミスがあるなんて、と、とても驚いていました」などと、脚色もやっていた。ハリコのトラにも、一吠えしてもらわ



ねばならない。

これは事前にCクンに、正当な主張と思うかどうかを質してみたのだが、大丈夫だという確認を取っている。

驚いたようで、支店長は返事を二三日以内にすると答えた。

結局この主張が全面的に通じ、新たな預貯金なしで金利は変動四・九％になった。途中の返済は手数料を取ってOKであるとの由だ。

初めの証券会社のイメージと銀行のイメージを思い起こすと、今、新人類Cクンによってイメージは逆転したかに見える。経済の分かる人っていいなあ！ 私の中で、一挙にCクンの評価は上がる。

営業とはパーソナリティなんだ！

〈注〉

前場（せんば） 証券取引所では午前は九時から十一時まで相場が立ち、これを前場という。午後は一時から三時までで、これを後場（ごば）という。

終値（おわりね） 後場の最後に付けられた価格。

指値（さしね） 株式や転換社債を購入、

売却する場合、購入の場合はいくら以下、売却の場合はいくら以上で取り引きを成立させたいという、値段の指定をすること。

これに対して「成行き注文」というのがあり、これは値段を指定せず、できるだけ早く取り引きを成立させたいときに行なう。額面（がくめん） 有価証券の券面に記載されている金額。

長期プライムレート 銀行が一流企業に貸し出す最優遇金利のことで、長期金利の重要な指標となっている。

（え・おおのまもる）

読・ん・で・み・ま・し・た

月刊

自然と人間を結ぶ

農山漁村文化協会発行

東京都八王子市 和田 好子

近ごろのごく若い人は、自然がきらい

だそう。なぜなら、木の生えているところには虫がいる。草の中にはヘビがいる。土の中からミミズが出てくる。水のそばに寄ればカエルがとびつく。どれもコワイ。キタない。

人工の、無機物に囲まれた、それゆえに全く清潔な環境……の中でしか、生きられなくなった人間たち。

実験動物のような人間ばかりの世界がせまっている。

彼らは動物を人工的に大量生産し、肉を飽食し、それゆえ病気になるれば臓器を移植して取り替え、人間という種も改良し、神になったつもりになるのではなからうか。

こうしたことが人類の運命をどの方向に導くかは、なかなか難しい哲学的問題だけれども、一方、人間は自然に触れることによって、自然が好きになるものもあるのである。

私事をいえば、私は幼少のころ港区芝という、昭和のはじめにもう土が一寸もなかった土地で育った。トイレットはすでに水洗であった。蚊さえいなかった。小学校の運動場もコンクリートで、高学年は屋上で遊ばされた。

大人たちは、「子供ってものは、ときどき土を踏まないで、丈夫に育たないぞうだ」といい、われわれは日比谷公園へ遊びに行かされたのである。

そのころ、私は今の若い人そっくりに、

自然がキライであった。ミミズがこわく、郊外の知人宅へ行って、汲み取りのトイレに入らなくて困ったりした。

それがだんだん変わってきたのは、忘れもしないが小学校の理科で、自然観察を大いにやらされたこと、女学校もそうしたこと熱心な学校であったこと、それから東京中が焼野原となった戦争体験である。焼野原にひばりは上がり、隅田川で白魚が取れた。短期間だが疎開もした、家庭菜園、買い出しで命をつないだ。

今では私は自然が好きである。虫もへびも怖くないし、人間は自然の一部であるということが実感として分かる。

今こそ、子供たちを自然に触れさせ、人工の世界か自然との共存か、人間の未来を選ぶ資格をつけさせなくてはならない。月刊誌「自然と人間を結ぶ」は、す



でにいささか自然離れを起こしている人たちが、子供に自然を教えるためのテキストとして編集されている。

五月号の特集は「子どもたちにとって

日の丸は紅い涙に

第七三二部隊員告白記

越 定男著(元関東東軍第七三二部隊第三部本部付運輸班員)

動物とは何か」である。

父母、先生方必読の雑誌。

(定価二五〇円・送料五〇円)

直販・申込先〇三三五八五一二四一

千葉県松戸市 松戸しほみ

あの悪名高い七三二石井部隊の元隊員である(石井隊長付きの運転手兼実験用人間マルタの運搬に従事)越さんの書いた告白記です。

越さんは一九一八年生まれというからもう七十歳で、壮年とは言えません。元隊員も次々と亡くなっていく中、沈黙を

守って生きてきたが、平和のためにこれではいけない、死ぬ前にこの体験を後世の人に伝えたい、という強い決意をされて書かれたそう。

確かに読む人の胸を打つ。それは真実そのままに淡々と書かれてあるからだ。でも、よくまあこうした体験をされて、神経をやられないで、それも意外と職務に忠実にできたものだ。男だからか? 意志の強さを感じる。センチメンタルな要素などみじんもない。それほどこの七三二部隊が過酷な現場であったという証拠にもなる。

人間一人ひとりを一本二本と数える。まるで丸太のようにではないか? そして

犬か猫のようにオリに入れて、動物実験さながら苦しむ様を外から冷静に観察して、写真をとったり記録に書いたりしている。相手と同じ人間として見ていたらとうていできないことだ。中国人等を相当蔑視していた当時の日本人にしてみたら、もう一段その感覚を押し進めれば犬猫に見られたということか?

女のマルタはめずらしく数人ぐらいいかないなくて、それも若くて美しいロシア人の娘達とのこと。始めは女の仕事をさせ(針仕事とかのたぐい)、そして最後は結局実験に使って(その前に適当に弄んで)、おまけに興味本位の余計な実験までして、局部は切り取りホルマリンづけにするそうである。マルタは思想犯が多かったのか、皆インテリの顔をしていただとか。当局の好まぬ本を一冊出したのみでしょっぱかれた者もいたとか。

いろいろな実験。零下五十度ぐらいの所で裸にしていつから凍傷にかかるかとか、ペストノミにかませて、どのように発病していくかを調べたり、水漬けにしていつ死ぬか、乾燥機で体中の水分を無



くしたらいつ死ぬとか、いろいろな言語に絶することを日常的にやっていたらしい。外部に秘密のもれるのを極端に恐れていたもので、一切のことは職員の妻達にさえわからなかったらしい。終戦間近にはすべてのマルチは焼き殺され、証拠品は処分され、サツと立ち去ったので、結局今まで外部には全然わからなかったというわけだ。

戦後いち早く、石井隊長は自分の命と引き替えに、アメリカにこの部隊の貴重な研究結果を渡したので、この部隊のことは衆目にふれることなく、著者も裁かれることなく、今に到ったというわけだ。

しかしまあものすごい体験である。まさかこれからこんなことが起こるとは思われないけれど、戦争は人間性を狂わしてしまふから、どうなるか予測はつかない。そして今非常に戦前に似た状況があり、越さんも黙っていられずに書いたとのこと。肩の荷をおろした思いだったでしょう。そして勇気をありがとう。

日本人はドイツ人と同じくらいひどい

ことをしている。南京とか七三一部隊とか。何か体質的に陰湿ですネ。でもネ、

「考えられないこと、今のこの時代から

東京に原発を！

広瀬 隆著

数日前、この本を書店で見かけた。「一体どういう主旨の本なのか」と少し気味悪かった。そして、この本を手にとりも

せず遠ざかった。しかし、気になった。

昨日、この本の主旨を知った。が、思った。「スパイスがききすぎるよ、このタイトル」

今日、読んだ。ノンフィクション作家の原発安全派への憤りと皮肉がこめられたタイトルだと感心した。

かつてのベスト・セラー『復活の日』に似て非なるところはどこか。この本に書かれたことはSFではなく現実であるということ。そして、我々がなすべきことを明示しているということ。

さて「東京」以外にお住まいの方は、

は想像できないこと」とだけ言っていたら、れるでしょうか？

教育史料出版会 二二〇〇円

東京都分寺市 たまき久美

あなたの県に置きかえてタイトルを讀んでみて下さい。

東京圏在住者のあなた「ご近所に原発を」と提言されて「それも悪くない」と考えますか。「とんでもない」と首を振りますか。

原発安全派、原発反対派、「私、よくわからないワ」派。

どのあなたも読んでみて下さい。

集英社文庫 四四〇円



私の『ボランテイア介護』日誌・パートII

東京都江東区 田口けい子

昨年末、介護者を募るために私が「ボランテイア介護日記」という文章を書いてから、四か月が過ぎてしまいました。「わいふ」の読者のみなさんの中に、重度障害者である高木さんを援助可能な方が一人でもいらっしやったら、高木さんの生活はいくらかでも安定する……、そう思ったのがペンをとったきっかけでした。

二人の方が、連絡をくださったり、三〜四回ほど介護にいらっしやいました。でも、四月二十日現在、高木さんの介護者は昨年末のままです。

やめていかれたお二人の理由はそれぞれに違います。私も、そして高木さんも今回の「わいふ」への投稿と、それをめぐる新しい関係の誕生と終わり、という一連の事

件をめぐるって、いろいろな問題にぶつかり、悩み、今もなお悩み続けています。そして今、私が感じているのは、単に障害者への援助という問題ではなく、人と人との「関わり」とは何か……、ということであり、もう一度自分自身の気持ちを整理する意味もこめて、再びペンをとりました。

一九八七年、最後の号の「わいふ」に文が載るとすぐ、Aさんから「高木さんを援助したい」というお電話をいただきました。

Aさんの自宅は高木さんの家にも比較的近く、ボランテイアの経験もある、ということだったので本当にうれしく思っていました。Aさんは高木さんのところへは三〜四回ほど通ってくださいました。Aさんより

少し遅れて、Bさんという方からも、高木さんのところに葉書が来て介護してくれることになり、高木さんもとても喜んでいたのでです。

そんなある日、私は「わいふ」の編集部からお電話をいただきました。なんでも、Aさんから直接、編集部へ電話があり、高木さんの介護体制がよくない、行っても何をしてもあげていいのかわからないし、ボランテイア同士の横のつながりが全くないので、どうも不安だ、ということを言われたそうなのです。

私はこのことを高木さんに話しました。高木さんは、「最近Aさんが来ないので、どうしたのだろうと思っていた。そういうことなら私が自分で連絡をとってみる」と

言い、さっそくAさんに電話をかけたのだ
そうです。

でも、どうしたわけか、その後Aさんは
高木さんの電話には一切出ず、たまたまA
さんが電話をとったときには何も言わずに
電話を切ってしまうのだそうです。

また、Bさんも「介護というのは、こん
なものではないかと思っていた。仕事も始め
たしもう来れない、たまに手紙を交換した
りする程度のおつきあいを……」と言って、
来られなくなりました。

高木さん自身も、二人同時期にやめてい
かれたことに関して、ずいぶん悩んだよ
うでした。また、前号に掲載された「細野
さん」の意見に対しても、傷つき、どう答
えるべきか悩んだようでした。私たちは相
談し、今回は高木さんの生の声をできるだ
け伝え、また「わいふ」の読者の方からの
疑問や意見になるべく答えるようにしよう、
そして改めて、介護者を募ろう、と決め
たのでした。

三月のある土曜日、私は高木さんの家に
インタビューアとして訪れました。これは
その記録です。発言しているのは高木さん

の他に、高木さんを高校一年のときから三
年間介護している、臼井さんという十八歳
の女性です。

●今日は私はインタビューに徹します。か
なりしんどいことも聞くと思うけど覚悟し
て下さいね。まず、前回の「わいふ」に載
った、細野さんの意見に「一生障害者のめ
んどろろを見ることなどできない」というの
があったのだけど、これに関してどう思い
ます？

高木 人の一生なんて、誰にも背負うこと
なんかできないし、そんなことも望んでい
ない……。私のところに来たら、なぜ一生
のめんどうまで見なければ……。というふう
に、健常者の人は思うのだろう。

学生介護者は試験のときには休むし、
子供ができてやめていった人もいる。仕事
の都合で来れなくなった介護者もいる。み
んなそれぞれ都合があってあたりまえ。お
互いの都合の接点をみいだしながら生きて
いきたい、と私は思ってるんです。誰かに
一生めんどう見てもらおうなんて思ってい
ない……。

●そうは言っても、介護者がいないと困る
わけでしょう？ 結局最後は泣きつかれて、
がんじがらめにされるんじゃないか、って
みんな恐れているんじゃないかしら。

高木 ……。(しばらく考えこんでいる)。
私だって、こんな生活はもうやめようと思
うときがある。とくに介護者がいなくて、
毎日カロリーメイトの食事なんかする日が
続くと、そう思う。でも、あの施設の、暗
い、管理と保護の生活はもう絶対嫌だ……。
だから、自分で選んだ道なんだから、もし
たとえどんなに介護者がいなくても、自分
で選んだ道なんだから、がんばるしかない
な、がんばるしかないなって思っている。

●去る者は追わず、ってこと？
高木 ……。ただ、突然来なくなる、とい
う人には腹がたつ。せめて二週間前に言っ
てくれれば……。と思う。きっと、来なくな
る人は気が重くていいだせないのだからうけ
ど……。それから、やめていくときは、な
ぜやめるのか教えてほしい。まずいところ
は直すようにしなければ……。私には生き
ていくために介護者が必要。だから、自分
をきちんとみつめていかなきゃならない。

同情はいい、いらぬ、はっきりと言ってほしい。私はそれを受けとめる心がまえがある、受けとめなきゃと思ってる。そうだなきゃ、障害者なんてやってられないよ。

●それから、もっと公共のサービスや、区のヘルパーさんを利用したら、ということとを細野さんが言われていたのだけれど、現状はどうなのかしら。

高木 利用できるサービスはすべて利用している。でも、世田谷区は介護料を多く支給しているけど、ヘルパーさんの派遣は週二回が限度。そのほかにどうしても具合が悪くなったり、特別の理由がある場合だけ、月に二回に限り特別介護が受けられる。地方自治の福祉制度は、申し込んで、受理されるまでに、気の遠くなるような複雑な手続きが必要で、私の一年のほとんどが、そのために費やされているような気がする。健康者でもたいへんな手続きを重度の障害者に課す、というのはどういうことなんだろうと思う。

●Aさんも、Bさんも、介護者同士のつながりがない、と言っていますよね。細野さんの投稿にもその指摘があった。そのこと

に関してどう思っています。

臼井 あの、私、介護者の立場から言わせてもらうんですが、私もやって、自分のしてることはこれでいいのかな、なんてよく不安になったんです。だから、他の介護者の人とも時間があれば会いたいと思ってました。でも、みんなすごく忙しい時間をやりくりしてここに來てるんです。本当にすごいんです。みんなが集まるなんて不能だと思えます。

それに、このごろは、高木さんは、頭が不自由な障害者ではないのだから、高木さんとまず一番にコミュニケーションとればいいんじゃないかな、って思うんですよ。高木さんとの関係ができていくと、高木さんと話しあうことによってほとんどの問題は解決できちゃうんです。人がどうやっていようと、私は手をぬくし(笑い)、私のやりかたでやっていけばいいんだ、って思うようになったんです。田口さんと私では高木さんの対応はきつと違うと思うし、それでいいんだって。だってみんなと同じつきあいしてもつまらないよ。

●私はね、高木さんのところに来るまで、



障害者はいつも謙虚で明るく、つつましくあるべき、と思ってきました、そしてけなげに生きるもの……とね(笑い)。

高木 そう思う思いこみはすごく多い。自分の都合のいい障害者になってほしい、と思ってる健康者がいる。介護に対しても勝手なイメージを抱いている。私が必要なのは日常介護、ふつうの生活のための介護だから、介護者は自分が小間使いになったような錯覚を持ってしまいうらしい。でも、掃除や食事のしたくや洗濯は、介護じゃないと思うのだろうか。私にはそれが必要

なのにな……。

千葉にいたころは、私の介護者は主婦ばかりで、家事を中心に介護してもらってた。東京の人は家事をやらせられると馬鹿にされてると思うのだろうか……。

臼井 さん、高木さんのままで何だけど、雑用を細々と言われると、やっぱりムカっとくるときはあったな。やってあげた……って気分であるから、お礼を言われないと腹がたったりしてね。でも、ここに来るのって義務でもなければ、仕事でもないんだよね。自分が好きで来てるわけでしょ、そ

う思うと、なんで来てるんだかわかんなくなっちゃって、あれこれ考えてるうちにまた来ちゃうんだよね（笑い）。

●介護者が連帯することで、何か高木さんにメリットはあるのかしら？

高木 わからない。でも、私は介護者同士が仲よくなることで、自分が疎外されていた、という経験があるから……。健常者同士なら文字盤を使わなくても会話できるから……。

誰でも障害者とききあうことは、最初は重荷でしんどいと思う。何か背おわされた

気分になるのだと思う。それは、私にもわかる、よくわかる。でも……みんな介護して分担すれば軽くなるのかな……。私は、

まず私とききあってほしい。障害者、高木美鈴と……。そのうえで、この人とはだめだ、って思うかもしれないし、私だって、これはあかんって思うかもしれないし……。

●最後に、高木さんが一言言いたいことをどうぞ。

高木 私は高木美鈴です。私は言葉がうまくしゃべれませんが、重度の障害で体が不自由です。世田谷で一人で住んでいます。私には生きていくために手助けが必要です。月に一日でいいです。みなさんの力を貸してください。介護ノートを作ったので、他の介護者の様子もわかります。介護の内容は主に家事と、外出です。日常のことです。みなさんの都合とかねあわせながら、なんでも相談して決めていきたいと思っています。

どうかご連絡ください。おねがいします。

高木美鈴

TEL 〇三三三三三〇八二八

(え・カステラネコ)





日曜日 赤信号

茨城県取手市
綿貫 厚子

キケンサケる。キケンサケる。漢字書き取りによく出る語句ですが、まさに危険はやり過ぐすことも可能なしるもの。予防策をたてておいたり、とっさの場合にも冷静に対処したりして。などと頭じゃわかっているのに、たびたび大当たりしてしまう、賢母失格の私。恥ずかしながら体験を披露しますと…。

●家庭のなかの危険●

ウチの子は男児二歳。やんちゃな気質も手伝ってか、ことから危険が彼のまわりを渦巻いているよう。ちよつと思ひ出しただけでも、テーブルの上のコーヒーに手が届き、ひっくりかえして胸にヤケド。ふいにユデタマゴに指をつっこみ、まだ熱い黄味に触れて火ぶくれ。セブイレブンのつるつるの床ですべて口を噛み、タラコクチビルになる。ブランコから落ちて歯の神経を切る。はしやぎすぎであおむけに倒れ、引き戸のレールに頭をうちつけ三針の裂傷、などがあります。

不思議なのが、これらが皆日曜日に起きたこと。思うに、週日には張りつめている私の神経も、日曜日には、子供を見る（ギムを有する）人、つまり夫がいるので、よれよれにゆるんでしまうためのようです。

普段は、流しにむかっついていて

も、四六時中振り返る癖がついていますが、日曜日はどうも体が動かない。が、夫は朝早く、夜遅く、週日は子供の寝顔しか見れぬヒト、「ぼうや見ててね」「あいよ」二つ返事してくれても、子供のこわさについての認識が不足しているので、おとなしそうだなどつい新聞に手が伸び、たちまち夢中になり……その隙をめぐけて危険がダッシュしてくるようです。そして、私と夫は互いに大声で責任をなすりつけあいながら、もつと大声で泣く子供を小脇にかかえ、救急病院にかけこむ……。

最近私達もいがかげん反省して、「魔の日曜日」と称して、朝からいさめ合っており、騒ぎも減ってきたみたいで、私達が親業に習熟してきたのか、子供に知恵がついたのか、でもただの「日曜日」に戻すにはまだまだ……危険!!

ガラスの コップ

東京都武蔵野市
田岡あかね

ウチの息子は私に似て歯が良

い。
一歳半のとき、夕方暑かったので、ジュースを飲もうとした。ガラスのコップについて、まず子供へ。次に私のコップについているとき、「ガリッ」と音がした。

「やだ、氷かじっちゃったのかしら」

振り向いた私の目の前に、こわれたコップがあった。床にこぼれたジュースの中から、あわててガラスのかげらを集めて、組み合わせると、口のところが足りない。子供がのぞき込みながら、「ジャリジャリ」と変な音をたてている。

あわてて口をあけさせる。

「えっ？ガラス、食べちゃったの？」

うがいをさせたが、あとのま



つり、すぐにかかりつけの小児科に電話した。

いつもは落ち着いている先生

が「救急車よ、早く！」と指示する。ガラスが胃を傷つけたら大変なのだそうだ。

戸締りをしているうちに救急車が着いた。

近所の人達も驚いて出てくる。

ところが、初めて乗る救急車、赤信号でもビュンビュン走り、

まわりの車はおもしろいように左右に道を譲ってくれる。子供

は病院に着くまではしゃぎ通し

だった。

病院の受け付けでは、「今日は帰れるかどうかわかりません」などと驚かされたものの、

レントゲンでもわからず、家に帰って様子をみることになった。

結局二十四時間たっても異常なし。どうやらトイレで出して

しまったようだ。

というわけで、その後当然、我が家ではガラスのコップは使

われなかった。

それでも、アジの塩焼きを背

骨ごとかじってしまったり、プラスチックのスプーンを歯型に

抜いてしまうなどの武勇伝は続き、お陰様で三歳のときには、

歯のコンクールで優勝して、ごほうびをいただいたのだ。

隣家のO夫人は、フルタイムで働いているから、休日は押せ

が、彼女、目覚めた気分です、二か月に一度ぐらいは片付け魔

になるのだった。

まず物置の中を整理しなおし、家具の大移動も絨緞の取り替え

も全部、一人でうんうん言ってやる。息子も娘も身の回りの物

を持ってどこかに避難する。変なものを踏まないよう専用の室内靴を履き、スカーフでしか

と髪をまとめ、昼食も忘れての奮闘である。

日の暮れかかるころには、洗濯機を回し、掃除機をひっぱり

歩き、終わるのだが、ある日、

デパートからの預り物を届けに訪れたときも、ちょうどそんな

大騒ぎのまっ最中であつた。

玄関は開けっ放しで、ちょっと呼んだぐらいでは聞こえない。

思いつき怒鳴ると、

「ハイ、ハイ」と返事とともに姿を現わしたOさんは、小走り

りに来かかって、もんどり打って廊下に叩きつけられた。それ

っきり、うんとも言わず長々と寝ている。

風に吹かれてきたビニール袋に乗ったのだ。

倒れたはずみで、スカーフが顔にかかり、縁起でもない有様

になっていた。

「Oさん。何か言ってるよ。ねえ

救急車呼ぶ？」

ビニール袋の仕返し

東京都武蔵野市

入間田礼子

隣家のO夫人は、フルタイム

で働いているから、休日は押せ

が、彼女、目覚めた気分です、二か月に一度ぐらいは片付け魔

になるのだった。

まず物置の中を整理しなおし、家具の大移動も絨緞の取り替え

も全部、一人でうんうん言ってやる。息子も娘も身の回りの物

を持ってどこかに避難する。変なものを踏まないよう専用の室

内靴を履き、スカーフでしか

と髪をまとめ、昼食も忘れての奮闘である。

日の暮れかかるころには、洗濯機を回し、掃除機をひっぱり

歩き、終わるのだが、ある日、

デパートからの預り物を届けに訪れたときも、ちょうどそんな

大騒ぎのまっ最中であつた。

玄関は開けっ放しで、ちょっと呼んだぐらいでは聞こえない。

思いつき怒鳴ると、

恐る恐るスカーフを除けると、うっすらと目を開けた。目頭で痛いと言っているが、身を起さなければ、その背中をさすることもできない。救急車はいらないと言うOさんのそばで、ただしゃがんでいるばかり。

ようやく帰ってきた息子さんと二人がかりで布団へ移し、結局大事には至らなかったが、日ごろ粗末にしていたビニール袋に仕返しをされたようで、以後、道端に舞うビニールも拾うようになったが、あのとき、はずみで柱や箆箆に頭でもぶつけていたら、とゾツとしてくる。

寝床が 火事だ！

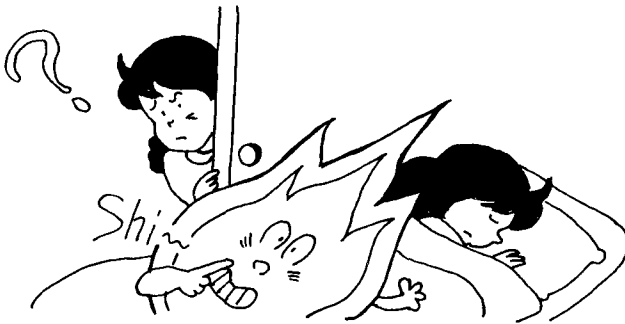
大阪府豊中市
赤松ますみ

七年前の十二月のこと、夫と子供達があぐらしく揃って、夜十時に床につきました。後片づ

けを済ませ、一時間遅れで二階へ上がってみると、どうも子供部屋がキナ臭い。ふすまを開けて様子をつかがってみても、寝息が聞こえるだけなのに、なぜか気になり寝つけません。

五分後、やっぱり変だ、と、当時小一だった娘の掛け布団をめぐってみて仰天しました。寝ている胸元近く、敷布団が直径十センチほど、真っ赤に燃えているのです。見る間に白煙がたちこめて、たたき起こしているうちにも息苦しくてたまらなくなり、あわてて二人を部屋の外までひっぱり出しました。

夢中で布団を次々とベランダへ放り出し、下からバケツで水を汲み、必死で消火し、やっと消えました。と、思いきや、三十分ほどすると、ビショビショになったその奥から、スーと一筋の煙のぼり始めたので、またもや水をかけるのに必死です。



本当に、うっかり安心できません。あくる朝、わかったことですが、なんと、娘が布団の中へ電気スタンドをひきこみ、中で姉

弟でリカちゃん人形遊びをしていたのが、寝入った後、引火したらしいのです。リカちゃんは無残なことに片脚丸こげ。娘は左手中指に直径二センチもの水ぶくれを作っていて、それでもなかなか起きなかったのですからあきれたものです。

パジャマが黒くこげ、薄明かりの中で、髪が茶色く焼けてしまったか、と思った息子は何事もなくやれやれ。いざというときに頼りになるはずの夫は、事の大事さになかなか気がつかなかったのでしょうか、頼んでも起き出してくれず、一番肝腎なときに役にたつてもくれませんでした。畳まで火が通らなかつたのは、さいわいでしたけれど。でもあのとき、私も他の三人と一緒に寝入ってしまったら、と思うと、ぞっとします。

(え・小宅昌枝)

月刊

ゆたかなくらし

定価 500円(送料50円)
年間購読料 6,000円(送料600円)
御購読は直接当会へ御申込み下さい。
郵便振替・東京 9-162684

国民的課題としての老後をともに考える

すいせんします

原田 正二	驚谷 善教
木下 恵介	中島 紀恵子
山田 洋次	浦辺 史
早乙女 勝元	真田 是
前田 甲子郎	長 宏
寿岳 章子	小川 政亮

〈特集〉

7月号●老人ホームの寮母さん

8月号●非核と平和への願い

9月号●高齢者の尊厳を問う

10月号●介護保険

— 好評連載 —

目を大切に ●————— 勝目紀久子
 居ごこち・住みごこち ●——— 望月彬也
 人生の呷 ●————— 熊谷茂
 創作民話 ●————— 冬敏之

編集・発行 全国老人福祉問題研究会 〒177 東京都練馬区南大泉4-16-37

●季刊雑誌のご紹介●

年4回発行/A5判/128頁/定価880円

(13号)特集●「感染症」―うつる病気は怖いかな？
 石川憲彦/海老原治善/竹内直一/三橋敦子/毛利子来/山田真 他編集委員 向井承子/小坂富美子/畦地豊彦/保坂展人/長戸かおる/小松茂 他

子どもと健康

●子どもの側に立った健康教育とは

(35号)特集●進路と女子教育
 奥山えみ子/星野安三郎/永畑道子/山住正己/藤井治枝 各編集委員 日下部禧代子/宮淑子/五味百合子/増田れい子/斎藤次郎/堤愛子/俵協子 他

女子教育もんだい

●女性の自由・平等・連帯のために



日本の食べもの

よもやま話

矢島せい子著

B6判 ■上製264頁 ■定価三〇〇円

時代の変遷とともに失われつつある日本の「食の文化」を、沢村貞子の姉である浅草育ちの著者が語り伝える。〈付録〉矢島せい子先生を偲ぶ言葉：大田堯/奥山えみ子/沢村貞子/津川雅彦/沼田稻次郎 他

『くらしの歳時記』に続く待望の第二弾！

バックナンバーの 労働教育センターへ TEL 03(253)3362(代) 〒101 千代田区神田駿河台3-2-11
 問い合わせ・注文は



里芋を煮る

埼玉県上尾市

服部 親子(27歳)

父は私が二十二歳のとき、七十四歳という高齢で亡くなりました。

高熱を出して救急車で病院に運ばれ、ICUに入院したものの直に元気になり、看護してた母に先生から、

「そろそろリハビリ始めようか」

の言葉をいただき、明るい兆しにうかれていた矢先のことでした。入院後三日め、すでに息のない父に看護婦さんが気づいたのは、夜中の二時過ぎ。

ICUで看護婦さんの目が届くからと、母も通いだったので、誰一人死に目にも会えず、危篤という状態すらなく、あっけなく逝ってしまったのです。

年老いて人に迷惑をかけるのを嫌い、七十二歳のころより、

「あと二年だ(で、お迎えが来る)」
と言っていた、父らしい最期でした。

ただその日、私のことを、

「さとみ」

と呼んだのです。母が呆れたように、

「どうしたの？ ちかこでしょ。お父さんの好きなちかこだよ」

と言いました。私も内心ショックだったのですが、帰りの車の中で、突然母が言うのです。

「そうだ、さっきは気づかなかったけど、さとみって前の奥さんの名前だ。明日怒ってやらなくちゃ」

前の奥さんとは、死別した先妻のことです。先妻は恋愛結婚、母は見合い結婚だけれども、連れ添った年月は格段長いだけに、余程腹に据えかねたらしく、いまだに時折思い出している、「まったくきもいれちゃう」。

あのとき気づいてれば言ってやったのに」と腹を立てています。

他にも、「後ろに誰かいる」などと言ったそうで、「おむかえ」というものは、ほんとにあるのかもしれない。

ところで、私はこの父が大好きでした。

普段は無口で母とは必要以上の会話はあまりなく、いつも「そうだね」と小さく答えるばかりでしたが、私に対してはそうではなかったのです。

小学校一年のころからマンガに狂い、父の傍で読むではわからない意味があるとすぐ尋ねましたが、何でもすぐ答えが返り、知らないことはないかのようでした。

習字、絵、作文も今思えば恥ずかしげもなく、よく見てもらいました。絵や習字はともかく、作文など特別どうということのないのに。一種のP・Rだったのでしょうか。

社会人になってからも、素敵な年賀状が来ると必ず父に見せては、二人して感心しあっていました。

一方、父はルミちゃん(小柳ルミ子)が好きで、私も西城秀樹が好きだったので、

家族の肖像

本や友人からの情報を提供したり、年は離れていても、十分話せる父でした。

その後、定岡さんのファンのときは、掲載誌が限られていたので、新聞の広告欄で「定岡正二」という名を見つけると即、買いに行きました。中には買にくい雑誌もあり、父に頼んだことも。ともかく二人の関係は、母がうらやむほど、すごーくいいものでした。

かといってまるで怒らないわけではありません。

高三のとき、コンサートを観てまっすぐ帰ったものの十一時近く。けれど父は幸いテレビを見て笑っていたので、そっと自分の部屋へ行きホッとしましたのです。が、その翌日。

「ゆうべ何時に帰ってきた」と、一言。

こたえました。ぐうの音も出ないというか、やはり強い父なのです。

父は晩年、失禁、足が弱くなるなどありましたが、いわゆる練り言のない人でした。父に昔話をせがんで話してもらいまし

たが、私が同じ話を聞かせてと頼まない限り、知ってる話が練り返されることはなく、いつも新鮮で心に残りました。

尋常小学校を出てからは、二十歳まで通信教育を受けてた話。

実家には戦前、本がたくさんあって、中でも好きだったのが、「あゝ無情」

洋画も大好きで、若いころ映画館に通い詰めたそうで、私の知らない俳優の名がボンボン出たり、

「ボレロ知ってるか？ ××は？ △△は

？（知らなかったので記憶にないのです）」

「そうか、知らないか。でもレコード屋さんに行けばわかるよな。顔馴染になって少しずつレコードを買い集め、たまにはテレビを消して、レコードを聴こうと思うんだ」とも言っていました。

他にも、カードが欲しくて教会に通った話。

牛乳屋さんをしていたころ、經理の人に現金を持って逃げられ、後で見つかったけど一発殴っておしまい、という話。



卓球の選手をしていて、会社の女の子にも教えてた話。

何度となく母から聞かされましたが、戦後ものがないとき、母が苦勞して（恐らく自分はほとんど食べないで）毎日お弁当を持たせていたのがあるとき、「やっつ弁当が食べられる」と言ったそうで、聞いてみると「俺はいつでも食べられるからいいんだ」と、会社の人に譲っていたのだそうです。

父は私に多大な影響を与え、二十歳ごろまで遊ぶことを知らず、まじめだったゆえんは、こちら辺にあるのかも知れません。というより、父に嫌われなくなかったのでしょうか。

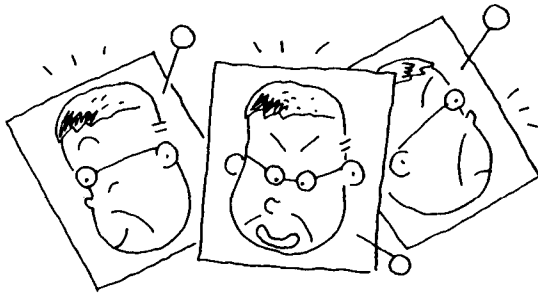
私にとって父は絶対で、いまだに理想の男性のようです。

私の知ってる父は、仕事から帰ると、横になり、お菓子を食べてはテレビばかり見えていましたが、尊敬こそすれ、軽蔑するところなど全然ありませんでした。

そんなある日、突如退職。いわゆる「クビ」。

定年後も同じ職場で仕事を続けていたが、会社が銀行傘下に入り、優先的に辞めざるをえなくなったのです。

「今に迎えに行くから」という残った人々の言葉もむなしく、辞職者は増えるばかり。そして社宅の立ち退きを余儀なくされ、長年住みついた草加から大宮に越してきたのです。



辞職後、草加にいたる間、製本会社に勤めたり、料理店の下足番までしましたが、父にできる仕事ではありませんでした。

高校入試一週間前に越してきた私には、家計のことはまるでわかりませんでした。上の兄は所帯を持ち、下の兄はあてにはならず、年金以外まるで収入がないような状態で、貯金もあるとは思えません。

大宮に来てからというもの、母は始終父にどなりちらしていました。

その内、母は母なりにポীラ化粧品のセールスを始め、つてを頼りに歩き回り、講習を受けては目の上を真っ青にして帰ることもありました。やはり高齢の母には向かず、八方塞がりでした。

そんなあるとき、母が親戚の人に病院の付き添いを頼まれ、それをきっかけに仕事とするようになったのです。

「お金をあげるから（高校には行かしてあげるから）ちゃんと家のことするんだよ」母の言葉に小さく、しかしはっきりと頷き、高校一年の十一月から、私は家事をするはめになったのです。

図らずも、父もスーパーでかごの整理の

家族の肖像

仕事をすることになりました。
悪いときはやはり続かない——と思った
ものです。

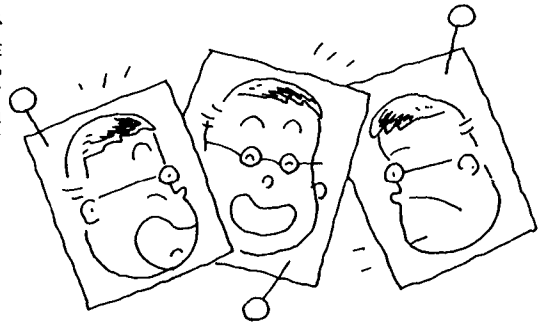
ところが、それまではほとんど手伝いらしい手伝いをしていなかったので手順が悪く、家事が大嫌いでした。よく人はこんなこと三度三度できると感心したものです。

その当時、下の兄が具合が悪く（といっても寝込むほどではありません）家にいたので、お互いに家事を押しつけてはケンカばかりしていました。

そんな私でしたから、里芋にしても洗ってある里芋を買い求め、ただ煮るだけ。わざわざ高い、泥のついた里芋を買うことなどないと思っていたのです。

それでも父は里芋が大好きで、あつというまにたいらげました。だからこそ余計気づかなかったのです。

けれど、おいしいものに対し、
「これはうまい！」
というこだわりと舌を持ってた父だけに、泥のついた里芋煮たら、きつと違いがわかってくれたのに、喜んでくれたでしょうに。



「また、作ってね」
冗談まじりに、顔をほころばせ言ってくれたでしょうに。
愚かでした。

全然味が違う、と知ったのは、父が亡くなる数か月前。

なにに忙しかったからでしょうか。なぜか里芋を煮ることなく、「レタスをもう少し細くしてくれ」と頼まれても、
「大丈夫、大丈夫」

とたいして細くもせず、一事が万事のまま、逝かせてしまったのです。

今なら離乳食も経験し、いつくらでも柔らかいものおいしいもの食べさせてあげられるのに。

今では、決して洗ってある里芋は買いません。それだけに里芋を煮ると、
「食べさせてあげたかった」

と必ず思うのです。

ボレロもその後知り、レコードこそありませんが、「愛と悲しみのボレロ」は一人で見に行き、テレビで放映したときは録画しました。

見せてあげたら喜んでたでしょうに。
あの大作をどう受けとめたか、聞きたかった。

いつもいつもにこにこしていたお父さん。
私の味方だったお父さん。

空気のようでいながら、大きな支えだったお父さん。

今の私にできることは、母に償うことでしょうか？

私自身幸せになることでしょうか？

奇妙な行動

神奈川県川崎市

秋野美恵子

ごく普通に生活している女が、自分の息子が嫁が来て、自分の娘が嫁に行くと、実に奇妙な行動をする。本人は、当然のことだと思っているらしいが、冷静に見てみると、実に奇妙なのである。自分の腹を痛めた娘と、痛めない嫁との違いが、天と地の違いなのである。姑と同居して二十年の体験が、この文を書かせたのである。

①娘の悪口を言わない

二十年近く姑と生活しているが、一度も娘の悪口を言ったのを聞いたことがない。義兄はサラリーマンで、義姉も週の半分働いているが、子供が四人いるので経済的に苦しい。姑がおっしゃるには、「正(義兄)がいけない。子供を四人も作って」と、決して義姉のせいにはしない。子供を四人も作ったのは、義兄一人なのであるうか。義兄が家に来る時は、食事時が多い。いつも約束の時間より遅く、手ぶらである。

姑がおっしゃるには、「正は食事時ばかり来て困る」と。手みやげを持たせ、迷惑になるから、食事をしてから出かけるように義姉は言わないのだろうか。

嫁となると、どここの嫁も悪口を言われ、私もその一人であるが、推測で書けないので、他の嫁のことで書こう。姑の妹からも週一回位電話がかかってきて、その都度嫁の悪口である。離婚した娘と生活したいために、息子が病死したら、嫁を殺人者呼ばわりして家を追い出したひどい話もある。

②物をやる

娘に物をやるのが、姑にとって生きがいのようにすら思える。新聞のチラシを見て安い物があると、せっせと買いこんでおく。ティッシュペーパーに至るまでである。知人や銀行からもらったものなどをためこんでおく。娘の家へ遊びに行くときや、年に二、二回、娘婚に車で取りにこさせる。ライトバンが満載になるほどである。家にはほとんどない。

姑がそんなだから、義姉も、実家の物ももらうものと考えているようだ。盆、正月も家族六人で来て手みやげなしである。そ



の他、二か月に一度くらい墓参りと称して家に寄る。姑は、「正子は感心だ。よく墓参りに来てくれる」とおっしゃる。来るたびにレストランで昼食を食べさせ、全員が持たないくらいのみみやげを持たせ、交通費全額負担する。私は、他人でも喜んで来ると思うのだがどうだろう。ちなみに、私達と墓参りに行くときは、昼食、交通費とも、こちら負担である。

③遊びに行く

家から、片道二時間かかる所に義姉は住

んでいる。姑は、往復四時間かかる道を、月に二、三回遊びに行く。階段の上り下りの多い駅を三回も乗り換えて行く。前の日まで、肩が痛くて通院していても、足が痛くて通院していても、その日だけはどこも痛くなくなるらしい。しかも、みやげをたくさん持って出かけるのである。普段、雨の日は外出しない人なのに、娘の所へ行くときだけは、雨でも雪でも出かけるのである。そして、次の日から病院通いをすることもあるのである。

往復四時間もかかる所に月に二、三回行くので、まめな人かという、そうでもない。私が勤めていた頃から、玄関一つ掃除をしない人である。

娘と一緒に生活したほうが、嫁と生活するより、姑にとってどれだけ幸福な老後を過ごせるだろうか。でき得る限り、娘達は、自分の親の老後をみてほしい。親は、長男夫婦と生活するより、娘夫婦と生活したほうがよい。それでなければ、姑達は、書いてきたように、実に奇妙な行動をすることになるのである。

いつわりの輸血

埼玉県越谷市

嶋田たい子

朝の出勤のため、六階のエレベーターを降りるとHさんが、車椅子に乗って入口の横から顔をのぞかせた。

「あら、今日はどうしたの」

「僕のワイフが、まだ来ないので、迎えに来ているのです」

「まだ、七時五十分ですよ。あと一時間したら見えますよ」

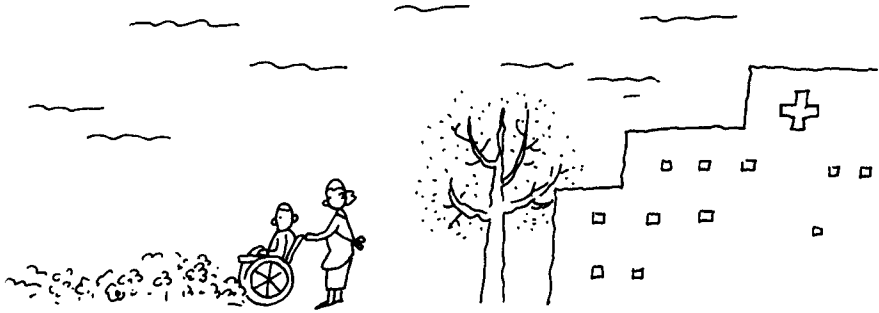
Hさんは出入りの激しいエレベーターの前で、右手で眼をこすって涙を出している。奥さんが、必ず午前九時にみえるから、それまで、お部屋へ行きましようとは私は促した。最近のHさんは日毎、気の弱さが、強まってきている。Hさんの車椅子を押しながら、私は一年前のHさんの入院の光景を思い出した。

一年前の二月、会社の会議中に突然倒れ、救急車で搬送されてきたHさんは、救急外

来で、蘇生術施行後、午前十一時半、脳外科病棟に入院してきた。直ちにCT（断層撮影）や、脳血管撮影が行なわれ、その結果脳下垂体腫瘍と診断された。

両眼瞼下垂で、両眼は開けることもできず、左手、左足とも麻痺で動かず、全身は蒼白のまま、かすかにウーンという発語があるのみである。

一流企業の専務であるHさんには、会社の社員が十人ほどついて来ていた。彼等はロビーで家族とともに、検査結果のであるまで待機していた。検査後脳外科医は全員揃い、検査結果とデータをみての討議が、シャカステンの前に一時間ほど行なわれた。その結果、翌朝手術をすることに決した。直ちに脳外科部長より、待機していた家族および会社の人々に説明がなされた。脳下垂体腫瘍は、部位が悪いため多量の出血が予想され、輸血も必要とすると話した途端、Hさんの血液型と同じ社員達が、競って献血を申し出た。その素早さは、部長の説明を聞いている私達ナースも、驚くほどであった。Hさんの人柄かも知れないが、会社組織の律儀さというものではない



だろうか。圧倒されてしまった。

そんな中で、か細い声で、突然、

「輸血だけはお断りします」

と、Hさんの妻が、涙を流しながらきっぱりと言った。

その場に居合わせた人々は、Hさんの妻の顔をじっとみつめた。

「私達はある宗教を信じていますので、他人の血液を入れることは許されていません。夫も輸血をすることを必ずや拒否すると思えます」

妻の発言に、部長の顔が一瞬ビクッと動いた。

「奥さん、今は宗教を言ってる場合ではありません。専務の命を助けなくてははいけないのですよ」

三十代後半であろうか、体格のいい社員が、奥さんの肩をゆすりながら大声を發した。社員達の中には、顔を真っ赤にして奥さんに詰めよるものもいた。

脳外科医達は、誰一人、一言も発せず、その場から退散した。部長も、シャーカステン前の検査フィルムをカバード袋に詰めてある。あらゆる攻めにも奥さんは眼をつぶ

ったまま、首をたてに振らなかつた。

Hさんの命は明日の手術にかかっている。手術をしても助かると、百パーセントは期待できないが、その可能性の何パーセントにかかけなければならぬ。そんな時に、こうした宗教は大きな難問としてのしかかる。

結局、翌朝、Hさんの手術は行なわれた。輸血は手術室で多量に使用され、病室に戻る時は輸液に変っていた。

手術後の説明時、奥さんにはあくまでも輸血はしてしないと部長より説明があった。みえすいた、偽りの説明であった。

奥さんは、輸血なしでは手術はできないと、説明がなされていたので、部長の説明は便宜上と思っていたようである。結局、輸血は業者から取り寄せたもので済ませた。

手術は一応成功したものの、輸血の副作用が、手術後一週間してからあらわれた。肝機能障害が長々と続き、Hさんはすっかり無気力な人に変っていった。リハビリをやるのにも、やる気を出さず、一流企業戦士の面影はない。

あれほど律儀だった会社の人々の面会も

途切れ、毎朝九時からかけつける奥さんの来るのを、ひたすら待っているHさんである。

そんな彼をみて、奥さんは、

「結婚してはじめて夫を一人占めできて、幸福を感じます」

と言いながら、夫の介助にいそしみ、いつも午後の消灯時間まで離れないのである。

大人同士

京都市右京区

橋度 秀子(25歳)

結婚して初めて、夫の誕生日がきた。たまたま土曜日だったので、妹も誘って飲みにいこうと提案した。そうしたら、夫は「お義父さんと呼ぼう」と言ってくれたし、「それならお母ちゃんも」と言い出したのは妹だった。こうして私たち夫婦、私の両親と妹、そして夫の友人という六人が、スナックに集合することになった。

こういう顔ぶれでスナックに行くなどというのは初めてのこと。最初は何となく堅くなっていたけれど、妹の歌をきっかけに

カラオケ大会開始となり、話も弾みがつき、閉店まで居座ってしまった。こうして、楽しい思い出深い一夜を過ごすことができた。

母を初め、私も妹もほとんどお酒は飲めない。だから、黒一点の父は、いつも一人で晩酌をしていた。私が結婚してからは、お酒が飲める相手ができたと喜んでいいる。まして、一緒に飲みにいこうと誘ったときは、とても嬉しそうだった。

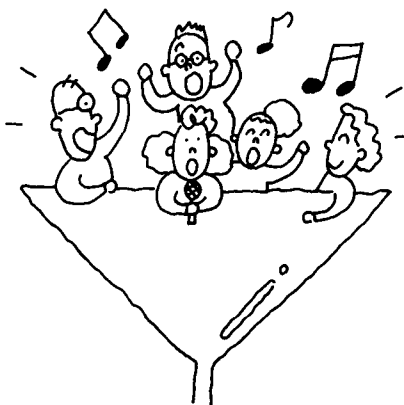
母がスナックへ足を運ぶなどということ、は、恐らく初めてだと思う。このママさんとは顔なじみという安心感も手伝ったのである。ボックスの椅子にちょこんと座り、コーラを飲み、マイクを持たなくとも、ただにこにこしながらみんなの歌を聴き、スナックという雰囲気を楽しんでいるようだった。

私も酒場は大の苦手だ。でも、今回だけは別である。歌だって下手だけれど、私がこの場を盛り上げねばと、せつせと歌いまくった。

今回は、和歌山に住む夫の両親は誘えなかったが、いずれ一緒にしゃぎたいなと

思う。

こういう集まりが持てるのも、みんな大人になっただからなんだと、ふと思った。いままでは、家庭の中での子供として育てられてきた。結婚してからは、私も妻という立場として家庭をつくり始めた。ゆくゆくは両親の面倒を見ることになり、立場が逆転していくだろう。それまでの間、いまは対等な大人同士として、家族みんなが楽しく付き合っていきたいと思っている。



ある法則の発見

岐阜県各務原市

長縄 幸子

三日前に母といっしょに遊びに来たばかりなのに、また姉が高二の息子とともにやって来た。どうやら母のいないところで、私にグチを聞いてもらいたいらしい。姑のことである。

母と私たちは母娘の関係にあたるが、別の見方をすれば、母は姑の立場であり、私たちは嫁の立場である。私たちが姑のことをグチると、母は自分を姑の立場に置きかえ、娘のことを百パーセント応援してくれない。だから姉は百パーセント応援してくれる私だけに話を聞いてはしかったのだろう。

姉は岐阜に夫と娘と息子の四人で住んでいる。夫は長男である。夫の少ない給料をやりくりし、家建て、娘は京都の私立の短大に通わせている。舅と姑は大阪のアパートに住んでいる。アパート住まいであるが、今は金まわりは良く生活に困っていない。



い。その二人が姉家族が大阪に寄ったおり、また自分たちの老後の話を持ち出した。めんどろ見ないなら老人ホームに入るとかなんとか言い、義兄の給料にまで話が飛んで、義兄が帰ってからすぐ怒ったという話である。こういったたぐいの話は結婚以来から聞かされており、姉は結婚しても二十年にもなる。

私と姑の関係もそうだが、姉と舅や姑の

関係は決して楽しいものではない。会えば苦痛があるだけであり、いつも重荷を背負った気分なのである。

姉の話を聞いているうちに、舅や姑の行動の中に、ある法則があることに気がついた。嫁イコール自分たちの老後を見る人、という思い込みである。それは私の姑（夫とはすでに死別）もそうであるし、私の実の親、特に母親もそうである。

私の母は父より七歳年下で、自分が生き

残る確率が高いためか、やはり嫁に自分の老後を見せらうつもりでいる。そのために弟家族のところにセッセと物や金を運んでいる。義兄の親たちは息子家族には何もしてやらないくせに、「長男は親のめんどろを見るのがあたりまえ」という切り札を出す。私の姑の、私たちが結婚する時の言葉はこうだった。「絶対親と同居しなければダメ」。

どの親も、自分の老後を嫁に託している。そして絶対に「お願いだから私たちの老後を見て」とは言わない。「お前は長男なんだから、家を継がなければならない」と言う。どんな小さな、一間のアパートに住んでいたって、「〇〇家の家を守らねば」と

言う。

この累進課税制度の日本では、守るべき家を持つている人は少ない。まして、まったく財産を持たない庶民など、継ぐべき家などあるはずがない。家はかくれみのである。家イコール親の老後なのである。

戦後、家制度は解体し、どの子供にも平等に財産を受ける権利が発生した。しかしこの法律には大穴があいている。親の老後の保障が抜けているのである。そして年々、平均寿命は延びている。

年金だけでは食べていけない。医学の進歩のおかげで、延命はできるが、そのために寝たきりになる恐れが出、年々医療費はあがり続けている。おどしてでもすかしてでも誰かに自分を見せらわなければなら

ない。そのターゲットとなったのが長男である。

なんとという貧しい国なのだろう。舅や姑は不安でウロウロし、長男やその嫁たちはイライラしている。次男とその嫁だけは安泰なのだろうか。私は長男の嫁だからそれはわからない。

私の場合、姑とはずっと別居している。今、姑のための家を、夫の連帯合算で保障し建っている。姑のめんどろは見るともっているが、息子たちに自分の老後を押しつけるのは辛い。自分ひとりで淋しく死んだほうがましのように思える。もちろん経済的にも着々と準備をしている。しかし準備のできなかった彼女らをせめるのもかわいそうな気がする。(え・小沢恵子)

●新刊

シリーズ『がんばれ! 中学生のお母さん』

●このシリーズは、父母の信頼厚いベテラン中学校教師が贈る、子育て、教育の悩み・関心にズバリこたえる内容で読者の声続々

中学生の気持ち教えます

▼以下続刊(毎月1冊)

監修 太田昭臣

各850円

【好評既刊】Q&A わが子の悩み相談室

中学生の性をどう考える? 進路・進学と高校受験の基礎知識 / 女子中学生の心

東京都文京区春日2-17-3

03-815-5511

あゆみ出版



保育園などの 情報を お寄せ下さい

府中市の押立町に住む友人が九月に出産予定のため、保育園、保育ママ、託児所などに関する情報を集めています。十年以上今の会社にフルタイムで勤めていますので、来春から保育園へは入れると思いますが、産休明けの保育や、通勤時間が一時間以上かかりますので一歳過ぎてから（育児時間がなくなつてから）の特例、時間外保育について

て、なるべく具体的な情報をいただければと思っています。

◆連絡先 〒248鎌倉市二階堂二六七一―一六四 山本雅子 ㊟〇四六七―二四一八三三六（電話は夜か土・日・祭日のみ）

個性派の方 同人誌を 作りませんか

文章教室では、型にはめられないように息苦しく、刈り込まれた盆栽のように感じる方。商業誌で、編集者に文章をすっきり書き直されて、載せられるのに、疑問を持っていらっしゃる。自分の書いた文章をそのまま、自由に載せられる雑誌を作りませんか。もやもやしたものや発散させる場を作りましょう。

英文も歓迎します。
参考までに、カルチャー教室卒業生などで作っている同人誌の費用は、入会金三千元〜一万

円、年会費千円〜二万円。投稿者は四百字づつ原稿用紙一枚につき二百円〜四千円出します。たくさんの方たちが参加されて、なるべく少ない負担でできたらいいな、と思っています。興味のある方は左記へご連絡下さい。

◆〒161東京都新宿区中落合三一―一八一七 堀内千恵子

いわき市に お住まいの方 いらつしやい ませんか

私は福島県いわき市に住んでいる二十八歳の名古屋出身の専業主婦です。子どもは二人、三歳と一歳です。結婚してからここへ引っ越してきました。多分永住することになるでしょう。子どもが手を放れたら、何かしたいと思っていますが、そのためにはここがどういう場所な



のか、ある程度知っておきたいのです。（たとえば、いわきの土地柄・女性の意識・女性の再就職の可能性など）
実家から遠く離れ、活動したくても身動きできないので、無理はせず、今はもっぱら充電に努めています。

いわきにお住まいで、こんな私と「気が合いそうだ」と思う方、ぜひお友達になって下さい。連絡を待っています。

◆連絡先 〒979-131いわき市平赤井比良二―一九市宮住宅五―一 岩佐エリ子 ㊟〇二四六一二五―一四〇八

「親業」訓練を 受けて みませんか

三歳児とゼロ歳児の母親です。

子どもが成長するにつれ、親であることの難しさ、その責任の重さを痛感するようになり、何か指針をた探し求めていたところ、親業、(トマス・ゴードン著 近藤千恵訳 サイマル出版会)という本に出会いました。関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、私の家で一緒に訓練を受けてみませんか。栃木県では、河内町にインストラクターの方がいらっしゃいますが、六人以上の受講希望者があれば、来て下さるそうです。

◆連絡先 栃木県宇都宮市東郷五―三―七―九〇二 野本千津子 Ⅷ〇二八六―三―七―四三〇八

保険に関して 疑問を持たれた 経験のある方 ご連絡下さい

掛けていた保険金をいざ受取るという時や保険の実行という段になって、代理店や保険会社、あるいは営業担当とトラブルを起こしたり、疑問を抱いたり、納得がいかなかったというような体験をお持ちの方、あるいは、そういう体験を持った方をご紹介下さる方、いらっしゃいましたら、是非ご連絡下さい。保険の種類は生命保険、自動車保険、疾病保険、火災保険、ほか何でも結構です。葉書に保険の種類と簡単にトラブルの内容、あるいは納得いかなかったことをお書きにしまして、「わいふ編集部気付、市川千歌子」あてお願いいたします。ご住所の他に電話番号もご記入下さい。

編み物の 個人指導 して下さる方を 捜しています

現在十一か月の男児一人がおり、教室に通うことがなかなかむずかしく、独学ではなおさら困難なので、私のご近所に住み子どもが好きな方に、ぜひ我が家で教えていただきたく思います。

できれば月額三千円ぐらいで、週一回か二回程度を希望していますが、詳細は個々に相談と思っています。

◆連絡先 〒114東京都北区王子本町一―二―四―三〇四 フコク寮 田中恵里子 Ⅷ〇三―九〇五―五六二二(昼間電話下さい。北区役所の近くです)



- ★わいふバックナンバー
- 177号 肉親の老いを見つめる
 - 181号 PTA・その苦しみと楽しみ
 - 182号 家にいでできる仕事
 - 183号 特集なし(近代恋愛婦人史)
 - 184号 私の災害体験
 - 186号 お医者さんを診断する
 - 191号 集合住宅で生きる
 - 195号 特集なし(私の昭和史)
 - 208号 わが子の留学
 - 209号 わがふるさとと現代史
 - 211号 病院に入ってみたら 定価四五〇円
- 送料は一冊二〇〇円、二冊以下三冊二五〇円、四冊以下六冊三〇〇円、七冊以下九冊三五〇円、十冊以下十二冊四〇〇円です。
ご注文は編集部へ。
Ⅷ〇三―二六〇―四七七一・四七七三

八路軍とともに

●私の放浪の旅

—— 法村 香音子



中国内戦のなかの日本人

輯安の城内にまだ残留しておられたSさんという中年のおばさんが、父の仕事の手伝いに通ってこられるようになったのは、そのころであった。

Sさんは、シベリヤに連れていかれたご主人の帰りを待っているうちに集団引き揚げのチャンスを失い、次の引き揚げの機会を待っておられるとのことだった。

おばさんは毎日四キロの道を城内から父のところまで通ってきて、大きなゴムのエプロンを掛け、縁台のような板の台に上がって、水を張った流しにプカプカ浮かべたガラスの大きな瓶をブラシで洗っていた。

私達は日本人の他人がものめずらしく、おばさんが優しいこともあって、「シロのおばちゃん、シロのおばちゃん」とおばさんになつた。シロのおばちゃんというわけは、おばさんがシロという白い犬を飼っておられるからだった。しかし思いがけないことに、輯安で出会った日本人はSさんだけではなかった。

かつて日本人が、何かの工場をやっていたという煉瓦作りの倉庫のような建物が八路軍の兵工廠になっており、そこに大勢の日本人がいることがやがてわかった。

日本人たちは、主に北の吉林、牡丹江方面から来た人たちであったという。

戦前に少年義勇軍または移民として北満方面にきていて

終戦になり、日本に帰るメドがたないまま八路軍に雇われた人や、技術を持っているために父と同じように留用された人たちであった。彼らは戦場の動きにつれて旋盤などの機材を持って八路軍と一緒に移動しながら、銃砲の修理や、手榴弾の砲弾などを生産する兵工廠の主力として活躍しているのであった。

彼らはやがて私達が住んでいる駅の後ろの山に向かって、「シュルシュル……ドカーン」と、大きな音をたてて大砲の弾を打ち込み、試射をするようになった。予告もなにもなしにやるので、最初のときは家と一緒に飛上がったものだ。人の運命とは不思議なもので、日本に帰ってから別れたつれあいが、その頃この兵工廠にいて、弾を作ったり試射したりしていたということを知ったのは十年後、北京で結婚してのちのことである。

この兵工廠の近くには野戦病院もできており、看護婦や救急医療班、担架隊として大勢の日本人が働いていた。本職の看護婦さんだけではなく、満鉄に勤めていた人や、電話交換手だったという普通の娘さんも、救急医療員として働いていたという。

彼女らはひっきりなしに前線から送られてくる八路軍の傷病兵の面倒を見、また前線へと送り出していたので、看護婦さんたちは私達が遊びに行ってもいつも忙しそうにしていた。誰かしらが部屋に戻ってきて、「ゆっくり遊んでいきなさい」などというはすぐに出て行ってしまっ

ので、看護婦さんたちの暗くてだっ広い馬小屋のような宿舎はガランとして子供には所在ないところであった。

誰もいない宿舎とは裏腹に、一步外に出るとその家屋の周辺には、看護婦さんに助けられながらピッコをひいた兵士が散歩していたり、三角巾で腕を吊った傷病兵がおおぜいたむろしていた。

兵隊たちのなかには、壁に寄りかかって銃を磨きながら、私達子供にまで、

「ダダーン……。許可が出たら、直ちに戦場に復帰だ」と、銃を撃つ真似をして見せたりする者もいて、看護婦さんたちは片言の中国語でその人たちと言葉を交わしたりしながら、せわしなく一生懸命働いていた。

その当時彼らのいた部隊が、正式には何という名称だったか私には明確ではない。

兵工廠は、「第〇〇後方勤務部隊〇〇軍工部（略して後勤部）」と称したようであるが、中国はしょっちゅう呼び名を変えるし、人によっても言うことが違うので、これも定かではない。

残っていた人たちは主として軍医、レントゲン技師および看護婦さんたちだったという。多いところでは一つの部隊に二百名もの日本人がいたと聞き、当時留用されていた人々のその数八千とも一万二千人ともいわれている。

父のほかに防疫関係の医療技術者がいたという話はないから、父の仕事は特別だったのかもしれない。

い。

多くの人たちは、八路たちと一緒に厳しい東北の冬のさなかに徒歩で担架を担いで歩き、看護婦さんたちでさえ落伍すれば傷病兵ともども置いて行かれる、といった苛酷な条件だったといい、劣悪な環境のなかで食べられない雑穀によって臓器を弱らせ、発疹チフスなどの伝染病にかかったりして、日本に想いをこがしながら亡くなった人も少なくなかったと聞く。

父はといえば予防薬作りにいそがしく、そのあいまには伝染病の予防指導や往診と、隣の我が家に帰ってきても席の温まるいとまもなく、私達はゆっくり父の顔を見ることもできなかつた。

父は自分の命と引き換えに、死と隣り合わせで仕事をしていた。

その頃おもに作ったのは、コレラのワクチンと天然痘の痘苗であつたという。

苦勞して持ち歩き、一度は行方不明になりかかつたあの菌たちはどうにかこうにか生きのびて、やっと輯安で活躍することができるようになったのだつた。

前にも述べたようにして培養基を作って菌を培養し、雑菌を殺し、動物通過後の菌を洗い、稀釈した菌を人間に注射し、数日経つと今度は血液を採って抗体、つまり予防効果を調べる。そして五百倍に薄めて使えるということが確認できたら、消毒した瓶に詰めてさらに雑菌試験をし、よ



八路軍に参加した日本人たちが働いていた兵工廠の建物は今も残っていた。
当時の人たちがこれを見たらどんなに喜ぶだろうか。

し、となって初めてワクチンとして使うことができるのだという。

□でいうのはたやすいがここまで最低三週間はかかる仕事であり、道具を考案したり、無い物の間に合わせを考えたり、並大抵の苦労ではなかったという。

最終的にどうしても必要な人体実験だけは安易に人にはできない。しかもまわりは中国人ばかりである。そこで、実験できるのは自分か家族、ということになる。

「あんなことばかりしていたんですもの、いままで無事であるのが不思議なくらいよ。まかり間違ったら、四人も子供を抱えて異国の空でとっくのとうに母子家庭だったわ」

もと看護婦であった母は、黙って父のいうとおりに夫に注射したり採血したりしていたと、いま笑いながら言うのであるが、そういう作業を繰り返し作りだされたワクチンを、シロのおばちゃんに洗ってもらった五〇〇の小瓶に詰めて、朝鮮や中国各地に送り出していたのであった。

無理に留められたとはいえ、あの困難な時代に中国人と共に戦い、新中国の建設に少なからぬ貢献していた日本人が大勢いたのである。

さらにそののち、一九四九年中華人民共和国成立後も中国全土が解放されるまで、西はチベット、南は海南島の果てにまで人民解放軍に従軍し、新中国の建設の一翼を担った人たちの足跡が記されている。

奇しくも今日（一九八八年一月二十七日）の朝日新聞に

こういう尋ね人がのった。

* 山田祥子さん。第二次大戦後、中国人民解放軍に看護婦として参加。第四野戦軍野戦衛生部第二医管処第一

○野戦病院一所内科に所属されました。一九四九年、湖南省平江県へ移動して第四野戦軍傷病員に。一九五〇年六月、漢口市から帰国。六十歳ぐらい。私は当時

第四野戦軍外科手術室に勤務していました。（中華人民共和国広東省広州市芳村区全福里二二一〇一房、

劉田）（注・第四野戦軍というのは東北軍区のこと）

ちなみに、私を除いて我が家族もその数年後に「貴州省貴陽（中国本土のほぼ真ん中、ベトナムに近い）に行き、さらに八年の長きを、立派な防疫センターを作り、そこで技術者を養成したりして過ごすごことになるのである。

だが、戦後の混乱のなかでやむなく残留したこんなおとなたちや、親と一緒にいられた私達はまだ幸せだったのだ。

野孩子^{イエハイズ}（乱暴者）

私たちが城内に行つて中国人の子供たちと遊んでいると、いつのまにかどこからともなく現われる男の子がいた。

あっちもこっちも破れた汚い中国服を着ていて、その腰を荒縄で縛り、坊主頭で青い漬を垂れたとても汚い子であった。

私と妹は最初、その子がなぜみんなから「野孩子^{イエハイズ}」と呼ばれるのか分からなかった。私たちにまといつくようにつ

いてきては、いつまでもただ黙ってみんなが遊ぶのを見ていただけだったからだ。そのうちに、やはり乱暴するようになった。

いきなり石を投げたり棒を振りまわしたりするから、「野孩子^{イエハイズ}」と怖がられ、みんなに仲間外れにされているんだ、ということがうなずけたので、私たちも無視することにしたのであった。

ある日のこと、城内から息せききつて帰ってきたのんちゃん、
「あ、野孩子^{イエハイズ}」がね、「オレ、ニホンゴシッテル！ニホンゴシッテル！」って言ったのよ！」と言った。

「へえ、あの子、日本語しゃべれるの！」

私はびっくりした。その子が日本人だとは、夢にも思わなかったのである。

のんちゃんたちが廃屋の中で遊んでいると、やっぱりその日もその子は現われたという。

しばらくすると、いきなり扉が壊れてなくなっている戸口に両手を掛け、首を突きだすようにして真っ赤な顔で首に青筋を立て、日本語でそう叫んだ、というのがだ。

のんちゃんの話聞いた母がシロのおばちゃんに尋ねてみると、その子はれっきとした日本人だったのである。しかも、おばちゃんの幼稚園の園児であったというから、私たちは、へえ！と顔を見合わせて驚いた。

終戦直後に父親が亡くなり、母親はその子と幼い妹を中

国人にやって若い男と日本に帰ってしまった、という。

妹は三歳ぐらいで可愛い盛りであったし、幼いというところもあって養母によくついていたらしい。私たちが見たときも、薄い布団に包まれていつもだっこされ、可愛いがられていた様子であった。

しかし、男の子の六、七歳といえばちょうど反抗期にあたる年ごろ。シロのおばちゃんは、置き去りにされた子を慰めようもなく、養家は子供たちが日本人と接触するのを好まないであろうし、置き去りにされた子供のためにもならないだろうからと思っただけで、とおっしゃったという。

つい最近、(昨年、八七年)聞いたある人の話によれば、兄妹の父親は県の役人だったので八路军に銃殺された、ということだが、シロのおばちゃんの話ではないので定かではない。

しかしその子らの身に起きたこうした事情や、物事もわかりはじめていた男の子がその当時、「大きくなったら、探し出して(母親に)復讐してやる」といっていた、ということは、複数の人の話がいずれも一致している。

私は母にシロのおばちゃんの話の根掘り葉掘りきいた。確かに、かしくそんな子だと思った。シロのおばちゃんも、「あの子は、とても利口な子だ」とおっしゃったという。

私は母に話をきけばきくほど、あの子が可哀そうでならなかった。

(日本人の子が、「日本語知ってる」って言うなんて!)と、何度も思っただけ胸がつぶれ、家族揃っていられる幸せを思わずにはいられなかった。

そのことがあったあと男の子はおとなしくなり、あまり乱暴しなくなった、と、のんちゃんはいったが、城内に行こうとする私達に母は、「あの子たちに会わないようにしなさい。話しかけちゃだめよ」と、かならず念を押すのであった。

それがせめてもの思いやりだとしても、私はところが城内に向くたびに、のんちゃんが口まねをしてみせた、あの、「ニホンゴ、シッテル」という叫びがよみがえって、あの子たちのことを思い、会いたいと思ひ、「何かあげられる物はないかしら」とのんちゃんと言いながら、こっそり家のなかを見回すのだった。

その子の名は、「さかぐち君」といった。

鬼子グアイズって、日本鬼子グアイズのことじゃない

安東でのあの引き揚げの時にみんな帰ってしまった、と思っていたら、日本人がまだこんなに大勢いる、ということに私は驚いたが、その反対に、八路军に日本人の子供がいるということも私たちが珍しがられた。

だが私は、看護婦さんたちのところによばれて遊びに行っている、出たり入ったり忙しいおとなたちの邪魔しているようで居心地がわるくて落ち着かず、すぐにそこから

足が遠のいていったのだった。

「あんたの好きな流行歌も出るだろうし、きつと面白いだろうから見に行っておいで」

母はかつて日本軍がやったそれを思い起こしたのか、それとも日本人が懐しかったのか、旧暦の端午の節句を記念して兵工廠の人たちが催すという演芸会のことを誰からか聞きつけて、私達にしきりに見に行くように言った。

勧められて見に行っただけで、違和感と気恥ずかしさが先にたち、ずーっと後ろのほうから人に気付かれないうようにそっと眺めただけで帰ってきってしまったぐらい、久しぶりに出会った日本人や日本の歌を懐かしみ慕う気持ち、なぜかまるで湧かないのであった。相手がおとなであつたからかもしれないし、自分が中国人に馴染んでしまつていたのかもしれない。

しかし、自分の心のうちを振り返ってみると、安東にいたときに見た電柱で風に揺れていた「日本人の子、売ります」の張り紙のことや、さかぐち君兄妹を捨てて行くことができる「日本人」という人種に対しての根強い不信感がたしかめられるのである。

それに、おとなと遊ばずとも、私たちには面白い遊びの種が山ほどあつたのだ。

集団に組み込まれている人達と違って我が家には自由があつた。

母は父にふ卵器でヒヨコをかえしてもらい、「丸まげさ

ん」とか「おちよぼ口」とか、「喧嘩太郎」などと雛に名前を付けて育てたり、畑を作ったりして楽しんでた。

私は父や母と河や池に釣りに行くし、トロッコで遊んだり、小侯たち通訳員を引っ張って幾つもある墳墓の探検をしたり山に登ったり、城内に出掛けて行ったりして結構いそがしかった。

言葉はあまり分からなくても何の不安もなく、私はいつものんちゃんと連れだつて出歩いた。妹は誰でも遊ぶから言葉の覚えも早い。だからとても頼りになるから、街に行くときはいつものんちゃんと一緒だつた。

のんちゃんは母の鶏と同じ「喧嘩太郎」とアダ名がついていたくらい、小さいときから喧嘩もめっぽう強かつた。正義感が強く、曲がつたことは人のことでも黙っておれない性なので喧嘩好きに思われてしまうのだが、たしかに、小さな口をとがらせ、大きな目玉を刺して相手に突っかかつて行くさまは、まるでチャボであつた。

喧嘩太郎の面目躍如としたできごとが起きたのは、輯安に帰つてすぐのことだつた。

八路兵の服の裾をぐいぐい引っ張つてのんちゃんが現れたのは、私が母に手伝つて庭で布鞋の底用の布を戸板に張つてるときであつた。

陽に焼けて、いかにも善良そうな中年の八路兵であつた。彼が半分笑いながら困つた顔で身をこごめ、怒っているのんちゃんにしきりに何か言っているけど、私達にはどうし



飾り気なく明るい桓仁の少女たち。
昔とかわらず露天では麻花や豚の足やマクワを売っていた。

たことだかさっぱり分らない。

私と母がのんちゃんの剣幕にあっけにとられていると、「この人が……、クシユン、クシユン。このひとがね、うちのことを『グイツ（鬼子）』って言ったの！ いけない言葉でしょ……、クシユン。だから、のんちゃん、（なんでもうちにグイツ、って言うの！ のんちゃんはグイツなんかじゃない。あやまんない）っていつてるのよ。謝ってよ、のんちゃんに謝ってよ」

のんちゃんは訳のわからないことをわめきちらしながらわあわあ泣いて、兵隊の服の裾を両手で攪んでゆさぶるのだった。のんちゃんは目玉も大きいけれど涙も大粒で、トウモロコシのようにぼろぼろとよくこぼれる。

なりが大きくて人の良さそうな兵隊がのんちゃんをもてあましていた様子に、気の毒になった母が侯さんと呼んできてといったので、私が侯さんを引っ張ってきて二人から事情を聞いてもらうと、この次第はこうであった。

兵隊たちが子供をからかって遊んでいるうちに、のんちゃんのほったをつついて、「這、鬼」と言ったらのんちゃんが怒りだし、「決して（日本）鬼子と言ったつもりはない、可愛くて言ったのだから勘弁してくれ」といってもきかずにここまで引っ張ってこられてしまった、ということだったのである。

日本鬼子。この言葉は、終戦前後に中国にいた人ならみんな知っているはずだ。塀や家の壁、電柱などに誰がとも

なく書きなぐられていた「打倒日本鬼子！」の文字。中国人が恨みをこめていうこの言葉は、文字通り、「鬼」である。

でも、「小通訳員」のことを親しみをこめて「小鬼」と呼ぶように、子供に対して兵隊がいったように「這、鬼子」（このときの、子はあまり大きく発音しない、またはつけない）と呼んだときは、「この子ったら」と愛情こめた言葉となるのである。そこが輯安に帰って老百姓（軍人に対する一般人ほどの意）と付き合うようになり、覚えはじめた中国語の難しいところであったのだ。

侯さんや母がのんちゃんに、言葉の微妙な違いや意味を勘違いしたのだということをおんこんと話して納得させ、おとな相手の「喧嘩」は、ようやく幕となったのであった。



み

仲直りを求めるように八路の兵士はごつい両手でのんちゃんの手を包み、しきりに悪がっている母に、

「没有什麼（なんでもない）」と手を振ると、その日の空のように明るくおだやかな笑顔を残して、どこかへ立ち去って行ったのだった。

その後ろ姿を見送っていた私は、また何かしらほのぼのとした安心を肌と感じ、いっそう自由な心持ちになったのであった。

私達は城内への道をてくてく歩き、両側の畑のマクワ瓜やトマトのおいしそうなものを選んでかじったり、砂糖キビをひっこ抜いて指や口びるを切ったりしながら、「スーハー、スーハー、ペッペッ」と、しゃぶりしゃぶり街に行った。お店を見て歩く楽しさを知

り、お金を使うことを覚えて使いたくしてしかたがなかった。

母に貰って握りしめて行った八路の軍票(ライセン)、米なら何斤分、というふう^にに換算して使う^で、汚い屋台の板(バンドウ)（細い一枚板の、高い長椅子）に座って欠けたドンブリを抱えて臭い、羊湯^ををすすったり、麻花(マイホウ)（揚げ菓子）^をを食べることも覚えたり、生まれてはじめて、お店で布鞋のきれや服の布を自分で選んで買ったつもりもした。

池で菱の実を取ったり鰻や鮎を釣ることに夢中になって毎日出掛け、私達は実によく歩いた。生子ちゃん^でさえ、田んぼのなかの三キロもの道のりを歩いて行き、一日中遊んでまた歩いて帰ったものであった。

日本人と知れても私たちは可愛いがられこそすれ、「日本鬼子」といじめられたこともなく、平等に自由に生きていた。

衛平ワイピンと小侯シャオホウ

ある日のこと、父が憤然として部屋に帰ってきた。

「まったく、しょうがないヤツだ。かわいそうな子だと思っ
うから、僕はあの子に目をかけてやっているのに……」

聞くと衛平のことである。

衛平が防疫站到ってきたのはいつの頃だったか、憶え
がない。

衛平は閩同志の「甥」だというふれこみだったが、それ
は、长征を闘った大幹部の子弟だということ^で特別扱いさ

れるのをおもんばかったのことだったらしく、彼は幼い時
に故郷に置いて出てきた息子だ、ということはいつしかみ
んなに知られていた。

歳のころは十七、八。ずんぐりむっくりしていて身体つ
きは母親である閩同志によく似ていた。

しかし、人が良くて優しさが芯から溢れている閩同志の
性格とは、似ても似つかないといえるほど、衛平は嫌な感
じであった。

すねた性格をブーツとふくれた頬に現わし、母のころ
子知らず、というのか、幹部の縁故という看板を鼻の先に
ぶらさげて、つまらなそうに歩き回っているのであった。

衛平がやって来てから、何の屈託もなかった環境に目に
見えない変化が起こり、まわりから何故か通訳員たちの影
が薄くなっていることに私は気がついた。

色が白くてハンサムで、ちょっと町の子のように垢ぬけ
た賢い小侯までが私たちを避けるようになったことが私に
は淋しく、それは衛平が何か言ったせいだと思つと、彼が
よけいにきらいになつていたのであった。

その衛平が、仕事のあいまに父が仕事場のベッドで休ん
でいると、いつものように嫌味な顔でぶらりと入ってきた
という。彼はベッドサイドに掛けて置いた父の拳銃を手に
取つてしばらくもて遊んでいたが、やにわにベッドの足め
がけて三発続けて弾を打ち込んだというのだ。弾はベッド
の足に当たって金属音を立て、どこかへ跳ね返つた。

「何するんだっ、危ないじゃないか！」

一喝すると、衛平は拳銃を床に投げ捨て、肩をそびやしなから出ていった、という。

鼻つまみものの衛平のそんなこんなを母親の閻同志もてあましたのか、事が起きては一大事と思っただか、何時のまにか私たちが気づかないうちに衛平の姿は衛生站から消えたのだった。

衛平のことが何だか分かったような気がしたのは三年後、中国全土に怒濤のように渦巻いた、日本の再軍備反対の大会の時であった。「反対武装日本！」と、同学们と共に拳を突き挙げたときだ。

スローガンを叫びながら、(衛平は、「日本人」が大事にされていることがよけいに憎かったのだろうなあ)と、私はあのふてくされた青ぶくれの顔を思い浮かべて(仲よくできたら良かったのに)と思い、私たちに親切だった閻同志や小侯のことを懐かしく思い出したのだった。

衛平とは反対に日本人びいきの小侯は、色が白いうちよりは青く、痩せているのにとっても大食い、まったく痩せの大食いを絵に描いたような子であった。

大食いの小侯にとっては、あの朝鮮での食糧不足は辛かったに違いなかった。

子といっても、私より七つも上だが、美男子なのに貧弱な身体つきで、よれよれの木綿の軍服のベルトをキュッと締めて、折れそうな腰に下げた拳銃の重みに耐えかねるの



か、カラの胃袋をいたわるためか、彼はいつも前こごみであつた。

食べても食べても、こうも痩せているというのはきつと虫のせいに違いない。そうみた父は、小侯に虫くだしを飲ませたのだ。

すると、出るわ出るわ。蛔虫が大きなドンブリ一杯も出て、次の日もまだ出たという。小侯が食べるご飯は、「腹の虫」が食べていたのだった。

成長期にあつた小侯は、ほんとうにそれから幾日も経たぬうちに、見る見るバランスのとれた良い体格の、ピンクの頬を持ったまさに紅顔の美少年になっていったのである。その結果小侯はより父を尊敬するようになり、私達のためによくしてくれたのだった。

小侯は、日本語を覚えたいというそぶりを私に見せることがあつた。

だけど私は、例えば「コンニチハ」ということを口移しに言うことさえ嫌だつたので、小侯とは一緒にいたいのだが、機嫌をそこねたようにして、そのそばを離れるのだった。

日本は負けたのだ。負けた国の言葉を習いたいという感覚が、私には理解できなかったのである。私は中国人に対して、自分が日本人であることにコンプレックスを抱いていたのであつた。

小侯はやっぱり通訳の候さんの従兄弟だつた、と、あと



になって聞いた。私達に親切で、日本語にすくなからぬ興味を示したのも道理だつたのだ。

その小侯が拳銃自殺したと私が聞いたのは、半年のち安東に帰ってまもなくのことである。

(え・早乙女光子)



永畑道子

今はボタン一つで何でも間に合う便利な世の中。しかし人々の心は次第に閉ざされ孤立してゆく。いちばんの犠牲者は子どもたちだ。筆者は親と子の教育相談の仕事に長らく関わっているが、ここにも深刻な状況の相談が次々と持ちこまれてくる。何か大事なものが壊され失われてゆく——そんな危機感の中で筆者は自らの生い立ちを回想す

る。生まれは九州の熊本、火の国の女である。生活は貧しかったが誇り高く心豊かに生きた両親から受けた影響は大きい。「私はこの母によって人間をつよく鍛えられたような気がする。：貧しさは私にとって心の豊かさを限りなく作り出してゆく荒野のようなものだった」と述べている。多感な青春時代、やが

て上京、結婚、子育て、仕事、と半生のドラマが数十篇の章に分けて簡潔な文体で綴られている。人を愛すること、愛されることの尊さ、偉大さ。さまざまな人との出遇いが織りなす美しい世界を今こそ回復しよう、と、筆者は真剣に訴えている、そんな作品である。ご次男の風人君の装幀になる表紙がまた美しい。

海電社 二二〇〇円（Ｔ）



長岡輝子

何と素晴らしい人生！二人の男性にこよなく愛され才能を発揮した女性。私は正直言って、長岡輝子の存在を知らなかった。演劇界には興味がなく、芝居は生まれてから数回しか見ていない。それも弁当や菓子付きの招待されたものだけ。役者と相撲の世界は常人には理解できないものという。その常識を、この本はくつがえした。

読んでいくうちに、新劇の歴史が面白いように分かってくる。昭和の歴史がオーバーストップして描かれている。思わずのめりこんで時間のたつのも忘れてしまった。当時の一般庶民から見れば、中流の上という恵まれた家庭と教養豊かな両親、美しい兄弟姉妹愛に結ばれた一族。有名人との出会いも絢爛豪華に描かれている。小説よりも、

はるかに興味が深い。彼女は役者にならなかったとしても、違う道で大成したに相違ない。文章の確かさ、表現力の巧みさ、冷静な観察力などが、それを物語っている。この本は明治、大正、昭和と生きてきた一人の女性の自伝であると同時に、日本の激動期の貴重な記録でもある。

草思社 一八〇〇円（Ｓ）

ベジタリアン・ライフ・ノート

地球のリズムで
生きてみる



鶴田 静

ベジタリアンとは肉を食べない人たちのこと——と私たちは軽く考えているけれど、この本を読むとそれは人間の生きかたの基本に深く関るものだということが分かってくる。

楽しいカラー写真で著者の農

業生活？を織りこみながら展開するエッセイは、ベジタリアンとしての暮しと思いかから生まれてきたものばかり。
お料理の好きなひとにも、自然保護の運動をしているひとにも、子どもを育てているひとに

も役に立つさまざまなテーマがきめこまかな、しっとりとした文章で書かれている。地球のリズムに合わせてゆったりと生き、自然と共存する暮しへ、私たちの目を開かせてくれる一冊。
文化出版局 一四〇〇円(K)

自立家族

個の時代の
ライフ・イメージ



四方 洋
渡辺まゆみ

女と男の結びつきはおそろしい勢いで変化しつつある。右を向いても、左を見ても、離婚、不倫、別居結婚、同棲、シングル。一見幸せに見える家庭では、夫と妻の心ははなればなれ。この状態を無視できる人はもう誰もいない。

そうした現状の中からまた一冊の本が生まれた。毎日新聞で「離婚の構図」を連載した現場の記者、四方洋さんと、第一線のライター渡辺まゆみさんのコンビ。
シングルで生きる人々の愛のかたち、主婦業に挑戦する退職

校長の例、ペーパー離婚をして妻の「粹」に閉じこめられるのを防ぎつつ、自由な関係を夫と保っている妻……一昔前には想像もつかなかったさまざまな関係が、ふえている。渡辺まゆみの筆の柔軟さが、とりわけ印象的である。有斐閣六〇〇円(M)

男と女講座



青木雨彦編

複数の筆者が書いているこの手の本は、見かけだけ立派でも底が浅い——というジレンクスを破る本が出た。
「男にとって女とは何か」「女にとって男とは何か」「なぜ男であることを拒否する

男が増えたのか」「非婚という名の結婚」時代がきた」「なぜ熟年の恋をためらうのか」など、あらゆる角度から現代の男と女の関りを追求しているこの本は、三石由起子、円より子、渡辺恒夫、そして田中喜美子な

ど、最高の書き手を揃えて、内容の充実が驚くばかり。女たちの性が、いまや男なみの自由をかちえた実態があらゆる角度から浮きぼりになっている。
厚さのわりに値段は激安！
フォー・ユー一五〇〇円(K)



屋根より低い こいのぼり

千葉県松戸市●近藤美子

一月に生まれた息子の初節句にこいのぼりを買うようにと実家から二万送ってきた。さっそく四月の天気の良い日曜日にデパートへ行く。風になびく大きなこいのぼりの長いポールをたてるほど広い庭はない。そこで団地サイズのこいのぼりをベランダに泳がせることにした。

家に着くとさっそく組み立て、

十分ほどして完成したこいのぼりを広い空へ泳がせてみる。なんとなく意味もなく気恥ずかしい。三匹のこいは弱い風に吹かれて少しだけなびいた。

それを見ていた近所の女の子が二人、

「屋根より低いーこいのぼりー」
と歌う。

そうなのです。二階のベランダに飾ったこいのぼりは、それでも屋根より低かったのです。

昔の歌にあるように屋根より高いこいのぼりを、今の私達は息子に飾ってあげることができません。

「はしらのキズはおととしのー」
我が家の柱には、前の住人に二人の男の子がいたため、その二十年の歴史がきざまれています。二階の柱は無傷なので、そこに我が家の歴史をきざむことにしましょう。

地価が高騰し、真面目に働いているだけでは、広い土地付きの家は買えません。借家を追い出され、それこそマツチ箱のような中古を購入してまもなく一年。洗面所と脱衣所がないため、台所が洗面所と兼用。そして階段の一番下のわずかな廊下が脱衣所です。「いつか洗面所のある家に住みたいね」と話していた私達。それにもうひとつ「屋根より高いこいのぼりを泳がすことのできる家」という条件もつけよう。

あたり前のようなことが、とてもせいたくに感じられてしまう。その逆に信じられないくらいにのせいたくがふつうに思われしてしまう。

この先、息子たちの時代はどうなるだろう。いつの日か、こいのぼりは日本の空から消えてしまうのかもしれないな、とふと思った。

じゅうのう

愛知県岡崎市●鈴木昌子

「じゅうのう」という道具がある。小型のベース板のたての部分物をのせたときにそれが落ちないように上に折り曲げ、とがった部分に柄をつけた小さいスコップのようなものである。私達が子供のころはかまどでごはんを炊き、風呂も薪で焚いた。太い薪を燃やしたとき後に残る火を「おき」と呼び、火鉢に入れて暖をとった。

このおきを運ぶのに「じゅうのう」が使われていた。じゅうのうはどこの家にもある生活必需品であった。薪がガスに代わり、火鉢はストーブに取ってかわった。このじゅうのうを見ることも久しくなかった。

私に移りすんだ町では月に一

度の清掃日があり、道端の草刈り、どぶ掃除をし、空き缶拾ったりゴミを拾ったりする。近ごろの新しい町のどぶはU字溝が使われており、その中のゴミや土を掃除するのはなかなか厄介である。ちりとりでは幅があつて入らず、かといつて手ですくい取るには手間がかかる。このとき「じゅうのう」がとても役に立つ。適当な幅がU字溝にぴったりで、立派にちりとりとして働く。

はじめ古い家で使われていた遺物の再利用かと見ていたが、そうでもなさそうである。気をつけて見ていると、日用品売場に今も売られている。私も一本買い求めた。

犬の散歩にじゅうのうを持つて歩いている人がいた。アスファルトの上落ちたままの排泄物はいかにも汚らしく、顔をそむけたくなる。あこがれのバリ

のモンマルトルでも犬の糞があちこちにあり、それが踏みつけられて石だたみにぬたくつてあるのを見て、興ざめたものだ。後始末をするにはじゅうのうはいいかもしくない。

あるとき、犬と散歩している人が、犬がかまえたお尻の下にじゅうのうを置くのを見て、驚いた。うんちを拾うのではなく、じゅうのうの上に落とさせるのである。便器として使うわけである。

「じゅうのう」とは「十能」と書くのかもしれない。漢方でも血圧、皮膚病、肝炎などいろいろに用いる「どくだみ」を別名で「十葉」というのだから。

子供にその光景を話して聞かせると、大好きの子犬が「そんなことをしてはジョリー（犬の名）がかわいそうだよ。犬は自分のテリトリーを広げるために少しづつ、あちこちでウンチャ

しっこをするんだよ」

「ウン」ジョリーのためにその使用法は止めにした。それにしても一度落ちたウンチを拾ってもテリトリーは広がるのだから。

運動不足が気になる主人が万歩計をつけてジョリーを連れ歩き始め、私もお伴することに。春宵一刻値千金と、うつとりと星空を見上げてみると、「オーイ、バキュウムカーじゃないバキュウム母さん」

ロマンは現実に戻されフンガイしつづ、糞をじゅうのうで拾い集めた。

ましめん

（38歳）
大塚市東淀川区●小林千歳

あれこれ考えていると、じきに名古屋に着いた。

あと三時間高速バスに乗れば

父のところへ行けるが、突然帰るのはためらわれる。日曜日でもないし、子供も連れずに、ちょっと顔を見に寄ったと言える距離ではないのだ。

それに、父だって喜ぶどころか、何かあったのかと心配するに決まっている。

本当のところは、歯医者へ行くつもりで家を出たが、新幹線のガード下を自転車走っているうちに、無性に母の墓参りがしたくなっただけのことだ。

これほど衝動的な行動をとる自分に驚き、とりあえず地下街へ下りた。ズーッと昔、小学校の社会見学で東山動物園へ行ったときのことを思い出しながら、ましめん屋に入った。

八丁味噌で煮込んだあつあつのましめんを食べ、やはり里帰り土産を持って子供を連れ、前ぶれをしておいてからするのが一番だと、考えなおした。

せっかく名古屋まで来たのだから、バスターミナルまで行けば、誰か故郷の人に会えるかもしれないと思ったが、それもやめた。

再び新幹線に乗ってぼんやり外を眺めていると、なんだかむなしくなってきた。それでも、新大阪が近づくと、高くついたきしめん代がもったいなくて、虫歯の二〜三本は治療できたのに、などとせこいことを考えている……。

文明考

埼玉県浦和市●田中える

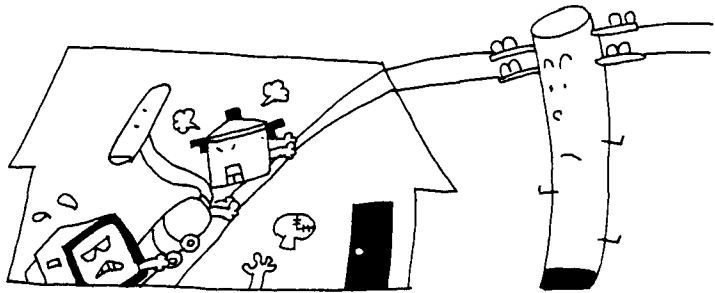
戦後三種の神器などと言われ、家庭生活用品がぐんと便利になってきました。毎年新製品が発売され、主婦の仕事がとて楽になってきたのは確かです。しかし、便利さの陰にかくれ

てとても困ることがあるのを私は最近発見しました。

①事ある毎にパチパチ写真を撮るのが大好きな私。傑作を撮るぞとズームパカチョンカメラを買いました。ズームってこんなに便利よと家族友人に見せびらかしていたら、五年は持つという電池が二年で終わってしまいました。電池がなくなると最近のカメラはピクとも動かないのです。一枚も写真が撮れません。電池のなくなる心配のない手動式がなつかしい。

②趣味のカメラはさておき、次は炊飯器がこわれたとき。「何だかごはんがまずくなったな」と思っていたら、やっぱり炊飯器の調子が悪いのです。七年も使ったし、もう寿命かな。とうとうスイッチがつかなくなってしまういました。

早速修理にと思ったのですが、修理期間中「ごはんはどうやっ



て炊くの」。そうですよね。朝起きると温かいごはんが「ハイ炊けてます」という具合にはいきません。仕方なくしばらく鍋

でごはんを炊くことにしますか。それとも買い替えましょうか。

③代わりのもので仕事ができる電気製品は良いですよ。今度は三年しか使っていない掃除機がこわれてしまいました。「昔はホーキでやったものです」と姑に言われそうですが、ホーキなんて置いてない家が多いのではないのでしょうか。それにホーキではジュータンのはこりは取れません。住宅自体が掃除機が必要ないようにできているのです。「困った、困った」新しい掃除機に買い替えるにはまだもったいないし、二台あっても置き場所がないし……。

④そんなこんなで考えていると、工事中のため停電です。昼間だからいいやと思っていたら……：電気がつきました。とたんに家中のラジオが鳴り出したのです。デジタル時計の目もりがすべて狂ってしまったようです。

やれやれ文明生活って忙しい
もんだわい。

わいわいガヤガヤ

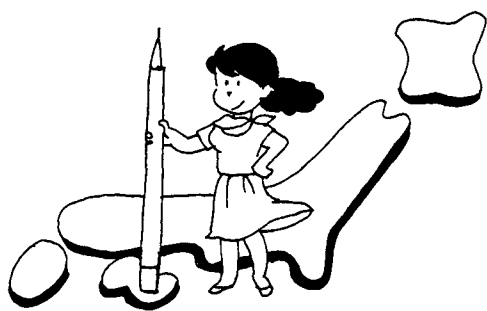
東京都目黒区●宮崎千鶴子

自分の考えをスマートに人に
伝えたい。そんな思いが高じて、
三年前から月一回の作文教室に
通うようになりました。新聞の
投稿にも何度か挑戦し、度胸試
しもしてきましたが、どれも現
状で足踏みしたまま先へ進みま
せん。そこで今春、末の子の入
学を機に一大奮起、一歩前に踏
み出す決心をしたところ、おり
よく「書きたい女たちへ」と題す
る講演の記事が目にとまり、「わ
いふ」の存在を知ったのです。
早速講演会に足を運びました。
田中編集長や和田先生のお話と
人柄にグイーッと引き寄せられ
るものがあって、決意にも一段

と弾みがつき、即刻会員登録を
済ませて参りました。

「書く」作業は健全な身体と一
本の筆があれば、全国どこで
も可能です。私のような転勤族
には有難い自己主張の場でもあ
ります。

そもそものはじまりは、東京
から北国盛岡へ転動したときで
した。都会の文化的刺激が忘れ



られず、縁をつなぐ手段として
中央紙に投稿したのが始まりで
す。出産、育児に追われ、その
数は知れたものですが、地縁血
縁のない土地で心の拠り所とな
ったことは間違いないありません。
五年を経、東京へ戻ってきたの
も東の間、再び盛岡への転勤命
令。

計画的に人生設計を立てられ
ない。腰を据えて一つのこと
に取り組めないのは転勤族の宿命
です。それだけに「書く」とい
うことは継続して成し得る唯一
の楽しみなのです。「書きたい
女たち」と手を結び、女性の感性
を研き合いながら、社会人のは
しくれとして自覚を持ち続けら
れればと願っています。「わい
ふ」のお仲間の皆さん、よろし
くお願いいたします。

蛇足ながら、二一一号の就職
へのアンケート用紙、恨めしく
思いました。女性が内外で働け

る条件は、やはり都会にはかな
いけません。地方には働き口も、
後押しをする組織もないのです。
強力な女性のパワーで地方にも
このような組織の広がりを切に
望みます。

古き良き 図書館

千葉県市川市●近藤圭子

去年の八月猛暑の中、市川市
に引っ越してきました。新しい
土地というのは不安がつきま
とうものです。引っ越したその夜
から、暑さのため眠れぬ夜をす
ごしました。これまで木更津で
のんびりすごしていた子供たち
にとつて、自然の少ない町市川
は不満のようでした。でも最初
のころは、私の目をぬすんでは
緑を求めて原っぱに出かけてい
きました。今でも、里見公園や
じゅん菜池公園には連れていく

ようにしています。

緑がないというのは、人間にとって何とも不安なものです。

私にとって市川の印象は、新旧入りまじった文学の町といったものでした。中でも一番印象に残ったのは、緑に囲まれた古い図書館でした。

私は「戦争を知らずに育った」世代だけれど、まだ現代のように多様化、機械化されていなかった時代に青春時代をすごされた戦中派の人たちのひたむきさを、この図書館の古びた木造の中に感じることができました。

戦争で思い出しましたけれど、先日、お料理教室で、セロリの茎の先のほうを捨てていた私に、六十歳ぐらいの男の方が、セロリは葉っぱまで食べられるのですよ、と注意して下さいました。物を大切にすることを知らない自分がとても恥ずかしく思われました。そして、「戦争争って

いたいどんなものだったんだろ」と遠いものをみつめる思いで考えている自分にふと気がつきました。

オバサンパワーに たじたじ

神奈川県横浜市●溝内道子

先日、某テレビ局のニュースキャスターの講演会を聞きに行った。その日の予定がぼつかり空いたのであまり期待もせずに行ったのだが、話の内容はともかく、そこに来ているオバサン達の熱気には驚いた。

私は開演十分前ごろ会場に行ったが、一階のエレベーターから上の階の受付まで四十代・五十代・六十代のオバサン・オバサン・オバサン……。その中に若い(?)私がいるのが場違いの感じがした。

会場はすでに満員。かろうじ

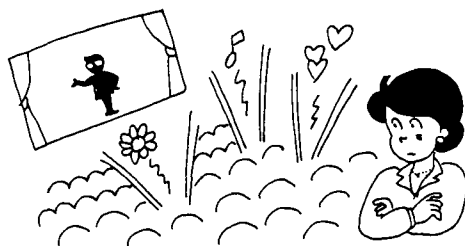
て後ろの隅に席をとったが、周りを見まわして再びびっくり。四、五百人はいる。よくぞここまで家庭の主婦が一堂に集まったものだと感じする。

司会者の「先生、先生」の連発の紹介も田々しく、講師の入場。一斉に沸き上がる拍手。あつげにとられたのは、キャーキャーいう黄色い声こそなかったが、フラッシュの光・光・光……。まるでスター並みだ。

話の内容は別として、アナウンサーだけあって話し方はうまい。適当なウィットも交えての話は聞き手を飽きさせない。一言講師が言うたびに、笑い声や「ウァー、キャー」という声がおこる。ついでに個人的見解も(いわゆる私語)。合間にカメラのフラッシュ。

その様子を見ながら、ここに來ているオバサン達は今日の話聞くことで、何を学んで帰っ

ていくのだろうかとか少々心配になってきた。スター並みの講師の一言にキャーキャーワーワー言って、楽しいひとときを過ぎて終わりなのかしら、反面、こうやって四十代、五十代の主婦が昼間出てきて楽しめるということは、女の人達も自由になってきたと喜ぶべきことなのかしらとも思う。でも願わくば、



この女の人のパワーをもう少し別なことに使ってほしい気もする。

講演終了後、握手攻めにあっている講師を見ながら、こうやって講演会に来ている私も彼女達と同じオバサンの一員なんだなど、変に納得した気にもなった。

パソコン通信に夢中

東京都品川区●岩崎八恵

パソコン通信をご存知ですか？ 家庭にあるパソコンを、電

話回線を使ってホストコンピュータとつなぎ、情報を取り出したり、やりとりしたりする通信システムです。

パソコン通信では文字が送れますから、手紙(電子メールといいますが)のやりとりができるのです。またあちこちに住んでいる何十人もの人に同時に手紙を送ることも可能です。

こちらからメールを出すときに、相手のパソコンが動いていなくても大丈夫。このシステムではおおもとのコンピュータ(ホストコンピュータ)が郵便局のような働きをして、こち

らから出したメールを相手のパソコンのメールボックスに入れてくれるので、アクセス(ホストコンピュータに電話すること)さえすれば、いつでも読んでもらえます。


ホストコンピュータへは、最寄りのアクセスポイントから電話すればよいので、ほとんど市内料金で済みます。

たとえば、札幌に住んでいるあなたが、大阪と鹿児島の方にメールを出したとしても札幌市内からアクセスできるので、長距離通話にはならないというわけです。

パソコン通信にはこの他に、電子掲示板や各種の情報サービスがあります。またたいいのネットワークにSIGというものが用意されています。SIGとは(スペシャル・インタレスト・グループ)という意味で、共通の趣味やテーマでグループを作りたい人のための電子会議サービスです。会議といっても井戸端会議の雰囲気です。

私の夢は八わいふVというSIGをどこかのネットに作ることです。そうしたら合評会とかお知らせとかその他をリアルタイムで楽しめるのに……。もし

なのもしろ学校
ナトリの
ライブラリー名取弘文著



あれしちやいけない、これはマズイの学校の中、時にとほけて、時にマシの自分と照れながら切り返していく家庭科専科ナトリの技の数々をイキのいいライブ仕立て。

定価1500円

自然食通信

隔月刊 定価550円
38号 6月15日発売

特集「安くても」「安全」か 輸入「肉」「乳製品」

工業製品輸出の見返りにと諸外国から要求が強まる農産物の輸入自由化。あちらの武器「超安全」のしくみと、安全でおいしい食べものづくりで活路を拓こうと奮闘する日本の農家の話も。

書店での御注文は発売元・新泉社で
東京都文京区本郷2-6-10
☎03(816)3857 振替・東京5-78026
自然食通信社

あなたの家にパソコンがあるのなら、ぜひパソコン通信に挑戦してみてください。こまぎれの時間しかない主婦にとって、いつでもどんなときでもできるパソコン通信は、とても便利なコミュニケーションの手段です。

PCIVANに加入なさっている方がいられましたら、ZUB76236 YANNPEEまでメールを下さい。

お弁当 一週目

東京都品川区●三上初美

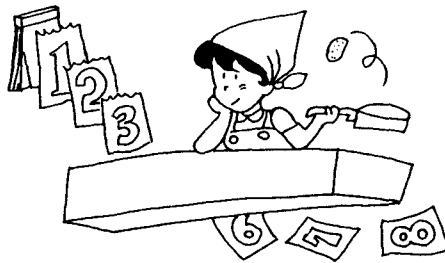
長女が高校入学。いよいよお弁当作りが始まる。そう思っただけで、気が重かった。無器用なうえ、料理は大の苦手。毎日の献立さえ四苦八苦なのに、さらに小さな容器に詰めるお菜を考えるなんて。弱った、困った。受験という暗雲に翻弄されてい

たところが、まるで遠い日のような狼狽ぶり。人には私は「お弁当恐怖症」とか、冗談に紛らわしながらも内心は必死。器用でお料理のうまい人が、ほんとに羨ましい。

入学式が済んで次の日から、早速お弁当。幾日か頭の中で描いていたとおりに作り、持たせた。栄養面でどうかはさておき、まず彩り。トリ唐揚げにブロックリー、焼きかまぼこ、こんぶ佃煮、しば漬けを添え、デザートにいちご、のメニュー。二日目は、鯛西京漬け焼きとにんじんの友禅いりを中心に調えた。三日目、大失敗。パンと冷凍食品で急場をしのいだが、長女は知らない。パンじゃないほうがいいと言われたときも、あら、そう。

実は、チリソース風味炊き込み御飯とやらを試みたのである。前夜、メモを片手にしっかり下

ごしらえをしたつもりだった。初めてなので一抹の不安はあったけれど、まさか生炊きとは。これに懲りて、四日目、五日目とまた元に戻って見栄え良けれ



ばで作る。六日目でシーフードの焼きソバ。そして、やっと日曜日を迎えた。

私の手帳には、一週目のお弁当の内容が記してある。いつの日かは笑え懐かしめるか。

おからどん

神奈川県横浜市●村上みどり

一年ぐらい前から二、三日おきにおから料理に励んでいます。主人の知人に豆腐屋さんが出て、買ってきたことから始まっているのです。一回に二キログラムほど。私はそれを十等分ぐらいにしてサララップに包み冷凍室へ。こうしておくと、鮮度が保たれるようです。

安価な上に食物繊維が多く、従って快便を促し、成人病予防になります。でも美味しく作るのは案外手間もかかり、むづかしいのですよ。

だし汁の分量、微妙な味つけ。ねとつかず、ばさつかず、しつとりとした風味にするには。

一般的には、具にアゲ、にんじん、ごぼう、ひじき、こんに

わいわいガヤガヤ

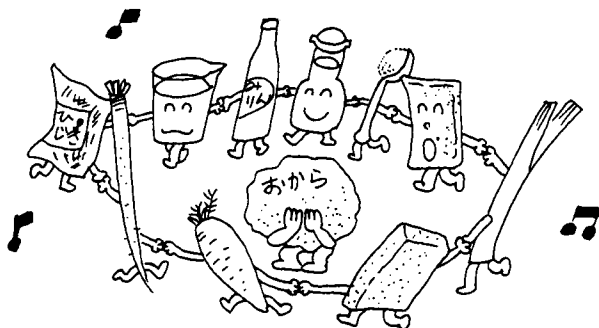
やく、ねぎなど。まずこれらをいため、次におからとだし汁を加え、軽く混ぜ合わせながら、しょうゆ、みりんを味つけし、最後にかくし味として砂糖をひとつまみ。

これが味のきめて。忘れないように。素朴な深めの器に盛って出来上がり。どうぞお試しください。

人によっては好き嫌いがあるでしょうが、子供などには洋食のつけ合わせに、海苔やサラダ菜に巻いたりして見た目も美味しそうに食べやすくして。

作り方がいつも同じではマンネリになるので、材料を変えたり、お菓子ふう（レーズン入りマドレーヌ）にしたり、あるいはコロケと私なりにアレンジして、楽しみながらやっています。

文字通り「たかがおから、されどおから」といったところ。



ストックがきれると主人はすぐ買ってくるのでこの作業はずっと続くことでしょうね。まるで仕出し屋のおかみさんになりきって。

今ではすっかり慣れ親しんで「おからさん」と呼んでいます。

夢

神奈川県横浜市●匿名

また、いつもの夢をみてしまった。

バスに乘ろうとしている、グズグズしていると乗り遅れてしまう、早くはやくと気ばかり焦っているのに乗ることができない、何故だかわからない、重たい荷物に手こずっているわけでもないのに、どうしてもそこへ走り寄って行けない。とうとう発車してしまった。車体に青い色の横線があったのが妙に記憶にはつきりしている、ターミナルを大きく迂回して、そのバスは私をおいて行ってしまった。「幸福行」に乗り遅れてしまったんだ……。そんな思いがした。もうひとつ、よくみる夢がある。

潮が満ちてくる、とても速い、大きな波が足元を洗う、こわい、どこに逃げよう……。周りには誰もいない……。このあとどうなったのか、いつものことだが覚えていない。満ち潮の夢だもの、いい夢なんだと思えば、あ、あの恐怖感がとても気になる。

前者と後者と、人生の何かを暗示しているのだとしたら、それは何なのだろう。いま極端にふしあわせとは思ってはいないけれど、いつも何かを逃げてゆく、いつも、わけなく遠回りの道ばかり歩いているような気がしてならない。プスプスとくすぶっている不満と、つねに胸中を去来する不安な心。揺れが、映像となって闇の中の私を襲ってくるのではあるまいか。この夢が何を意味するものなのか探ってみたいという思いと、たかが夢、そう深く考えることもあ

るまいという思いが、今日も交差する。

わいふと私だけのバースデー

千葉県柏市●若林美智子(32歳)

ここ数年、ハッキリ言って、あまりイイことはありませんでした。喘息とまでいかなかったも、慢性の気管支炎や咽頭炎などで、要するにノドが悪くて、また風邪もひきやすく、年中医者通い。

それでも私は、通信教育でワープロを習ったり、新聞・雑誌などに投書・投稿をしたり、自分なりに精いっぱい頑張ってきました。先日もワープロ関係で、少々頭にきたことがあったけれど、次には別の会社で親切な女性とも、電話だけでも出会えた？し、「やっぱり、人間はいつも、おだやかな心でないといけないな……」と思いました。

四月二十一日、私は三十二歳の誕生日を迎えました。その日、本屋さんで偶然、「WIFE」を見つけた。私は病弱で「ワイフ」じゃなくて、未だに独身だけれど、何だかとても、よいに本にめぐり会った気がします。女性の皆さんのいろいろなお話がのっけていて、面白かったり考えさせられたり……。その割に安い？ですネ。隔月刊ですか？でも、隔月のほうが、じっくりと読むことができますものネ。私は三十二歳になって、決意したことがあります。投稿歴も六年目。「私は絶対にモノ書きになりたい！」と思っています。随筆とかそういう類の……。あと子供供達への童話みたいなもの。これは病院で会った入院中の男の子の持っていたカゴいっぱいの本を見て……。

私の寿命がどれだけあるかわからないけれど、とにかく書き

ます。その決意をして本屋さんに行ったら、貴誌と出会った？わけです。これも何かの縁かな……？ 貴誌もこれからドンドン頑張ってくださいネ。私も負けずにドンドン頑張りたいと思います。



ます。三十二歳、私のあらたな挑戦？です……。

(え・小宅昌枝)

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。

(六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

「わいふ」年間分をプレゼントにお使い下さい

●ご結婚のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。

お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

次号投稿募集

▼特集テーマ原稿

●五月十九日の朝日新聞「ひととき」欄に夫が過労で死亡し、残された妻が、それを労災死として認めてもらおうと、手続きをしているという投稿がでていました。

まったく他人事ではありません。

そこで今回は、特集テーマ原稿とワンポイント情報とを一緒にして、「私の夫の労働人生」というレポートを募集いたします。あなたの夫が、どんな働きかたをし、どんな日常生活を送っているか。次のデータをもろさずお書きこみになってお送り下さい。

- ①夫の年齢
- ②結婚年数
- ③職業（公務員・教員・自営業主など、

でもけっこうですが、できるだけくわしく、公務員なら区役所出張所勤務と
いうように書いていただけるとありがたいです）

④年収（税こみ）

⑤毎日の出勤時間・帰宅時間

⑥一月の残業時間・勤務形態（休日出勤など）

⑦家へ帰ってからどんな状態にいるか

⑧休日のすごしかた

⑨あなたとの関係（会話・共通の趣味など）

⑩子どもの教育について、あなたの夫はどんなことを考えていますか

⑪健康状態

⑫夫の趣味

⑬夫の人間観

以上は夫の現在についてのデータですが、結婚以来、夫の職業生活の移り変わりにつれて働き方にどんな変化があったかもレポートして下さい。

簡条書でなく、右の項目をもりこんで文章化して下さい。枚数四百字詰原稿用紙五枚―十枚

締切六月末日

誌上匿名でけっこうです。

もちろん原稿には本名と住所をお願いします。

△氏名・住所を秘密にしたい方▽

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をこらして下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。

「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

△仕事をしたい方へ▽

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事か）したいですか」というアンケートをお送りしたことがあります。その後の新会員、以前と状況が変わって、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

わいふ 投稿規定

●書くもヨシ 書かぬもヨシヨシ

●ドンドン書いて
グイグイ載せます！

を、たっぷり味わわせてくれるよい文章を
お待ちします。

・ホビー&レジャー 今や余暇時代。趣味
のない人は老後がミジメとか。楽しい体験
を募ります。ガイド的なもの、こんなこと
をして面白かった、どこそこへ行ってよか
った、どこそこの何を食べておいしかった
など、情報もお寄せ下さい。

・生む・生まない・生めない 妊娠・出産
避妊など、女の性にまつわるさまざまな体
験をお寄せ下さい。

・読んでみました 書評のコラム。どんな
本についてもけっこうです。女性問題に
限らず、視野の広い読書体験をおしらせ下
さい。

・わいわいガヤガヤ どこにもあてはまら
ないものを、押し込むのが例になっている
スペースですが、気軽に短いもの（ハガキ
でも結構）をお寄せ下さるのに好適。初心
投稿者はぜひまずここへ。

・サブプレシブ 本誌の投稿や記事につ
いての、反響をおのせします。感想、反論、
何でもどうぞ。

・情報コーナー おしらせ、募集、お願い

●定期購読者になればどなたでも（もちろん男性でも）投稿できます。誌上匿名・仮名も可。ただし原稿には住所本名を明記すること。（無記名のものを受け付けません）

●次のコラムへご投稿をどうぞ！

・女と男 夫について、恋人について、友達について、職場の人について、または行きずりの人についても。女から見た男、その人との関係。とにかく女と男についてのすべて。

・家族の肖像 あなたの親、夫の親、それぞれの兄弟、子供たち、その他親戚、いろんな家族についての観察、批評、驚嘆など、よそでは言えないホンネを言って下さい。もちろんホメても結構。

・子ども中ども大ども 親子関係についてのコラムです。子育て苦心談、失敗談、後悔談、親子ゲンカ、反対に親子の楽しいふれあいについてなど。

・狂育ニッポン 幼稚園、小中高の学校、塾、受験、大学、専門学校に至るまで、教育についてのすべてをのせるコラムです。

・職場は多面体 あなたの職場レポートをお寄せ下さい。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、職業体験をどうぞ。

・オピニオン あなたの主張を公開するページ。人に知らせたい切実な体験について、政治、社会、マスコミへの批判、その他何でもこれだけは言いたい、ということ。

・エッセイスト・クラブ ずいひつのよさ

をおのせします。探しもの、交換、相談、何でも皆にたのみたいことならここへどうぞ。

・サークル日より 読者が連絡をとりあい、自主的につくるサークルがあります。サークルを作りた、という募集や、結成してこんなことをしています、という報告のページ。

●以上、エッセイスト・クラブのみ千六百字まで、ほかのものはすべて八百字まで。

オーバーしていても、内容がよければ掲載します。ただし情報コーナーは、なるべく短く、要件をまとめて下さい。

締切りは偶数月二十五日ですが、受付けはいつでもしています。

・特集テーマ原稿 テーマ原稿募集欄をお読み下さい。

・ワンポイント情報 一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定しますので、募集欄をごらん下さい。

・特別寄稿 ルポルタージュ、自分史、伝

記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適当と思われるものは掲載します。長篇なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推せんします。

自分史などの自費出版のご相談にも応じます。本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

・絵・カット・イラスト・写真 コミックも含めて募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、合わせてお送り下さい。

●投稿は一人一篇に限ります。ただし次のコラムへのご投稿とはだぶってかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サーブレイブ・サークル日より。

●ハガキ以外の投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みですので、ヨコ書きはご遠慮下さい（書き直すことになるので）。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所

・本名はそのすぐあとに並記して下さい。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書き下さい。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮下さい。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。

ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただき、ということです。

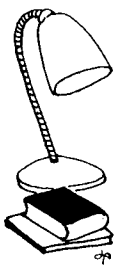
●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断り下さい。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断りします。

●二重投稿は固くお断りします。

●二重投稿は固くお断りします。



編集だより

●二一二号の特集テーマ、「子育て方針の食いちがい」には数通のご投稿があったのですが、テーマとすこしずれて書かれたものが多く、結局掲載できる作品がありませんでした。残念です。

●この号から合評会の内容をまとめて誌上に掲載することにしました。読者参加の座談会を過去二回、試みてみましたが、いまひとつ内容を深めることがむづかしく、今回は合評会を座談会として切りかえてみました。

一つの作品に対してさまざまな角度からご自分の体験も交えて語られ、なかなか充実した話し合いになったように思います。「わいふ」はあくまでも読者参加の雑誌ですので、こんな形でみなさまのご意見を誌上に反映できるのは嬉しいことです。

次の合評会は六月二十三日(木)午後二時~四時、編集部で行います。出席ご希望の方は前日までにお電話でお申し込み下さい。

●二一号奥付の年間講読料三六〇〇円は三九〇〇円の誤り、目次の「エッセイスト・クラブ」の長井敦子は長井淳子の誤りでした。訂正しておわび申し上げます。

●合評会で、「匿名を安易に使いすぎてはいないか。編集部はどういうつもりで認めているのか」というお声が出ました。投稿規定にもありますが、より多くの言論の自由を保障するため、匿名が必要なきがあらうと思うのですが、最近心なしか、必ずしも必要のないときにも、匿名になさる傾向が感じられます。基本的には、ご自分の言論には自分で責任をとるという意味で、できるだけ実名でのご投稿をお願い致します。

●「サブ・レシーブ」欄に、「あの投稿の内容は間違っている」という趣旨のご投稿がありました。しかしどこがどう間違っているのか、具体的な指摘がないので、漠然とした人身攻撃という印象が強かったのです。異見・反論は大歓迎ですが具体的なものであってほしいと思います。

また編集部へのご注文・ご批判を無記名でお送り下さる方がありますが、必ずお名前をお書き下さい。

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますの
で、折返しご送金ください。バックナンバー
のご注文も同様に。二冊以上まとめます
すと送料が半額以下になります。

WIFE

(隔月刊) 212号

1988年7月1日発行

印刷・浩文社印刷

定価 450円

(年間購読料送料共3900円)

発行所・樹グループわいふ

編集・わいふ編集部 ☎162

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

TEL (03) 260-4771・4773

郵便振替 東京5-110430

銀行口座三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

□購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申出がないと、お送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

創刊します

男と女の私生活誌

生活と意見

創刊号
6月20日
発行予定

人の心を動かすものは 行為ではなく 行為に関する意見である。
エピクテトゥス(『トリストラム・シャンディ氏の生活と意見』より)
読者投稿誌「生活と意見」が「わいふ」の後を追って創刊されます。
老若男女を問いません。人種・国籍・職業・学歴なども問いません。
普通な(でない)人の普通な(でない)生活と意見をお届けします。

〈A5判〉 ●定価300円

自費出版うけたまわります!

自分史、小説、詩、短歌、俳句、エッセイ、専門書、写真集・イラスト集……
生活と意見社のスタッフがあなたの本造りをお手伝いいたします。
リライト・原稿整理・レイアウト・校正・装幀などもいたします。
印刷・製本も趣味・御予算に応じて選択・組み合わせができます。
そして、きつとお値段も格安? だと思います。一度お問い合わせ下さい。

生活と意見社 東京都品川区上大崎1-19-32 ハイツ目黒206 ☎03-440-0927
発売元: ハーベスト社 ☎0424-67-6441

子育てや学校について考える 父母と教師の雑誌

母と子

7月号 年間定期購読予約を!
発売中 1部250円・年間3000円
見本進呈 (予約前納-送料サービス)

幼・小・中・高校生の父母・教師と共にあゆんで34年目です!

今月の視点 **子どもの悩み**

- つかみにくい悩みだけど……鈴木英雄
- いまに見ておれ……三木智子
- なんだか悲しくなる学校で……吉田孝雄
- 先生 俺たちの話を聞いてよ……横濱太郎
- 弁護士が受けとめる悩み……梶原和夫
- 空白卒業アルバム問題と学校教育……樋口保次
- 父母の学校参加、PTAでの教育論議を
- 誰が校則の見直しを進めるのか……今橋盛勝
- 校則見直しと子どもの人権……藤田恭平

- 投稿** 家庭訪問で考えること……加藤忠史
- 私のクラスの密告制度……山本育子
- せんせい——幼ない初恋……上笙一郎
- 民話を訪ねて——ことばと生活の変化……中村博
- 放射能汚染はむこう岸のことか……望月新三郎
- 〔メディアを斬る〕
- 帰ってきた「セサミ・ストリート」……鈴木みどり
- 読切** 悪いくせ……戸田唯巳
- 連載** ばらの木に咲く花……大町正文庫めぐり/子どもの本専門店めぐり/子ども劇場・おやお劇場の動き/映画紹介/母と子の本だな/他

〒203 東京都東久留米市中央町5-4-8
電話 0424-74-9125 振替 東京0-89701

母と子社

ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町1
〒607 ☎(075)581-5191代

編集部編 わいふ

A5判美装カバー250ページ・定価1400円送料300円

有料老人ホーム数々あれど、
新聞広告によく出るようなホームは、
素敵だけれど高いのが玉にキズ。
そう思ったため息ついているあなたに打ってつけ。
毎日のくらしのやりぐりに頭を悩ます主婦が、
買物上手のセンスを生かしてまとめたガイドブック。
ン千万円のホームはお呼びじゃない。
こちら一般大衆、ただのわいふ。
フツッ感覚の主婦が、
クチコミと足をたよりに、
老後のついのすみかの情報を集めました。
自立の目で見てたしかめて、
老後生活を自分で設計する。
「わいふ」たちの旺盛な自立精神に乾杯!
——推せんの言葉 樋口恵子

ガイドブック

入居金〇〜一千万円
生活費は年金程度

安くはいれる 有料老人ホーム

新刊のご案内

ビエツト君

河内美舟著・ベトナム難民児の成長記録
ポトピープルとして日本にやってきた少年の一二
歳からの七年間の心と体の成長を、里親の目を通して
て、家族や学校との関わりの中で描く。一三〇〇円

十代の四季

上田 基著・産婦人科医からみた思春期の性
若者たちにとって性とは何か。性教育は今どうなっ
ているのか。病院の戸をたたく子どもたちへの戸惑
いと焦りから、明日への道を探った。一三〇〇円

シリーズ〈女・いま生きる〉②⑧

女性史としての自伝

新藤 謙著 平塚らいてう等、明治・大正・昭和のそ
れぞれの時代に時流に抗って生きた女性史を語るう
えでは欠かせない九人の女性の生き方を、その自伝
を通して鮮やかに浮き彫りにする。二〇〇〇円